

K 2 (8,611m)

高みを求めて

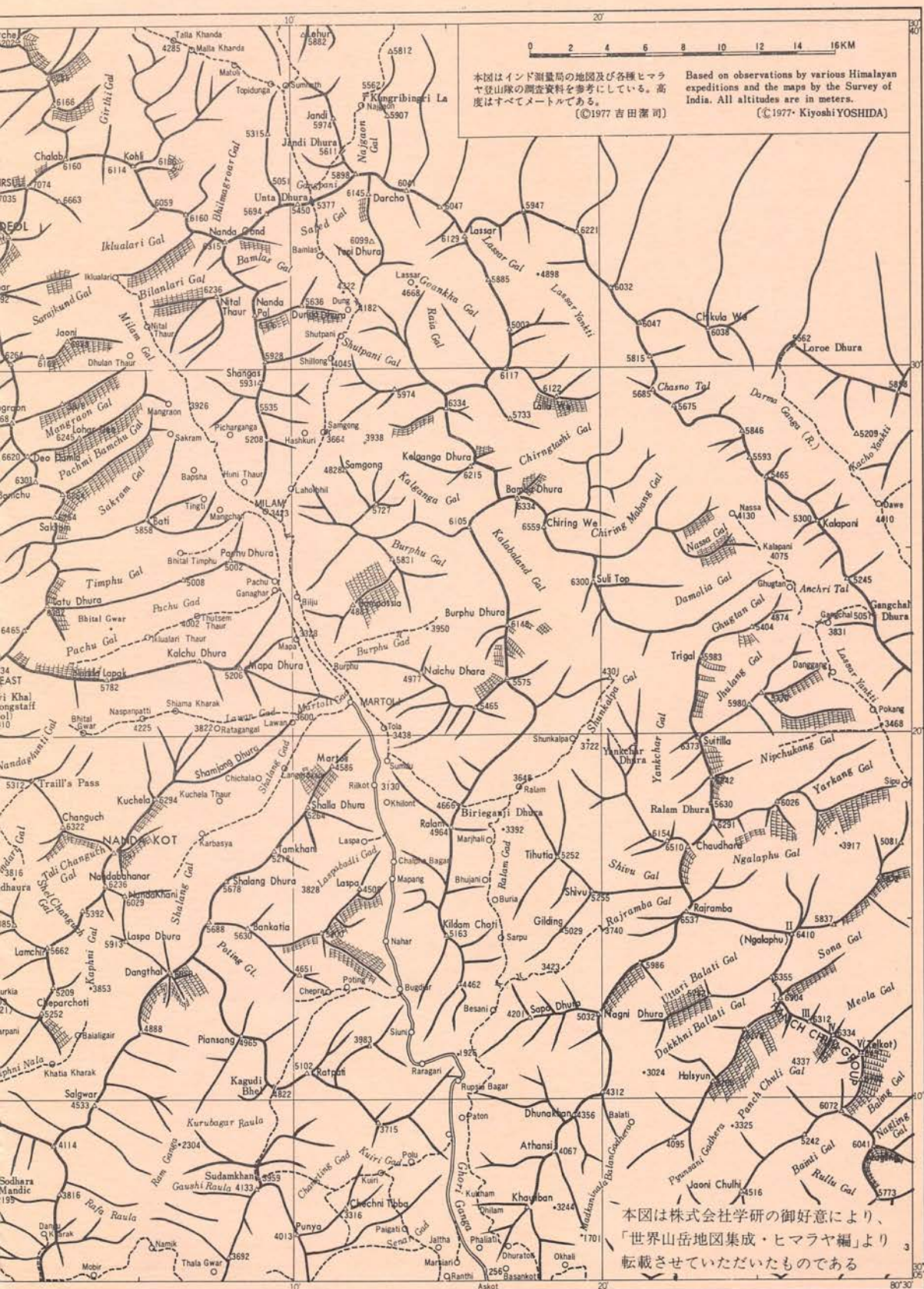
コンコルディア～ベースキャンプ間



HAI K2 登山隊 '85

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN



本図はインド測量局の地図及び各種ヒマラヤ登山隊の調査資料を参考にしている。高度はすべてメートルである。
(©1977 吉田藩司)

Based on observations by various Himalayan expeditions and the maps by the Survey of India. All altitudes are in meters.
(©1977 Kiyoshi YOSHIDA)

本図は株式会社学研の御好意により、「世界山岳地図集成・ヒマラヤ編」より転載させていただいたものである

HAJ K2 登山報告書

日本ヒマラヤ協会K2 登山隊

HAJ HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

序

日本ヒマラヤ協会

専務理事 稲田定重

未踏の地域、未踏の頂きを求めてさまざまな根まわし、渉外、資金など登山外ともいえる苦労などを重ねてきたH A Jにとって1985年K 2登山はまことにさわやかな、山そのものの遠征であった。とはいえ、参加した人間たちの喜怒哀楽がそこにくりひろげられたことはいうまでもない。登った者、登れなかった者、それぞれにとってK 2は、重い存在となって生き続けて行くのだと思う。何よりも、3年間、10数名の人間を引っ張ってきた隊長・飛田君の熱い心と無限の想いを忘れることはできない。

何故いまさらK 2南東稜へ、しかもオーソドックスなボーラーでというかも知れない。けれど、K 2隊には論理があり、H A Jにはめざす確かな目標があった。

K 2が終わったいま、それらの論理は充分に消化され、新たな発展の萌芽が見られるのはうれしい限りである。

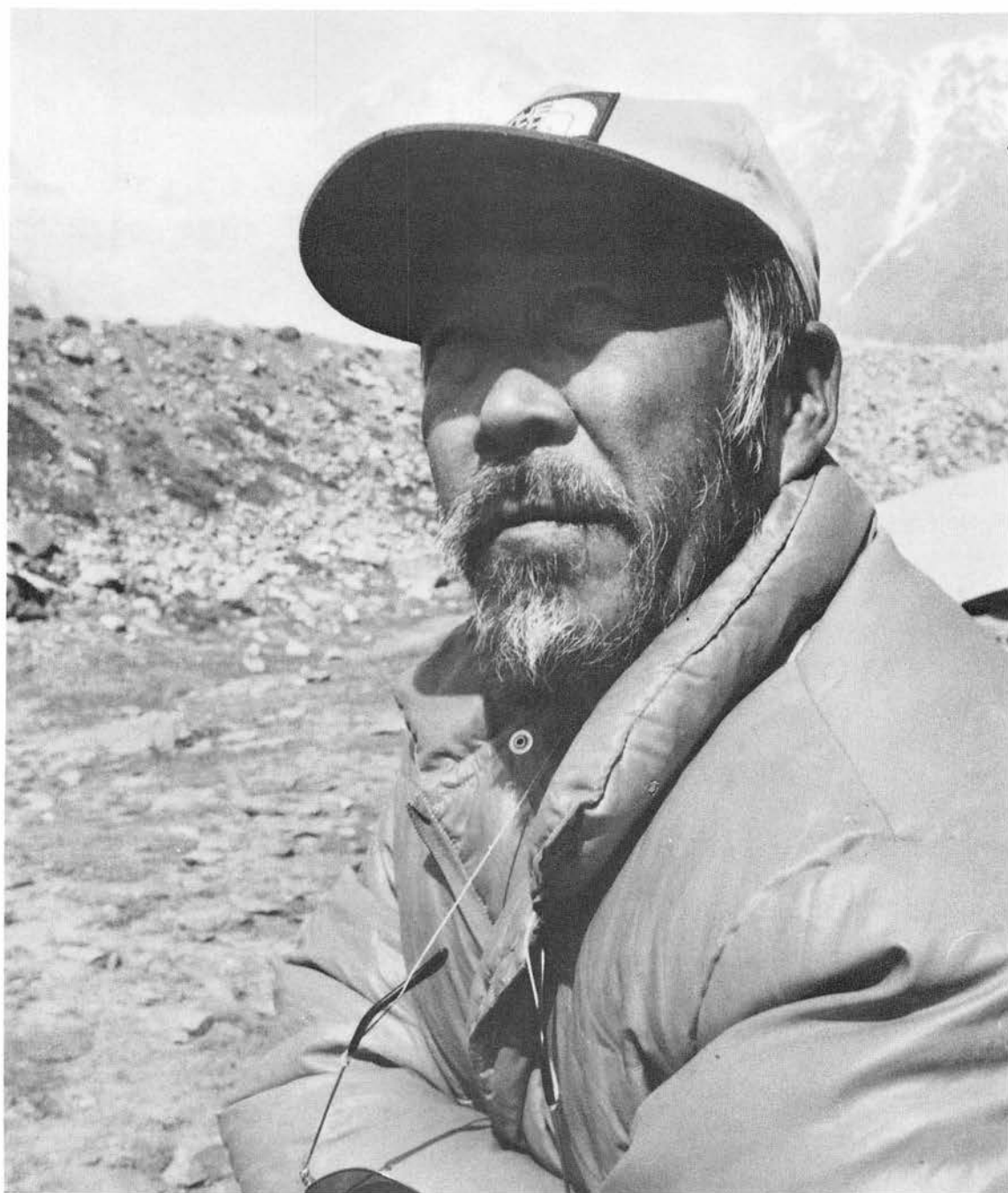
H A Jには20年に満たない歴史しかない。けれどトリスルからカンチへ、そしてK 2へという、隊長の歩みが端的に表すように人と人とのふれ合いと個人の真剣な努力の積み重ねは眩目すべき軌跡となって残される。H A Jには幾人もの足跡がからみ合い、太いトレースが出来ており、しかもずっと遠い将来に向けて更に太くなることを志向している。それを支えてきたのは一貫して人と人との信頼と情熱である。単なる年輪ではない真の伝統を見ることができると自負している。

かつてのカンチがそうであったようにK 2は新たな出発点で有るべきだと思う。そこでつちかわれた人間関係と高所経験の蓄積はK 2以上のことを個々にとっても組織にとっても可能にするはずである。

組織としてH A Jは、ここ数年幾つかの巨大なプロジェクトを展開することになっている。そのいずれもが極めて夢多いプランであり、高さ未知へのロマンである。文字どおり総力をあげてとり組まねばできない仕事である。加えて個人レベルの発想が次々と持ち上がってくるものと考えられる。

頂きを踏みしめた者にも、暗闇の彼方に登るべき頂きを残してきた者にも無限とも思える活動の舞台が開かれている。

この報告書を、新しい明日に向かって踏み出すメモリアルとしたいものである。



新貝 勲氏

プロフィール

- 1969年 ティリチミール登山隊副隊長
- 1974年 バスー遠征隊隊長
- 1977年 日本K2登山隊隊長
- 1982年 チョゴリ峰登山隊隊長
- 1983年 ナンガ・パルバット登山隊総隊長
- 1985年 福岡カラコルム登山隊隊長

「自分の山」

新貝 勲

今夏、日本ヒマラヤ協会隊がK2に立った。無酸素、速攻、厳冬期といった先鋭登山が主流化、未踏ルート挑戦がやはり命題とされる中で、今回のノーマル・ルート（アブルツツィ稜）からの登頂には、二番せんじ、三番せんじの声もあったが、それは私たち日本K2登山隊が1977年に、やはりアブルツツィ稜から登った時にも同じようないわれ方をされたものである。

私は出発前、今でも時々山岳雑誌に分別くさく評論めいたことを書いている一流新聞社の一流記者から、インタビューの中で「今回のK2登山は、ヒンズークシカラコルム会議主催の修学旅行登山じゃないんですか・・・」と、いわれた。“余計なお世話だ。どんな状況で登ろうと、他人には関係ないことじゃないか”その後の質問に私は、一言も返事しなかったことを思い出す。

◇

◇

◇

一昨年二月、八王子大学セミナーでの日山協海外研の時だった。今回の日本ヒマラヤ協会隊隊長を務めた飛田君と会った。小柄な彼だが、ヒゲは織田信長調にピーンと張っていかめしい。

「85年にK2に行きます。ルートはアブルツツィ稜です。」飛田君の目は光っていた。が、私は一瞬“おやっ”と思った。そのルートは1954年イタリア隊が初登で拓き、私たちも77年にはこのルートから登った。いわばK2のノーマル・ルートである。それなのに今さら、なぜ・・・。飛田君はその私の不審を見越したように言葉を継いだ。「8,000 m 経験者を一人でも多くつくりたいんです。」

なるほど・・・。私は大きくうなずいていた。77年のK2登山隊では、隊員39人中26人が8,000 mを経験した。「修学旅行・・・」といわれた隊だが、その経験者たちのその後の活躍がいかにすばらしいか。その何人かは今、日本山岳界の立派なリーダーに育った。

今年八月、私どもの登山隊（福岡登高会）がパスーⅠ・Ⅱ峰とナンガ・パルバットの登山を終えて下山の途中、深夜のインダスバレー道路をラワルビンディに向かっていた時である。ベシャムにさしかかる少し手前の茶屋で偶然にも飛田君ら日本ヒマラヤ協会のK2登山隊に出会った。「登りました」という飛田君の声が弾んでいた。それには“やったーっ”という熱気がこもっていた。初志貫徹の自信に満ちあふれていた。人間、一つのことをなしとげた時、その姿が崇高にみえてくるから不思議だ。小さなガス灯に照らし出される真っ黒く、ひげボウボウの隊員たちの顔にも同じような「自信」が漂っていた。私は“K2隊よかったな”と思った。

◇

◇

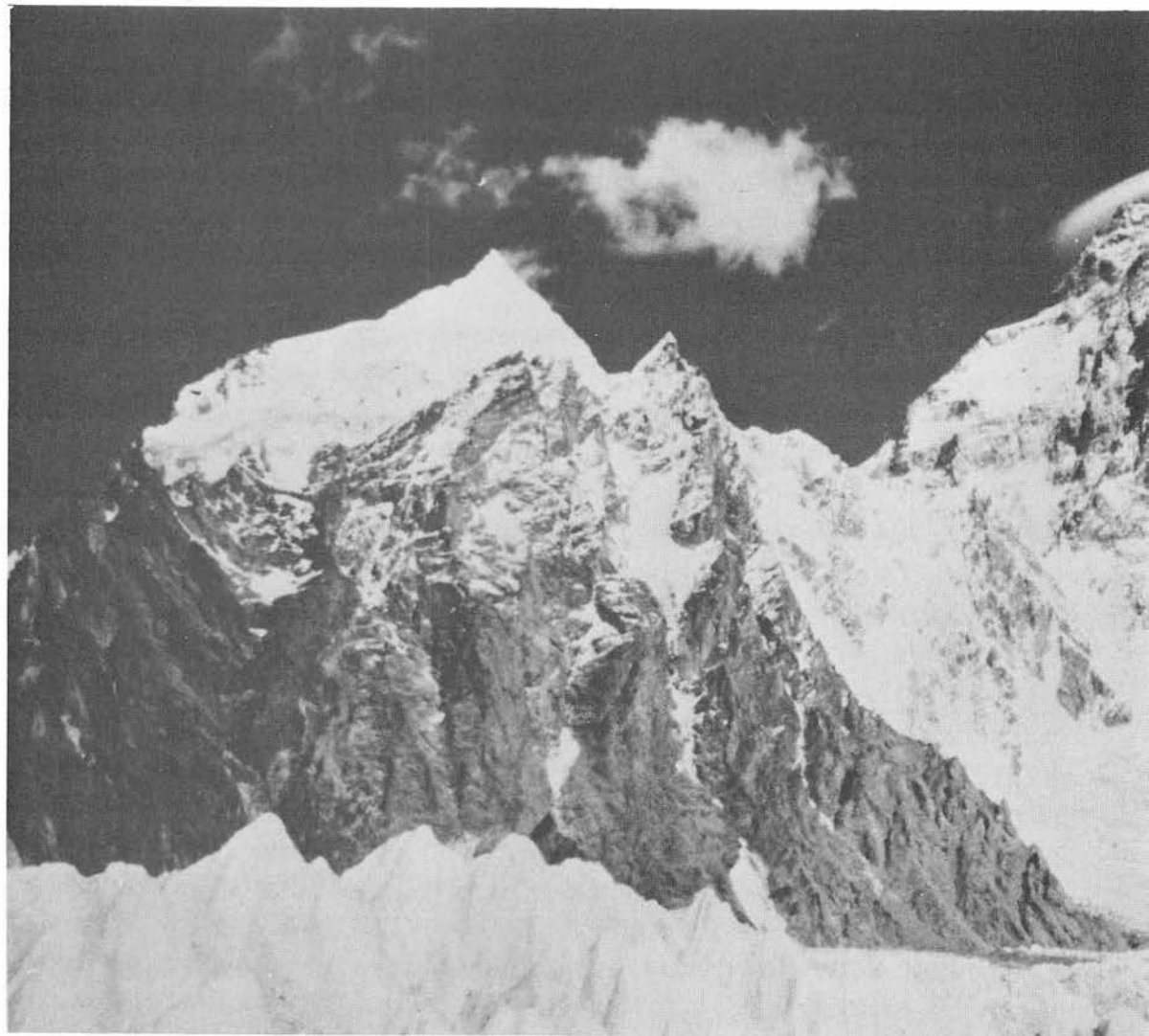
◇

「登山」という行為は、常に「山ありき」というものから出発しなければならない。今の登山界は雑音が多過ぎる。やれ組織、やれ管理、やれ顔ぶれ・・・そして、それに介在する力関係、権力、目立ちたがり屋・・・うんざりすることばかり。

もう少し冷静に自分を見つめ、自分の山登りに精を出してはいかがだろうか。周囲の雑音を気にすることなく。政治家でも評論家でも、スターでもない“ヤマヤ”さんなんだから・・・。

その意味からも、今回の日本ヒマラヤ協会のK2登頂は、いぶし銀のように光を放っている。

高みを求めて



何故、今更、南東稜からK2へ？。何度か耳にした言葉だった。そうかも知れない。世界第2位の高峰K2はすでに'54年（イタリア隊＝南東稜）、'77年（日本隊＝南東稜）、'78年（アメリカ隊＝北東稜）、'79年（国際隊＝南東稜）'81年（日本隊＝西稜）'82年（日本隊＝北稜）'83年（イタリア＝チェコ隊＝北稜）の各隊によって登られ、南東稜は3登と他のパーティーによってルートはほぼ知り尽されている。

8,000 mの巨峰初登黄金時代から30年、登山方法も内容も変わりヒマラヤも冬季登山に入った昨今である。さらに地球上に残された未踏査の地域、未踏峰も少なくなっている。7,500 m以上の未踏峰はナムチャバルワ（7,782 m）、ナムナニ（7,698 m→K2登山期間中に登頂成功の新聞が届く）、クーラ・カンリ（7,545 m→'86年4月登頂）、ガンケール・ブンツム（7,541 m）、サセル・カンリⅡ峰（7,513 m→'85年9月登頂）とあるが、これらの峰も時間の問題だろう。又、ブータンと中国の未踏査区域、未踏峰の解禁によってそれらの地域、山々は一層興味が注がれている。それらの情報は充分すぎる程知っている。7,000 mの未踏峰も当然同じ運命となっていくだろう。が、日本ヒマラヤ協会会員16名はK2に向け計画を進め実行に移した。なによりも8,611 mという高みを求めてであった。



隊長 飛田和夫

登山行為そのものは自己満足であり、いかに歴史に残る踏査・登山であってもただ記録が残っただけでどうだろうかと私は考える。登山方法についても同じであり、他を意識することもないし、同調させる必要もない。確かなる目的意識が大切であろう。

今後の高所登山は未踏峰も登り尽されれば、なおさら、はてしなく広がる欲望とより厳しい山行に向うことは常であろうから、冬期登山が現在のように一般的なヒマラヤ登山になりにくくとも、やはり舞台は冬期 8,000 m 峰になっていくだろう。

とどまることを知らぬ欲望を求めての過程としての K 2 だが、8,611 m という高さの魅力は絶えがたく、ピラミダルな山容が高さを求めての行為にさせた。われわれの K 2 登山は、日本ヒマラヤ協会の現在推進している未知へのロマンと高さへのロマンの遂行であり、高さへのロマンの一つであった。

3 年余頭の中で対峙していた K 2。実際に自分で見、触れてきたそれは、頭の中で描いていたとおり、厳しくも素晴らしい山だった。多くの先駆者と同じように、私も K 2 に憑かれた 1 人なのかも知れない。

高さを求めて、高さのロマンは決して無くなるものではない。地球上に山が存在する限り。





⇐ K 2 ホテルにて (1985, 8, 19 撮影)

塩田	村上	岡田	土谷	武部	遠藤	石田	吉田	中岡
	伊地知	細貝	連絡 将校		飛田	坂上	山田・昇	山田・修

目次

序	稲田 定重
自分の山	新貝 勲
高みを求めて	飛田 和夫
企画・・・・・・・・・・	13
実践・・・・・・・・・・	29
総括・・・・・・・・・・	125
英文報告・・・・・・・・	142
ご協力者名簿	
編集後記	

企 画

企画

〔K 2 をいかに登るか〕

基本的思考

計画概要

隊員構成

各分野の基本方針



〔K 2をいかに登るか〕

基本的思考

日本ヒマラヤ協会で、K 2の各ルートから集中登山、という発想があったが、種々の状況により発想だけで現実に向けてスタートは切れなかった。だが、集中登山には成りえずとも1つの計画はスタートした。

計画を推進する者、又、パキスタン観光省の許可の関係でK 2南東稜が内定している。私たちはK 2を南東稜から登ろうとし、頂きに立つための戦略を考える。

計画は

世界第2位の高峰（K 2、8,611m）・ピラミダルな頂きに立ちたい。

私が、1978年の日本ヒマラヤ協会ヒマラヤ登山学校でのトリスル後、壮大がゆえに多大なる困難を極めた1981年カンチェンジュンガ縦走計画に参画できた。その経験のもとに、K 2が生まれてきている。協会会員で8,000mを願望する人があり、私自身、他の人にとやかく、さらに、それだけの力も無いが、私が8,000m峰のカンチを目指せたようにチャンスの場をもうけ、協会内に8,000m峰の経験者を育成する。それは、今後未踏峰が登りつくされれば、限りない人間の欲望は、より困難に向かうことが常であろうから、舞台は冬期8,000m峰で展開されることになる。それらの計画・実践の遂行は8,000m峰の登頂者、経験者によって成されるのが自然の成りゆきであろう。

以上がK 2に望もうとする思考である。そのために現在の登山界の流れが超々高所において少人数、アルイン・スタイル、無酸素等台頭してきているが、我々には我々の登山方法をもつことにより、他の人にとやかく言われることもなく、まして言う必要もない。確固たる目的意識で戦略を成すべきである。推進する私自身それらの方法によって登れる可能性もないので、基本的には多人数による酸素を使用したオーソドックスな方法で展開する。

ここで再度、参加希望メンバーはK 2について再考してほしい。とかく遠征中、又、帰国後に発生し易い問題はメンバーの分裂である。簡単なようではなかなか理解出来ない課題、単に8,000m峰に行くのだとの気分だけで目的を十分に理解していない為に発生する問題。ここに目的を徹底させる企画段階の重要性がある。目的に自分の考えが噛み合わない人は、計画から去るべきである。なによりも、楽しく、より良い遠征をするために。

ピークに立つ確率は、準備段階に流した汗に比例する、といわれます。バッチリ汗を流しましょう。

（K 2通信 1983,5 発行）

K 2登山の目的と戦略

目的 世界第2位の高峰K 2（8,611m）・ピラミダルな頂きに立つ。

日本ヒマラヤ協会内に8,000m峰経験者を輩出する。

戦略 南東稜から酸素を吸ってオーソドックスな方法によって登る。

基本的思考により募った。目的を理解し、8,000m峰へ不屈の意志をもつのであれば海外未経験者も隊員に入ってもらふことにした。集まった中でも、考えの相違、職場の事情により計画から去った人もいた、出発直前に家庭の事情により断腸の思いでさらねばならない人もあった。最終的に16名（14名が海外経験者、

8,000m峰登頂者・3名、7,000m峰登頂者・5名、6,000m峰登頂者・3名)が決定し、確固たる目的と戦略をもち、実践に向け踏みだしていった。

私にはもう一つ、密かな目的があった。'81カンチでは一隊員として参画し、サポート隊として西峰(ヤルンカン)には立ったが、BCからは張られたロープを辿るのみであった。私の性格からすれば満足のいくものでなかった。自分達で計画を推進し、ルート工作・荷上げをし、そしてピークに立つための8,000m峰が自分に課したポスト・カンチだった。それがK2でもあった。今後の源とするためにも。

計画の概要

1 隊の名称

日本ヒマラヤ協会K2登山隊1985

(英文名) HAJ・K2 EXPEDITION (HKE85)

2 派遣母体・後援

日本ヒマラヤ協会 後援 文部省 (社) 日本山岳協会 東京都山岳連盟

3 目標の山

K2 (南東稜)

4 登山期間

昭和60年5月15日～8月31日

5 目的

A 南東稜からの登頂

B 超々高所の体験

6 隊の構成

隊長 飛田 和夫

隊員 15名 (医師1名を含む)

リエゾン・オフィサー 1名

7 推進の組織

会 長 柴田金之助 (日本ヒマラヤ協会会長)

副 会 長 遠藤 登 (" 副会長)

実行委員長 稲田 定重 (" 専務理事)

副実行委員長 飛田 和夫 (登山隊隊長)

事務局 長 山森 欣一 (日本ヒマラヤ協会事務局長)

実 行 委 員 尾形 好雄 (" 常務理事)

八木原 罔明 (" 常務理事)

登山隊々員

8 隊の事務局

①160 東京都新宿区高田馬場3丁目23番1号 淀橋食糧ビル506号

日本ヒマラヤ協会 電話03-367-8521

9 現地連絡先

SILK-ROAD-TOUR-SERVICE CO

House No.35 -B School Road F-7-1

Islamabad PAKISTAN

隊員構成

- (1) 生年月日 (3) 勤務先
(2) 住所・TEL (4) 登山経歴 (海外)

1、隊長

飛田 和夫
Kazuo Tobita

- (1) 1946年1月 生
(2) 〒183 東京都府中市

会計
国内渉外

- (3) 国鉄・拝島運転区
(4) 1976年夏 カラコルム偵察
1978年秋 トリスル(7,120m)登頂者
1981年春 ヤルン・カン(8,505m)登頂者
1983年春 韓国・雪岳山
1983年秋 スン(7,135m) 隊長
1984年春 中国・玉龍雪山(5,596m)隊長

2、副隊長

中岡 久
Hisashi Nakaoka

- (1) 1949年9月 生
(2) 〒306-04 茨城県猿島郡

食糧
記録(8ミリ)

- (3) 明治大学付属明治高等学校・中学校事務室
(4) 1974年 韓国・雪岳山
1978年秋 トリスル(7,120m)登頂者
1981年秋 ランタン・リ(7,206m)登頂者

3、副隊長

山田 昇
Noboru Yamada

- (1) 1950年2月 生
(2) 〒213 神奈川県川崎市

酸素

- (3) 株式会社・スポーツ
(4) 1976 年夏 ラトック偵察
1978 年秋 ダウラギリ I 峰(8,167m)登頂者
1980 年春 カンチェンジュンガ(8,586m)偵察
1980 年秋 ケダルナート・ドーム(6,831m)副隊長、登頂者
1981 年春 カンチェンジュンガ(8,586m)登頂者
1981 年秋 ランタン・リ(7,206m)登攀リーダー、初登頂者
1981 年秋 ナンダ・カート(6,611m)捜索
1982 年秋 ダウラギリ I 峰(8,167m)登攀リーダー、登頂者
1982 年冬 マナスル(8,163m)隊長
1983 年秋 ローツエ(8,516m)登攀リーダー、登頂者
1983 年冬 エベレスト(8,848m)登攀リーダー、登頂者
1984 年秋 マモストン・カンリ(7,156m)初登頂者
1984 年冬 アンナプルナ I 峰(8,091m)登攀リーダー

4、登攀隊長

吉田 憲司
Kenji Yoshida

- (1) 1953年1月 生
(2) 〒174 東京都板橋区

装備
国外渉外

- (3) 日本ヒマラヤ協会
(4) 1979年 ヨセミテ
1979年 カナディアン・ロッキー
1980年 ヨーロッパ・アルプス、グランドジョラス北壁他
1981年 ヨーロッパ・アルプス、フレネイ中央岩稜他
1982年夏 ハチンダール・キッシュ (7,163m) 副隊長、初登頂者
1984年秋 マモストン・カンリ (7,516m) 初登頂者

5、医 師

塩田 純一
Junichi Shiota

- (1) 1950年2月 生
(2) 〒233 神奈川県横浜市

医療
装備

- (3) 汐田病院
(4) 1974年 アイランド・ピーク (6,160m)
1980年 プモリ (7,161m)
1982年春 オンミ・カンリ (6,829m) 登頂者

6、隊 員

山田 修
Osamu Yamada

- (1) 1940年1月 生
(2) 〒422 静岡県静岡市

輸送
梱包

- (3) 起立木工
(4) 1971年夏 サラグラール西壁 (7,349m)
1972年 韓国・蔚山岩
1982年夏 ガツシャーブルムIV峰 (7,980m)

7、隊 員

伊地知 博
Hiroshi Ijichi

- (1) 1940年10月 生
(2) 〒191 東京都日野市

食糧

- (3) 自営
(4) 1984年秋 シブリン (6,543m) 隊長

8、隊 員

遠藤喜重郎
Kijuro Endo

- (1) 1946年5月 生
(2) 〒150 東京都渋谷区

記録 (スチール)

- (3) カメラマン
(4) 1980年秋 ケダルナート・ドーム (6,831m) 登頂者
1982年春 ブリクティ・サイル (6,364m) 登頂者
1984年春 中国・玉龍雪山 (5,596m)

9、隊 員

土谷 正伸 (1) 1951年1月26日生

Masanobu Tsuchiya (2) 〒997 山形県鶴岡市

食糧

(3) 土谷建具店

(4) 1978年 インド・ネパール

1979年 バルドール(5,928m)登頂者

1980年 テント・ピーク(5,928m)登頂者

1981年 アイランド・ピーク(6,160m)登頂者

1982年春 ブリクティ・サイル(6,364m)初登頂者

10、隊 員

武部 秀夫 (1) 1952年12月 生

Hideo Takebe (2) 〒535 大阪府大阪市旭区

(3) 御福武書店

(4) 1977年夏 パキスタン

1977年秋 D42

1982年 キナバル

11、隊 員

石田 勇悦 (1) 1953年8月 生

Yuetsu Ishida (2) 〒997-11 山形県鶴岡市

食糧

(3) 自営

(4) 冬期鳥海山 他

12、隊 員

細貝 登 (1) 1953年10月 生

Noboru Hosokai (2) 〒379-11 群馬県勢多郡

装備

(3) 小泉農園

(4) 1981年秋 スワログロヒニ(6,252m)

1983年秋 ヌン(7,135m)登頂者

13、隊 員

村上 和也 (1) 1955年3月 生

Kazunari Murakami (2) 〒151 東京都渋谷区

装備

(3) 水道配管業

記録(VTR)

(4) 1981年秋 ドルジェ・ラクパ(6,990m)初登頂者

1982年秋 ダウラギリ I 峰(8,167m)

1982年冬 マナスル(8,156m)

1983年秋 ローツェ(8,516m)登頂者

1983年冬 エベレスト(8,848m)登頂者

(4) 1984年夏 ナムナニ峰(7,698m)偵察

14、隊 員

坂上 利明

(1) 1955年5月 生

Toshiaki Sakaue

(2) 192 東京都八王子市

(3) 中国電機機

(4) 1983年夏 レーニン峰(7,134m)登頂者

15、隊 員

熊田 雅史

(1) 1956年2月 生

Masafumi Kumada

(2) 221 神奈川県横浜市

(3) 自営

(4) 1981年秋 ガンガプルナ(7,455m)

1983年秋 ヌン(7,135m)登頂者

16、隊 員

岡田 勇考

(1) 1957年6月 生

Yukou Okada

(2) 359 埼玉県所沢市

(3) 片山住宅サービス

(4) 冬期登

甲斐駒ヶ岳、海谷、黒部丸山等で冬期初登

各分野の基本方針

〔日程〕

4月29日 先々発隊出発 吉田・細貝 隊荷をカラチで通関、イスラマバードまで輸送

5月13日 先発隊出発 飛田・山田(修)・村上・坂上・熊田 渉外、装備・食糧等の買い出し

18日 イスラマバードからスカルドに向け隊荷輸送 4名が先行

18日 山田(昇) ネパール経由で出発

19日～24日 スカルド到着 食糧等の購入・再梱包

20日 本隊出発 中岡・伊地知・遠藤・土谷・武部・石田

23日 イスラマバード出発

24日 スカルド到着

28日 スカルド出発

28日 後発隊出発 塩田・岡田

30日 スカルド出発 後発隊の2名とネパール経由の山田(昇)

6月16日 BC設営

18日 登山活動開始

8月15日 登山活動終了

17日 下山開始

30日 スカルド

31日 イスラマバード到着

〔キャンプ配置〕

BCの位置については、5,200m(日山協隊BC)と5,500m(南東稜取付付近・日山協隊C1)の両案を検討し、カンチェンジュンガのBC5,500mでも可能なことを体験に、又、K2の場合、南東稜取付付近は唯一、土と岩の上で温かいことなどからBCを5,500mにする。5,200mのキャンプは仮BCとし、レスト・キャンプの役割もはたせる様にする

BC以上のキャンプは、16名中14名が海外登山の経験者であり、高所の体験もあることから下部の1,000m展開も可能であろうとの考えから基本方針とする。

仮BC	5,200m
BC	5,500m
C1	6,500m
C2	7,400m
C3	7,900m
AC	8,200m~8,300m

〔ルート概要〕

仮BC~BC 5,200m~5,500m

ゴドウィン・オースチン氷河を南東稜末端へ。南東稜末端付近でアイスフォールを特に形成しているルートとして

- 1) セラックスを突破(最短ルート)・・・このルートを採用したい
- 2) セラックスをブロード・ピーク側から迂回(最長ルート)
- 3) セラックスをK2側より迂回

BC~C1 5,500m~6,500m

ガラ場を直上し約5,800mのテラス、その上部岩稜帯をぬけると6,200m付近。雪面がリッジの上まで続く急斜面を登り、次第に約50mの黒い城壁をベッツオルトのハングから左上気味に抜けるとハウスのチムニーの下にC1(イタリア隊のC4で石積みプラトー)

C1~C2 6,500m~7,400m

ハウスのチムニーを抜け広い雪面が100mほど続きイエローバンド地帯の下(日山協C3)、ガリーから岩稜、急な雪面を登り、その上部70度・80度ほどの傾斜をもつ2ヶ所の岩壁を抜けると核心部の黒いピラミットを突破して下部プラトーに達する

C2~C3 7,400m~7,900m

広い雪面を登り、上部プラトーの氷雪壁がたちはだかる約7,600m、氷雪壁を左より抜け上部プラトーに立つ、約7,800m。なだらかな雪稜をたどる

C3~AC 7,900m~8,200m

頂上ピラミットの懸垂氷河のビンの首を目指して直上、上部岩壁下にAC

AC~ピーク 8,200m~8,611m

ビンの首を抜け、左に懸垂氷河をトルバースし直上するが、非常に深いラッセル

〔装備〕

露営 キャラバン・BC・C1までは以前に使用したテント

C2以上は新調、ACは軽量でコンパクトさらに容易に設営が可能なものを

燃料 キャラバン・BCはプロパンボンベ、各キャンプはブタンガス・カートリッジ

登攀 フィックスロープはPP（ポリプロピレン）を主体にし、岩稜・岩壁はナイロン
 C2（7,400m）までは、16名の多人数で登下降も多くなるので全てフィックス、上部プラトールは
 標識を多くしてフィックスは無し
 個装 凍傷、特に足の予防のため全員オーバーシューズ着用にする

〔酸素〕

K2南東稜はアタック時もラッセルにかなりの時間を費している、行動時間が長くなることから、容量
 の多いボンベとしてラックスファース社とする

使用方法

行動用	C3～AC間のルート工作・ACのキャンプ地設置 アタック	
睡眠用	C2（7,400m）	初めての夜のみ使用
	C3（7,900m）	毎夜使用
	AC（8,200m）	毎夜使用
医療用	BC・C1・C2	

〔登山活動〕

- 1) 3人1パーティー、5パーティーを編成
- 2) 各パーティーに1名のチーム・リーダーをおく
- 3) 各パーティーの行動はチーム・リーダーが把握し、行動の指示は隊長がおこなう
- 4) 各パーティーは、ルート工作・荷上げ・休養のローテーションにより行動する
- 5) ハイ・ポーターは雇用しない
- 6) 休養は、BCにておこなう。BCを出発して戻るまで休養はしない
- 7) 荒天時、上部への行動が不可能の時は原則として下降
 6・7に関しては、より下部での休養と、上部での食いつぶし、燃料の消費防止
- 8) 登山活動を5期に設定
 - 第1期 BC設営
 - 第2期 C3設営
 - 第3期 AC設営
 - 第4期 アタック
 - 第5期 撤収
- 9) パーティの再編成を第3期に行う。但し、以前に不調者がでた時はその時点で行う
- 10) アタック・メンバーを最高9名
 - 第1次アタック隊 6名
 - 第2次アタック隊 3名
- 11) アタック・メンバーの発表は第3期終了後、隊長が発表する
- 12) アタック前は、最低3日の休養をとる
- 13) 第4期、アタック・メンバー以外は極力サポート体制に入る
- 14) 予備日、登山許可日数を最大限活用する
- 15) アタック終了後は、すみやかに撤収する

〔食糧〕

一日の行動を終了し、楽しみは何といっても食べることになる。だが、BC以上はすべて隊員の荷上げになるので重量の軽減。BCでは自由に食べられるように。カロリー・栄養の面などの計算も必要だが、計算されたものを全て食べて成り立ってくるが、不調・疲労から食べれないことがある。したがって食べ易い物、食べれる物を基本献立とする

キャラバン・・・現地食主体

B C・・・日本食主体

高所食・・・日本食（1人・1日・700g位）

〔輸送〕

プロパン・ボンベ、多量のブタンガス・カートリッジの輸送と輸送費の軽減から船輸送。倉庫使用の時期の関係と海上輸送のトラブルを考慮して3月下旬に横浜出港

〔梱包〕

キャラバンの長期を考慮。キャラバン・BC・高所に区分、高所食は再梱包の必要がないよう。全体的にも極力再梱包のないよう25kgに国内梱包する。梱包材料はプラパール・ボックスの使用

〔記録〕

VTR ・8ミリ・スチール

〔事故対策〕

行動面と共に考慮しなければならないのが事故対策であり、防止する為には事故の原因を探らねばならない。山森欣一氏（日本ヒマラヤ協会事務局長）が1952年～1982年の調査をしたところによると、

高所障害 転滑落 37.3% (高所障害が原因と思われる)

高山病 7.1%

雪崩 47.6%

その他 7.9% (行方不明、他)

上記の原因と数字がでている。雪崩事故ももともとは高所障害に起因すると考えられるので、高所登山の事故原因は、高所による障害から発生するといっても過言でもないように思われてならない。いかに生体を高所に順応させ、行動するかが、事故防止の最大の課題と考える。さらに日本ヒマラヤ協会隊の痛恨の事故も私たちには貴重な教訓としている

1981年 インド、ナンダ・カート・・・7名の行方不明（雪崩？）

1982年 インド、クン・・・1名が落石をうけて死亡事故

1982年 ネパール、冬期マナスル・・・1名が滑落死亡

1984年 パキスタン、ナンガパルバットでの隊員4名全員行方不明（雪崩？）

事故は、いつ、どこで、どのようなかたちで遭遇するのか計りしれない。多くの友をヒマラヤで失い、あらためてヒマラヤ登山の事故発生要因の複雑さをたたきつけられ、今後ヒマラヤに向かおうとする意志さえも削りそがれる思いである。だがそれらの思いを越えて目指そうとするヒマラヤ高所登山・より多くの事故要因に対応しようとする基礎知識だけは身につけなければならない

ピークを踏み、あくまでも全員が無事に帰って、はじめて成功と考えるからである

〔高所順応〕

事故防止の課題、登頂成功の最大の課題とする

スカルド～仮BC、仮BC～BC、登山活動に分けて対応

スカルド～仮BC (2,500m～5,200m)

初期4,000m台がキャラバン中にある。スカルド～仮BC間を約2週間で徐々に高度を獲得するので、高所に次第に体調がとまなうと考えられるが、その間に上下行動が無いのでポーターの休養地・パイユで順応行動をおこなう

仮BC～BC (5,200m～5,500m)

この間はBC入り後、登山活動をスムーズにさせるとともに、6,000m台に多い高所障害による死亡事故を防止するため、さらに、より高所に向かうためのステップとなる。約1週間の順応行動

日程内に順応できない時は、再度仮BCへ

この間は、強い負荷をかけないようにする

登山活動

初めて体験する高度には宿泊しない

宿泊する高所には、最低1回以上往復した後とする

各キャンプでの滞在を極力少なくする

休養はすべてBCとする

高所障害症状を自覚する

順応しようとする意志をもつ

7,400mのC2では、初めて宿泊する日だけ睡眠用に酸素を吸う

7,900m、8,200mでは毎夜、睡眠用に酸素を吸う

アタック前は、BC又はBC以下の高度で休養する

アタック前に休養がとれない場合は、アタックをしない

〔事故の対応〕

事故防止については、種々検討しているが万が一事故が発生した場合の対応

連絡方法

- ① 事故・病気発生のパーティーは、状況を含め隊長に連絡
- ② 内容（怪我・病気等について）をドクターに連絡し、指示を受け、行動の決定を隊長から連絡
- ③ 他の各パーティーに行動連絡
- ④ 出来る限り早く現場へ
- ⑤ 救出・搬出活動を行う

対応

1、負傷や病気の場合

- ① 生命に危険のある場合

○ドクターの診断を基礎に隊長の判断により速やかに下山させ入院等の処置をする

○すべての登山活動を一度中断させ、負傷・病気者に対応する

- ② 生命に危険のない場合

ドクターの診断を基礎に隊の状況に応じ適時処置

2、死亡や行方不明

- ① 遺体が確認できた場合

○事故現場の状況や隊員の疲労度等で、BCまで遺体を降ろすことが無理と判断された場合は、現場付近に埋葬

○BCまで降した場合、付近に埋葬か荼毘

② 遺体を確認できない場合

○事故現場から遺体のある場所が確認出来た時でも、二重遭難の危険がある場合搜索断念、行方不明も同じ

3、事故処理後の登山再開

① 都市生活

② 移動中

③ キャンプ中

④ BC付近

⑤ 登山活動中

日本を出発して帰国するまで、事故の要因は多種であるが①は病気②は不可欠要素が含まれ、③④も①同様病気の要因が主として考えられるので原則的に登山活動に移行する。⑤の処理後が問題となるが、死亡事故は原則的に中止とする。しかし、高山病による死亡については状況を判断し決定する

4、死亡確認

我々が死亡した場合は、最終的には戸籍の抹消（除籍）をもって死亡が確定する。これは葬式をするためには、故人を埋葬しなければならず、このためには「埋葬許可」が必要であり、そのためには「死亡届」が受理されなければならない。

ヒマラヤ登山には、遺体がなかったり、あっても収容できず現場に埋葬してくるケースがある。ここから様々な問題が発生してくる。

したがって、死亡届（死亡証明書）を得るには種々の書類が必要であるが、ドクターが死亡を確認出来ない時は、「事故目撃者・死亡確認者」として各メンバーが対応することになるので、各自が自覚してほしい

5、事故の対応

1、月・日・時間・天気

1、事故の状況

1、死亡確認

1、遺品の採取

1、遺体の埋葬等については、隊長の指示

○ 詳細に、写真・スケッチをするよう

1、現場の様子

1、事故者の容体（脈・瞳孔・外傷・他）

1、遺髪・爪の採取

1、遺体の確保

6、現地・日本連絡方法

〔家族会議〕

1985年3月10日（日） 新宿・龍生堂ビル3Fにて開催

内容 日本ヒマラヤ協会について

ヒマラヤ登山の特種性について

事故の対応について

隊員及び隊員の御家族の方に参加していただき、家族会を開催

会場を移して、懇親会をおこなう

[各キャンプ配置・日程関係]

	仮BC	B C	C 1	C 2	C 3	A C	ピーク
高 度	5,200 m	5,500 m	6,500 m	7,400 m	7,900 m	8,200 m	8,611 m
場 所	日山協 B C	南東稜 取付付近	ハウスの チムニー下	下部 プラトー	上部 プラトー	ビンの首下 上部岩壁下	
高 差	300 m	1,000 m	900 m	500 m	300 m	411 m	
ルート工 作 日程	2 日	4 日	5 日	4 日	1 日		
1人当り 荷上回数		4 回	3 回	2 回	1 回		
テント数			4～5 人用 3 張	4～5 人用 2 張	4～5 人用 2 張	3人用 2 張	
宿泊人数			1 3 2 人	8 1 人	3 0 人	9 人	
荷 上 重 量	食糧		132.0kg	81.0kg	30.0kg	6.3kg	
	装備		130.0kg	80.0kg	40.0kg	25.0kg	
	酸素		8.4kg	50.4kg	109.2kg	100.8kg	
荷上重量			270.4kg	211.4kg	179.2kg	132.1kg	
累 計			793.1kg	522.7kg	311.3kg	132.1kg	
日 程	6月16日	6月21日	7月 2 日	7月19日	7月28日	7月29日	

実 践

実践

〔行動記録〕

日本～イスラマバード～スカルド

スカルド～仮BC

仮BC～BC

登山活動

仮BC～スカルド

スカルド～イスラマバード～日本

行動表

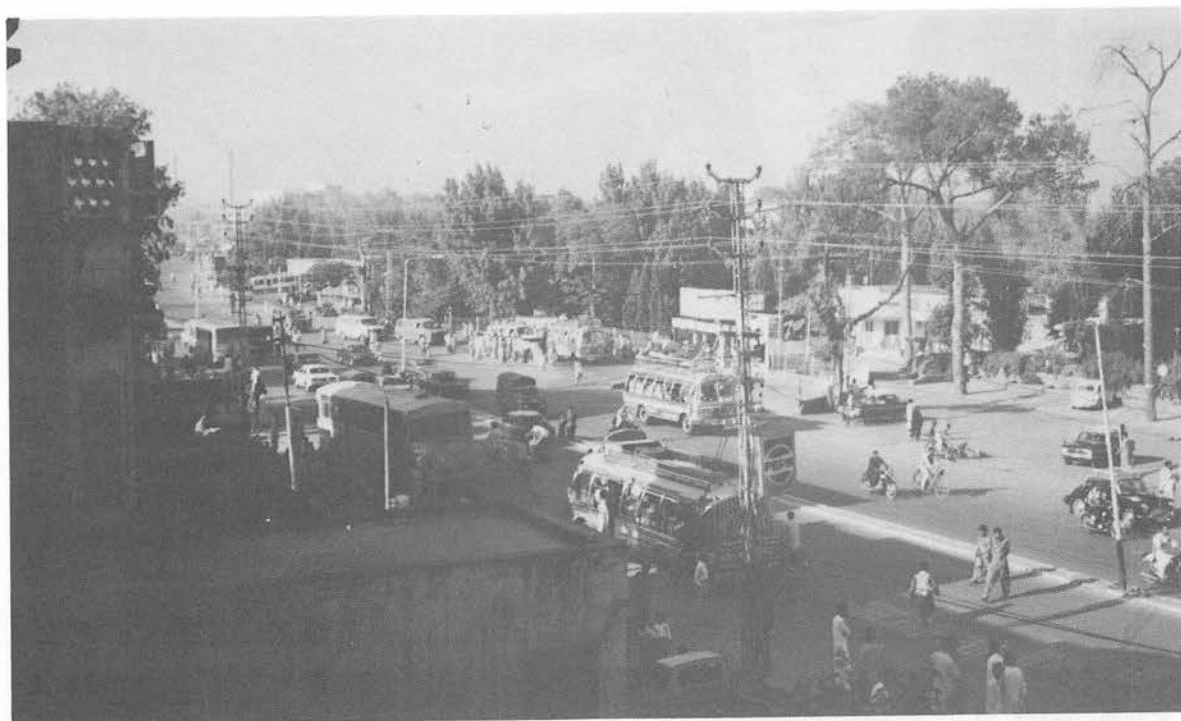
隊員・隊員行動表



〔行動記録〕

日誌（日本～イスラマバード～スカルド）

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 4月29日 | 先々発隊、吉田・細貝
成田→イスラマバード（シルクロード） | 5月22日 | サダーを決定（シルクロードで）
スカルドに向け先行隊出発
山田（修）・土谷・武部（登攀倶楽部・京都、法政大のチャーターバスに同乗させていただく） |
| 5月5日 | 先々発隊、吉田・細貝
イスラマバードからカラチへ | 5月23日 | 吉田より連絡
隊荷すべて引き出し。今夜カラチを出発しトラックは27日に到着予定。2名は明日戻る |
| 5月13日 | 先発隊、飛田・山田（修）・村上・坂上・熊田
成田→ラワルピンディ（ナショナル・シテイ・ホテル） | 5月24日 | 吉田・細貝
カラチよりイスラマバードに戻る |
| 5月14日 | シルクロードへ
吉田からの連絡事項と督永さんと打ち合わせ
関西カラコルム登山隊の賀集氏に会う（メール・ランナーについて打ち合わせ）
カラチの吉田と連絡 | 5月25日 | 山田（昇）
ネパール経由でイスラマバード |
| 5月16日 | シルクロードへ（先発隊の5名ラワルピンディからイスラマバードへ移動）
在パキスタン日本大使館へ
吉田、イスラマバードへ一度戻る | 5月27日 | 隊荷トラクターで到着
後発隊、塩田・岡田
成田→イスラマバード（シルクロード） |
| 5月19日 | 連絡将校（リエゾン・オフィサー）と接見、観光省にて
吉田、再度カラチに向かう
サビール・ナジール氏と会う | 5月28日 | 再梱包 |
| 5月20日 | 本隊、中岡・伊地知・遠藤・土谷・石田、武部
成田→イスラマバード（シルクロード） | 5月29日 | チャーター・トラックでイスラマバード出発（熊田・岡田が同乗）
グリーンフィンギ（観光省にて）
チャーター・バスでイスラマバード出発 |
| 5月21日 | カラチにて隊荷の通関がOKになる
連絡将校と打ち合わせ | 5月30日 | バス、スカルド到着
先行隊の3名と合流してK2ホテルに入る |
| | | 5月31日 | トラック、スカルド到着
全隊員が揃う
ポーターの雇用（129名） |



↑ (朝のラワルピンディ)

行動概要

先々発隊が4月29日に成田を発ち、日本ヒマラヤ協会K2登山隊は実践へと一步を踏み出す。先々発隊の最大の目的は、3月末にカラチ港に入っている隊荷約4tと、イギリスからの酸素ボンベの通関。通関させた隊荷をカラチからイスラマバードへの輸送である。シルクロードに入り督永さんと打ち合わせの後、観光省・輸送通関業者・関係機関との接渉と書類作成をして、5月5日にカラチに飛ぶ。

5月13日に先発隊は成田を出発するが通関のメドは全くたっていない。先発隊5名は13日夜に、パキスタンイスラム共和国のラワルピンディ・チャクララ空港に着き、シルクロードのスタッフ（ジャベット氏）に案内されナショナル・シテイ・ホテにはいる（シルクロード満員）。翌日シルクロードに伺い督永さんとあう。K2の許可取得から今回の通関にいたるまですべての面で御世話になっている。日本ヒマラヤ協会会員であるが、ざっくばらんな性格が初対面の緊張感を無くさせてくれる。

通関は税金（登山隊の場合は無税）の関係で進展しないので、吉田に一度戻ってもらい再検討をする。再度、関係機関に出向き書類作成を行なう。その間に連絡将校とも会い、一緒に出向いてもらう。書類を持参して細貝の待つカラチに向かう、何としても今月中にはイスラマバードを出発しなければ。先発隊によって食糧・装備等の買い出しはだいたいかたがつき、20日には本隊がシルクロードに到着して賑やかになる。本隊の到着した翌日、吉田より通関がOKになったという連絡がはいり、26～27日頃には到着出来そうだと。今後の具体的な日程の再検討にはいる。22日にはチャーター・バスに便乗させてもらい3名の先行隊にスカルドに行ってもらう。24日には大任を果たした2名がカラチから戻り、25日1名、27日にはトラクターに積まれた隊荷が到着、同時に後発隊の2名もシルクロードに入り全隊員がパキスタンに入国する。翌日は再梱包と渉外を済ませる。29日朝トラックが出発、観光省でブリーフィングをおこない、昼過ぎチャーター・バスで督永さん家族に見送られて、シルクロードを出発した。



↑ (シルクロードと督永さん)

日本を発ち、そしてイスラマバードを出発する間、シルクロードの2階を陣取っていた。40度を越す灼熱の日差しの中、各方面への渉外活動とイスラマバードはもちろんラワルピンディでの食糧・装備等の調査と購入。さらにはカラチでの通関輸送へと、すべての行動は、ここシルクロードを拠点としておこなった。

エアコンは無く、断水もあったが、なんといっても落ち着く事ができ、1日の疲れをいやすことの出来る場所だった。財政面からも自炊としたが、自炊をすることによって激しい下痢に襲われることもなく、又、チームワークの一助にもなっていた様子だ。

何回か、督永さんとお嬢さんの手作り料理を食べさせていただいた。

(シルクロードで) ↓





↑ (イスラマバードのホリディ・バザール)

物価 (1985年5月現在)

換金(1985,5,18) UNITED BANK 1\$ = 15.74Rs 1Rs = 16円

(1\$ = 250 円、1985,5現在)

〔ラウルピンディ〕			〔シルクロードの近く〕			〔アップラ・バザール〕		
じゃがいも	1 kg	2 Rs	紅茶	250g	1 8 Rs	水牛	1 kg	6 Rs
にんにく	1 kg	5 Rs	ミルク缶	400g	2 4 Rs	牛	1 kg	1 6 Rs
玉ねぎ	5 kg	1 6 Rs	食パン		5 Rs	スパゲティ	450g	5 Rs
人参	1 kg	8 Rs	コーヒー	50g	2 8 Rs	ケチャップ	290g	8 Rs
岩塩	1 kg	9 0 Rs	ジャム	430g	1 3 Rs	肉 コマ切れ		8 Rs
キャベツ	1 kg	5 Rs	タマゴ	10	7 Rs	米	1 kg	1 0 Rs
トマト	1 kg	2 Rs	バター	200g	1 2 Rs	牛乳	500ml	3,3 Rs
ピーマン	1 kg	4 Rs	トマト	1 kg	4 Rs	ジュース	225ml	2,5 Rs
羊肉	1 kg	6 Rs	キュウリ	1 kg	3 Rs	缶ジュース		1 2 Rs
きゅうり	1 kg	2 Rs	キャベツ	1 kg	4,5Rs	スイカ	1 ケ	7 Rs
赤かぶ	1 束	2 Rs	ピーマン	1 kg	6 Rs	ナス	1 kg	4 Rs
なす	1 kg	2 Rs	ニンニク	5 ケ	1 Rs	じゃがいも	1 kg	3 Rs
レモン	1 kg	1 6 Rs	塩	800g	3,5 Rs	アタ	1 kg	4 Rs
ハウレン草	1 束	2 Rs	砂糖	1 kg	8 Rs	カレー粉		10,7Rs
メロン	3 kg	1 2 Rs	洗剤	1 l	1 2 Rs	キャベツ	5 kg	1 3 Rs
いんげん	1 kg	6 Rs	スポンジ	小2	2 Rs	マンゴ	1 kg	1 2 Rs
大根	1 kg	6 Rs	サラダオイル		2 9 Rs	氷 (アイスBOX に)		1 0 Rs
ショウガ	1 kg	2 2 Rs	玉ネギ	1 kg	4 Rs	マッチ	小	0,25Rs



⇐ シルクロードを
出発するトラック

29日の朝出発し
31日の朝、スカ
ルドに到着する
熊田・岡田隊員
が乗り込む

現地購入装備
ケロシンストーブ
ブリキ缶(大)
ナベ
麻袋
その他

先行隊 (イスラマバード→スカルド)

土谷正伸

5月22日 山田(修)・武部・土谷の3隊員がスカルドに向けて先行することになり、ラトックⅡ峰に向かう登攀倶楽部・京都隊4名とバルトロのキャシードラル峰を目指す法政大隊8名とのチャーター・バスで18時頃にラワルピンディを出発。途中アボタバードで夕食をとった後、満艦飾でギンギラのバスは夜通し走り続けマンシェラからカラコルム・ハイウェイに入る。うとうと眠っては窓枠に頭をぶっつけのくり返しで夜明けを迎え、翌23日断崖を縫うようにして作られているスリリングな道路にあらためて驚いた。遠くにナンガ・パルバットが見える頃、チラスのジャングリラ・ミッドウェイ・ハウスで休憩して、ギルギットとの分岐点から更に6時間位、延々と走り続け19時30分ようやくスカルドの町に入った。

山間の小さな町スカルドは、イスラマバードのような大都会と違い、チャルドで顔を覆った女性の姿も殆ど見かけることがなく、近くモスク(回教寺院)の大スピーカーから決まった時間に数度コーランが流れるだけの閑静な町で、夕方近くになると必ず風が出て砂塵が舞う風景はまるで映画のマカロニ・ウエスタンの世界を思わせる。酷暑のイスラマバードと比べ、シャワーを浴びると寒い位の快適な気候の中で、翌24日から町の象徴でもあるバルチスタン・タワーの前の安宿ジャングリラ・ホテルに移り、ポーターへの支給食糧購入の為に市場調査等の準備を始めた。

同行してきたサーダーのモハメッド・イスマイルは彼の村にポーターを集める為に一時帰り、新たにメール・ランナーを1名雇って、先に雇用していたフンザ出身のミール・アハammadと共に依頼されている荷を届ける為、マッンヤーブルムBCの関西隊に向けて発たせた。

スカルドのバザールは、メイン・ストリート沿いのニュー・バザール、チャスマ・バザールと路地裏のオ



⇐ チャーター・バス
29日の正午頃に
出発して、30日
の午後にスカルド
に到着する

ギルギット〜スカル
ド間の通行可能な曜
日は、
月・木・金だった

運賃（チャーター）
バス 6,600Rs
トラック 6,000Rs

ールド・バザールに分かれており必要な生活用品は殆ど入手できる。公用語のウルドゥ語も基本的にはネパール語やヒンドゥ語とそう大差なく、余り苦勞せず交渉出来た。約1週間でリスト通りの支給食糧を準備し25kgに仕分けする作業をしているうちアタの量が圧倒的に少ないことに気付き、レギュレーション通りに再計算してみれば、果たして少数点の単位の誤りで1t以上の不足が出たが、結局本隊と連絡がとれず購入の段取りをつけて本隊を待つことにする。

この1週間で我々K2隊の情報が町にあふれ、ポーター達が続々と集まってきていた。

5月30日 14時頃、本隊の飛田隊長、山田・中岡副隊長、吉田登攀隊長、塩田ドクター、遠藤・伊地知・坂上・村上・石田・細貝の各隊員が到着。翌31日5時半、熊田・岡田隊員と隊荷を乗せたトラックが到着して、先々発隊が出発して以来1ヶ月ぶりに全隊員がスカルドに集結した。

トラックの隊荷を降ろし、ガソリンとケロシンの購入、リエゾン・オフィッサー用の食糧等の購入を済ませ再梱包する。結局不足分のアタについてはパイユまで15Rsの食糧費を支給するという事でサーダーと話がついたようだ。チャーターしたトラクターに全隊荷を積み込み、明日の出発を待つのみとなる。

（スカルドの物価 1985,5現在）

紅茶	1 kg	48Rs	ミルク	1 kg	28Rs	マッチ	1ケ	0,15Rs
ダール	1 kg	8Rs	アタ	1 kg	Rs	ガソリン	1ℓ	7,20Rs
ダルチャナ	1 kg	8Rs	塩	1 kg	2Rs	ケロシン	1ℓ	2,42Rs
チリ	1 kg	15Rs	玉ねぎ	1 kg	5Rs			
砂糖	1 kg	9Rs	ギー (1 缶 5kg)	1缶	74Rs			

〔イスラマバード
スカルド間〕

緑のオアシス
にある食堂にて

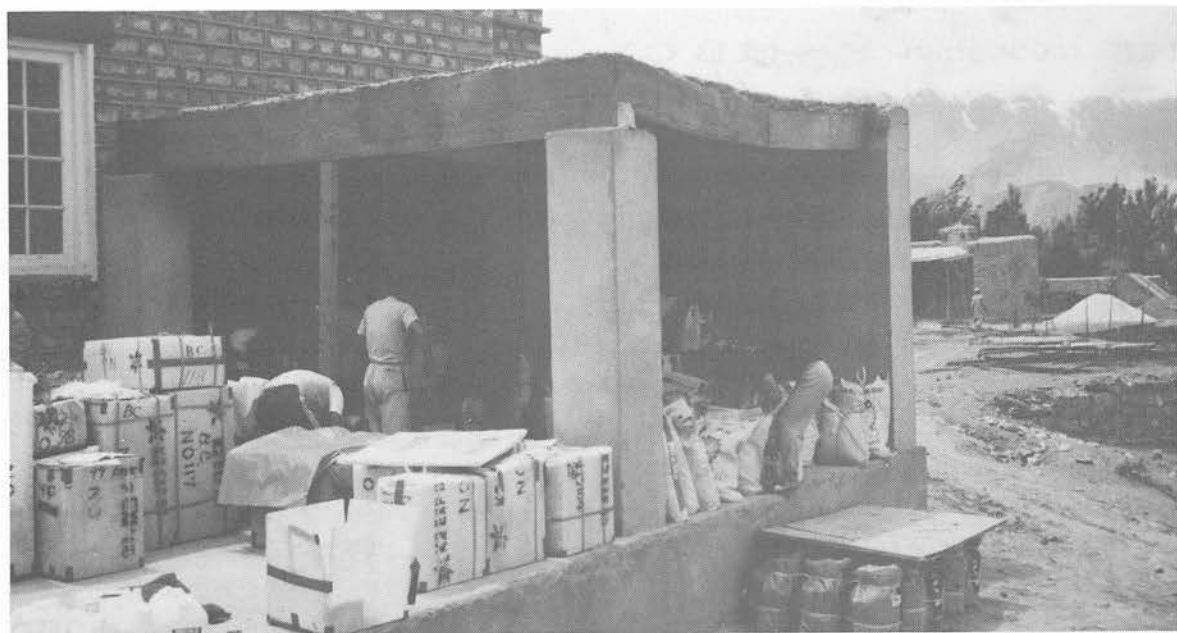


悠久の流れ
インダス河



雄大の一言
もうすぐスカ
ルド





↑ (K2ホテルで最後の準備)

酷暑のイスラマバードから、約26時間のバスの旅でやっと緑のオアシス・インダス河のほとりにた
たずむスカルドに到着する。チョゴルンマ・ピアフォー・バルトロ等の各氷河、さらにショーク河、シ
アチェン氷河方面の登山基地として、多くの登山隊が食糧や装備の購入・梱包・ポーターの確保をした
地である。我々も先行隊によって購入された食糧や装備関係の物を梱包し、そしてポーターの雇用と忙
がしいが、涼しく緑のあることは気分をやわらげてくれる。

↓ (ポーターの雇用・スカルドにて)

(おまわりさんも活躍・ダッソーにて) ↓



日誌 (スカルド～仮BC)

6月1日 スカルド→ダッソー
 トラクター 8台 5時発→14時着
 ジープ 1台 8時発→14時着
 ダッソーでポーター雇用(114名)

6月2日 ダッソー→チャボ
 隊の総人員 266名
 隊員 16名
 連絡将校 1名
 サーダー 1名
 アシスタント・サーダー 1名
 コック(隊員専用) 1名
 コック(連絡将校専用) 1名
 メール・ランナー 2名
 ポーター 243名

6月3日 チャボ→チョンゴ

6月4日 チョンゴ→アスコレ(最奥の村)
 アタ・羊(10頭)の購入
 ポーターの雇用、34名
 (総人数、300名になる)

6月5日 アスコレ→コラホイ→バルデュマン
 コラホイ・バルデュマンの間で、デ
 ュモルド河の渡渉

6月6日 バルデュマン→パイユ

6月7日 パイユ(停滞)
 高所順応トレーニング
 ポーターに食糧の支給(50人単位)と、シートの供与

6月8日 パイユ→リリゴ

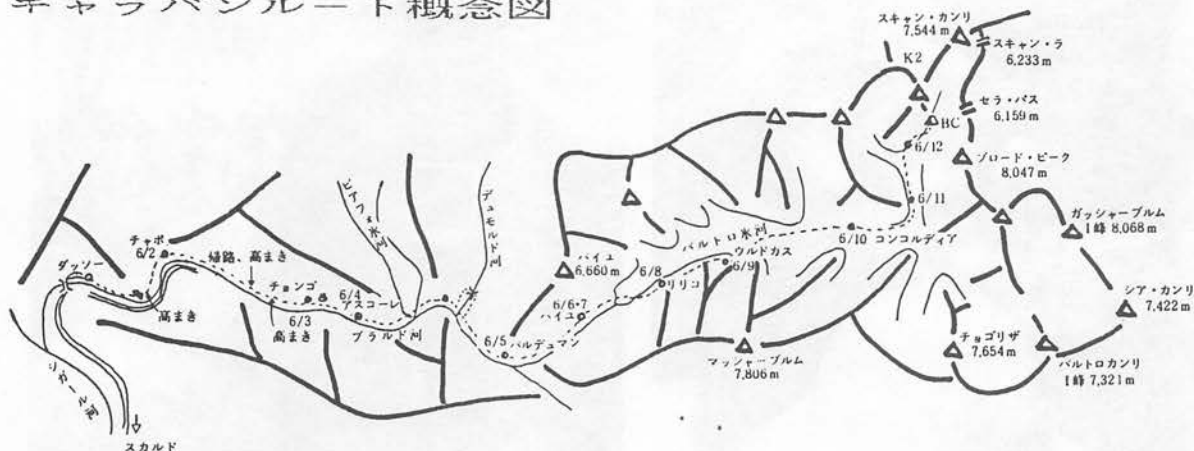
6月9日 リリゴ→ウルドカス
 ポーターに食糧の支給とケロシン
 ストープの供与(10人に1台)
 規定によると、ウルドカスで1日
 ポーターのための休養日となるの
 で先行隊を出し仮BC～BC間の
 ルート工作の予定だったが、休養
 なしとなり全員一緒にの行動となる

6月10日 ウルドカス→ゴレ

6月11日 ゴレ→コンコルディア

6月12日 コンコルディア→仮BC
 ポーター、212名が仮BCまで
 入る
 仮BC～BC間のポーターとして
 25名を雇用する

キャラバンルート概念図





使用車

トラクター 8台

ジープ 1台

トラクター 850Rs

ジープ 624Rs

ジープ (中) 936Rs

トラクター

中カートン30~40

個積込む

運転手1名、隊員

2名が乗る

⇐ K2ホテルを
出発するトラクター

キャラバン

土谷正伸

6月1日 晴 (スカルドーダッソー)

5時に8台のトラクターに分乗し出発する。町を出て舗装が切れるとすぐに砂ぼこりが舞い、バザールで買った布切れで覆面をする。でこぼこ道、砂漠を所かまわず走るという感じで1時間もしないうちに尻が痛み出し泣きが入る。只でさえスプリングのないトラクターの、それも連結棒の荷台の鉄板の上に座るのだから無理もないが、3時間程乗って休憩したシガールの村ではもう、うんざりしていた。尻が痛み中腰になったり、股で座ってたりして完全参った頃、ブラルド川の吊橋を渡りダッソーの村の近くに着く。

道は土砂崩れがあったとかで、大きな梅の木に積み荷のカートンがぶつかって進めず、タイヤの下を掘ったりしていたが結局20Rsで持ち主と話がついて木を切ることにした。その後約20分位でダッソーのゲスト・ハウス着。

荷物の確認と整理をはじめるかたわらで、ポーターのドクター・チェックと雇用がはじまった。

6月2日 雨〜晴 (ダッソー→チャボ)

徒歩キャラバン初日の為、約250人のポーターに荷を渡し送り出すのに時間がかかり、最後は7時頃になる。歩きはじめてすぐに雨が降りはじめ、ブラルド川に沿った水平道を40分位歩くと道は段丘に続く高巻き道に変わる。最初の高巻を越え、再びトラバースして2つ目の峠を越えると草原状の段丘に出て、快適な道が続く。その後、池ノ谷ガリーのようなガリーの大下りをしてブラルド川の河原に出会い昼食。ポータ



ポーターへ支給

靴	1
サングラス	1
軍手	1
軍足	1
雨具 (シート)	1

以上を支給した

仮BCまで行った
ポーターには、ラ
イターも支給
(ボーナス)

⇐ ダッソー

ポーターへ支給

ー達はチャイを作り、ロティを焼いたりして大休止をとっていた。

カラコルムのキャラバンは、ネパールと違い途中にお茶を飲むバッティ (茶屋) もなく、ポーター達は途中で遊ぶようなことがないせいか一様に早い。

チャボの村が見える草原ピアノでマッシュアブルムBCから戻ってきたメール・ランナーに会う。スカルドで雇ったカーリックという奴の代わりにアバースという名の男が一緒に、聞いたら交換したとのこと。

12時過ぎチャボに到着。隊荷のチェック、設営、炊事とキャラバンのパターンがはじまる。雇ったコックはフンザ出身のモハメッド・パキールという男で、日本食を作った経験がなく教えるまで時間がかかりそうな予感がした。明朝第1回目のメール・ランナーを出すことで夜手紙を書く。

6月3日 晴 (チャボ→チョンゴ)

5時半出発。チャボの村を出て畑の中を通り、ブラルド川右岸のガレ場のへつり、一ヶ所悪い所があって隊員がポーターの荷を変わる一幕もあった。

オーダーは、熊田・山田 (修) ・武部の先頭グループ。中岡・伊地知・坂上、石田・岡田の中間グループ、後尾には、山田 (昇) ・土谷・細貝がつき、隊長・ドクター・記録担当の遠藤・村上、それに吉田・連絡将行のM・ラマザン。しんがりは先頭グループに3時間程遅れ、ポーター・ベースの為にリズムが崩れ若干消耗する。昼過ぎに300mの高巻き道を上りきり、砂ぼこりの舞う大下降を終えて14時半チョンゴに着く。途中5m位道が切れていて渡渉があったが、ものの3分と入ってられない冷たい水で足がしびれる。

6月4日 晴 (チョンゴ→アスコール)

6時出発。畑の中から段丘にあがり30分位で、サーダーが温泉を教えてくれ、かなりぬるい湯だったが首までつかり陽が射しはじめるまで待つ。あがると寒いが頭も洗って身も心も軽くなった。3~4時間の工



アスコーレで購入	
アタ	850kg
羊	10頭
卵	70個

値段	
アタ	5Rs/1kg
羊	650Rs/1頭
卵	2Rs/1個

← アスコーレ
羊1頭・食分約13kg
久振りに焼肉料理

程なので、のんびり湯を楽しむ。温泉を過ぎると、高原状の風景に変わりトンゴールの村、すこししてスルンゴのアスコーレの3ヶ村に入る。スルンゴから用水路沿いに30分程歩いたらアスコーレだった。

アスコーレとは何と響きの良い名前だろうか、昔からこの名前で想像するのはきまってコバニ（杏）の実だった。植えたばかりのエンドウ豆や麦、この次にこの村を訪れる帰路には、もうエンドウ豆は終わり、麦も穂を出し、アプリコットもたわわに実っているに違いないと、ふと思う。

ここで、出発前に不足だったアタの問題が再びもちあがり、ダッソーで雇ったポーターの煽動でアタを支給せざるを得なくなり、結局850kg購入し、パイユまで新たに34人ポーターを増やすことになる。晩メシに山羊を一頭つぶし焼き肉にした。

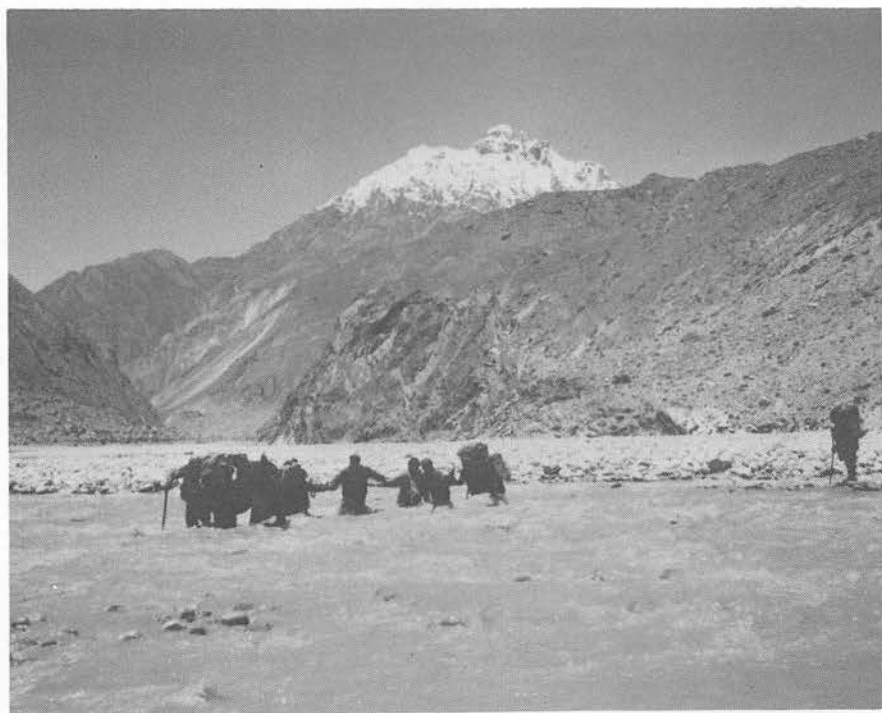
6月5日 晴 （アスコーレ→バルデュマン）

5時出発。村外の河岸段丘の草原帯を歩き3時間半位でピアフォー氷河に出会う。ラトック山群やバインター・ブラックへの入口である。奥の方に鋭い山が3つ見えた。ピアフォー氷河の横断に1時間位かかりコラホンに着く。落書きのしてある大岩のそばを過ぎ岩場のへつりを終えるとデュモルド川と出会った。まず支流の渡渉、そして本流の渡渉と都合5回渡る。深い所で太股のあたりまでの渡渉でかなり冷たいが、朝と違って刺すようなしびれはなかったような気がする。

この日はブラルド川の河原、ちょうどバルデュマンの手前あたりの岩小屋付近で泊まり。明日がパイユだから2ポロ（行程）進んだ計算になる。河原の為に風の通りでもものすごい砂塵が襲い、得られる水もブラルド川の泥水しかないキャンプ地だった。

6月6日 晴れ（バルデュマン→パイユ）

5時半出発。河原から再び段丘に出て、バルデュマンのキャンプ跡地を通り、1時間位で大岩壁のトラ



⇐ デュモルド河の渡渉
 翌早朝の渡渉になるのかと思っていたが、先頭グループは一気に渡る
 デュモルド河の上流に吊橋（ワイヤーロープ1本）があるが、回ってくると1日分の賃金と渡り賃が加算される

往路はどの隊もこの方法を探っている

キャラバン日程

現地で決定（？）されている日程（ポロ）

- 1日目 ダッソー〜チャボ
- 2日目 チャボ〜チョンゴ
- 3日目 チョンゴ〜アスコーレ
- 4日目 アスコーレ〜コラホイ
- 5日目 コラホイ〜バルデュマン
- 6日目 バルデュマン〜パイユ
- 7日目 パイユ
- 8日目 パイユ〜リリゴ
- 9日目 リリゴ〜ウルドカス
- 10日目 ウルドカス
- 11日目 ウルドカス〜ビアンゴ
- 12日目 ビアンゴ〜ゴレ
- 13日目 ゴレ〜コンコルディア
- 14日目 コンコルディア〜K2BC (5,200m)

実際に歩いた日程

- 1日目 ダッソー〜チャボ
- 2日目 チャボ〜チョンゴ
- 3日目 チョンゴ〜アスコーレ
- 4日目 アスコーレ〜バルデュマン
- 5日目 バルデュマン〜パイユ
- 6日目 パイユ
- 7日目 パイユ〜リリゴ
- 8日目 リリゴ〜ウルドカス
- 9日目 ウルドカス〜ゴレ
- 10日目 ゴレ〜コンコルディア
- 11日目 コンコルディア〜K2BC (5,200m)

◎賃金は、実際に歩いた日程が早くとも、現地で決定されている日程分の賃金を要求される。



⇐ バルデュマン

朝の風景

毎朝のことだが自分の荷物を捜し、取出す為、全員がほこりにまみれて騒ぎまわる

初めはビックリしたが、彼らにとっては早朝トレーニングのようだ

とにかく250人程なので、すざましいかぎりだ

ポーター賃金

(登山規則)

- ダッソー〜アスコーレ
 $40 + 15 \text{ (食糧)} + 12 \text{ (リターン)} = 67\text{Rs}$
 - アスコーレ〜K2BC
 $50 + 20 \text{ (リターン)} = 70\text{Rs}$
 - 休養(リリゴ・ウルドカス)
 20Rs
- ☆賃金は1日分
 ☆アスコーレ以上(休養日も)は食糧支給

(実際)

- ダッソー〜アスコーレ(3日間)
 $67\text{Rs} \times 3 = 201\text{Rs}$
- アスコーレ〜パイユ(3日間)
 $70 + 15 \text{ (食糧)} = 85 \times 3 = 255\text{Rs}$
- パイユ(1日の休養)
 $20 + 15 \text{ (食糧)} = 35\text{Rs}$
- パイユ〜ウルドカス(2日間)
 $70 \times 2 = 140\text{Rs}$
- ウルドカス(1日の休養分)
 $20 + 15 \text{ (食糧)} = 35\text{Rs}$
- ウルドカス〜K2BC(4日間)
 $70 \times 4 = 280\text{Rs}$

(登山規則)

第7章 41、ポーターへの賃金支払いは、次の要領による。

- a) 7日間以上のポーターは雇った日に賃金の50%、解雇する日に残り50%を支払う。
- b) 7日間以上雇うポーターへは、雇った日に1週間分の50%、残り50%を1週間後に支払い、以後は週単位で支払う。1週間に満たない場合は、解雇する日に全額支払う。



パイユまじか

ジリジリと照りつける太陽、夜の冷え込み。見渡す限りの岩と砂とブラルド河の流れ。

身も心も疲れてくる頃、緑が目にとびこんでくる。わずかばかりの緑だが、これがオアシスなのだろう。

目の前にはバルトロ寺院群も望めてきた

ポーターに関して

(我隊の場合)

○ スカルドで雇用したポーター

ダッソーまで自由に行かせる(賃金・交通費は不用) ダッソーで支給品の支給

○ 食糧関係

ダッソー～アスコーレ間は賃金(15Rs/1日)

アスコーレ～パイユ間も賃金(15Rs/1日)

パイユで食糧支給(パイユ～ウルドカス間の2食分)

(アタ・砂糖・塩・ギー・ダル・チリ・チャマルル・たばこ・マッチ・玉ねぎ)

(玉ねぎ・・・乾燥品の為、生の3倍程支給)

(生肉・・・アスコーレから羊をつれて行く)

その後の食糧支給

ウルドカス・・・アタ4日分

ゴ　　レ・・・アタ以外2日分

○ 帰路食糧

仮BCで支給するが、アスコーレ～ウルドカス間の食糧は自分達で持参しウルドカスにデポしてあるので、食糧は要らないからと、食糧費分(15Rs/1日)の要求・・・結局OKとする



バルトロ氷河舌端

カラコルムの名峰群に囲まれた全長5.6kmのバルトロ氷河を目前にした氷・岩等に包まれた暗闇から放たれたように、太陽の強烈な陽差しを吸収し一気に爆発するがごとく爆流とかしていた。

氷河の一步は、氷と土砂と岩屑の入り混じった登りから始まる

ポーターに関して

(登山規則)

第5章 ii) 低所ポーター

28 無料で供給

- | | |
|---------------------------|----------|
| 1、ガス／石油 | 1、 |
| (高所に応じて) | (8人に対して) |
| 2、防水シート | 1、 |
| (4米四方、細引付) | (8人に対して) |
| 3、レインコート／適当な大きさのプラスチックシート | 1、 |

29 次の物品を所持していない場合は、登山隊が準備する。北方地方／チトラルで購入のために使用した金はポーターの賃金から差し引いてよい。

- | | |
|-----------------|----|
| a) テニス・シューズ | 1足 |
| b) 毛糸の靴下(標準サイズ) | 1足 |
| c) サングラス | |

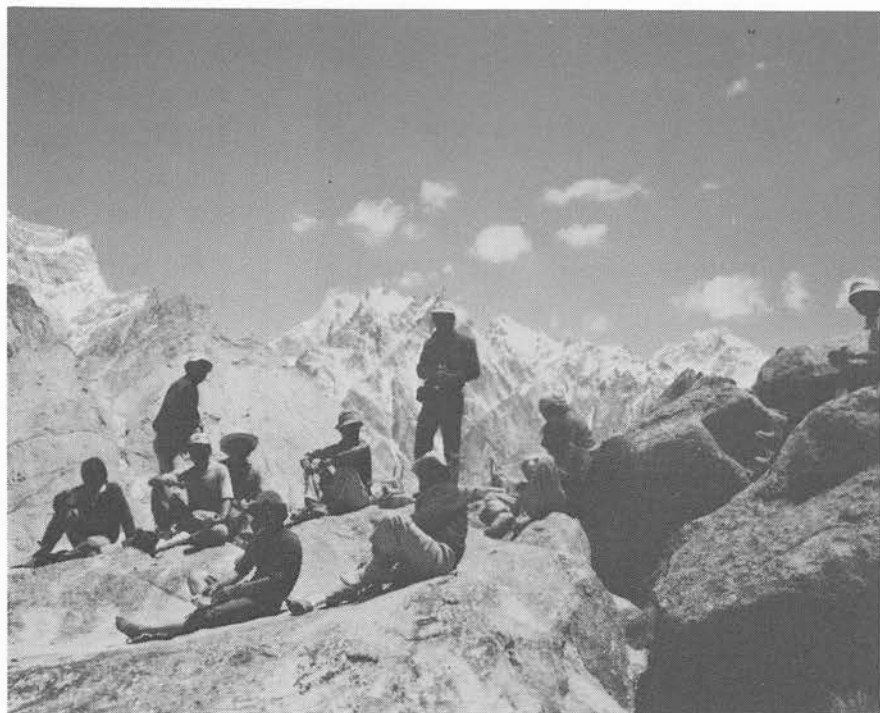
我隊の場合

シートの供給・・・リリゴでは20人／1枚の割、ゴレ・コンコルディアでは20人／1枚の他に、人数では割り切れないポーターにも供給

ストーブの供給・・・ウルドカスより10人／1台の割、ゴレ・コンコルディアでは10人／1台の他に、人数では割り切れないポーターに供給

○ シート・ストーブはキャンプ地に到着後、供給し翌朝集める

○ 人数で割り切れないポーターとは・・・各村、仲間といった意識が強いのか、10人・20人のほかにどうしても仲間はずれ(食糧も回してもらえず、シートにも入れない)ポーターがでてしまう



← ウルドカス

バルトロ氷河最後の
緑地・バルトロ
寺院群の展望台

ポーターはこの地
で、以後の日程分
の主食を焼きあげ
る。夕方迄、枯れ
小枝を燃やす煙が
たちのぼっていた

隊員は最後の緑の
中で、のんびりす
る

バスがあり、ポーターの動きが遅くなる。岩壁の出口が10m位のガリーになっており、重荷を背負ってはかなりシビアに思えた。そこを越えると快適な河岸段丘になり、左側に見える岩壁の裾を大きく川沿いに回り込んで小高い丘になった所がパイユである。11時過ぎに着く。

パイユとはバルティ語で「塩」を意味するという。そう言えば着く手前の河原に白い岩塩が沢山付着している所があった。

キャンプ地は、高くはないが森の中にいるような快適な所で250名のポーターが隊荷と共に滞在するには狭い感じはしたが、明日の休養日を前にして心が弾んだ。

6月7日 晴のち曇 (パイユ休養)

朝食後9名が裏山に順応トレーニングに出かけ、残った者でポーターに食糧を支給した。午後からはそれぞれ思い思いに休養を楽しむ。

6月8日 雨のち晴 (パイユ→リリゴ)

6時出発。朝方から雨がパラついてテントにはねかえり、ゆううつな気分で起きキッチン・テントで朝メシの支度をさせる。歩きはじめて約1時間でバルトロ氷河の舌端に出会う。推石のすさまじい押し出しを感じせずにはおれない荒涼とした風景の中を横断し、パイユ・ピークの対岸に渡り30分位でリリゴ。約3時間位の工程で9時には、砂地で背後を今にも崩れそうな風化した壁に覆われた感じのキャンプ地に着いた。

正面にはパイユ・ピーク、ウリ・ビアフォーの鋭い岩峰が見え、トランゴ山群の岩峰が美しい。

6月9日 晴 (リリゴ→ウルドカス)

5時出発。2時間位歩きリリゴ氷河からの支流に出会う。水量が少ない為濡れることなく渡ることができ



←

ゴレ

キャンプ地の朝

ゴレの朝は雪で始まった。昨夜は、仲間はずれのポーターをチェックしシート・コンロを供給しておいて良かった。登山の成功は彼らなくして決して語ることは出来ない、同じ人間・同じ仲間として接することが基本である

た。道はモレーンの中を複雑に縫うようにつけられて、時々踏跡を失うことがある。ウルドカスまであと1時間位の所で浮石を踏み、2m位下のクレバス状になっている所に落ちて指の爪をはいでしまった。

ウルドカスは、バルトロ街道最後の緑地という感じで快適なキャンプ地である。

6月10日 晴のち曇 (ウルドカス→ゴレ)

5時半出発。相変わらずバルトロ氷河のアップ・ダウンをくり返す。正面にガッシャブルムIV峰の西壁が見え、右手の頂上に白い冠雪をいだいたマッシャブルムの三角錐のピーク、左手前方にムスターグ・タワーが見え、いよいよバルトロの核心部に入ってきたことを感じる。12時半ゴレに着く。

6月11日 雪 (ゴレ→コンコルディア)

朝方、2時半頃からだろうかテントにパラパラ雪の降る音がして目が覚め、ゆううつな気分で4時頃までうとうとしていた。4時頃ポーターが起きはじめ、雪の降る中出発準備。6時半出発。くるぶし位まで埋まる雪の中を、うねるように登り下りの起伏が続く、コンコルディアについたのが12時半頃。

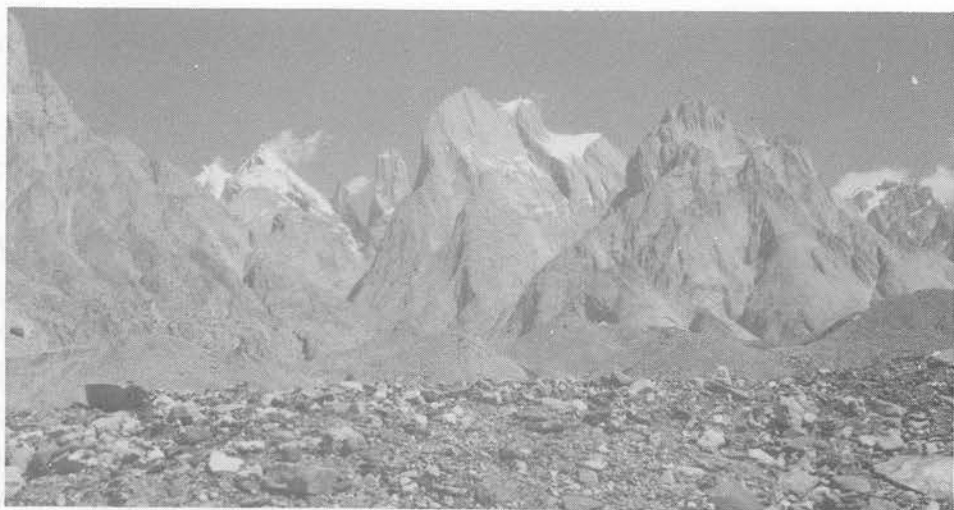
期待していたコンコルディアからの眺望はまったくなく雪が降り続いていたが、夕方になると雲の間に間に目指すK2の雄姿が望めた。

6月12日 曇のち晴 (コンコルディア→仮BC)

6時半出発。長いモレーンの中を歩きはじめ、途中ブロード・ピークBCのカナダ隊のキャンプ・サイトを過ぎて10時半頃5,200mの仮ベース・キャンプに着く。

スイス隊がBCを設置しており、現在C3建設とのこと。

〔バルトロ氷河
の山々〕

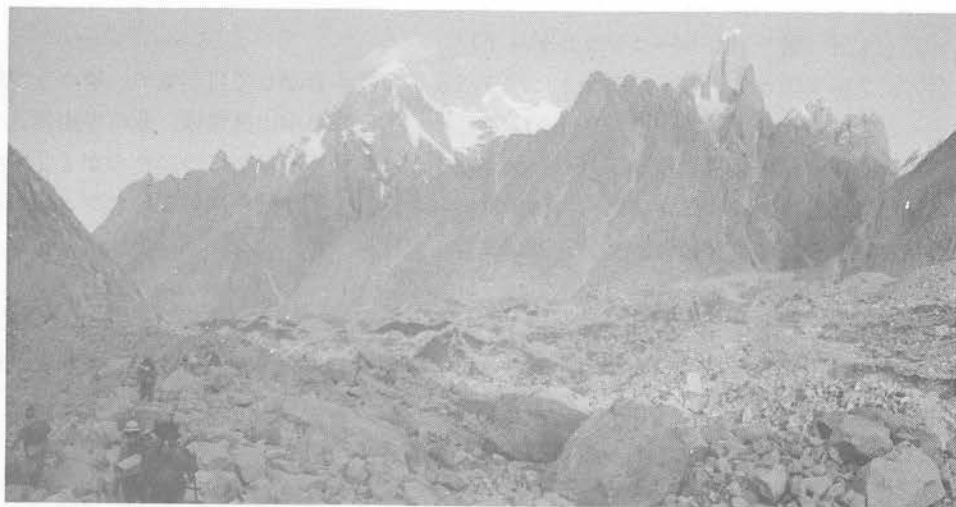


トランゴ
タワー



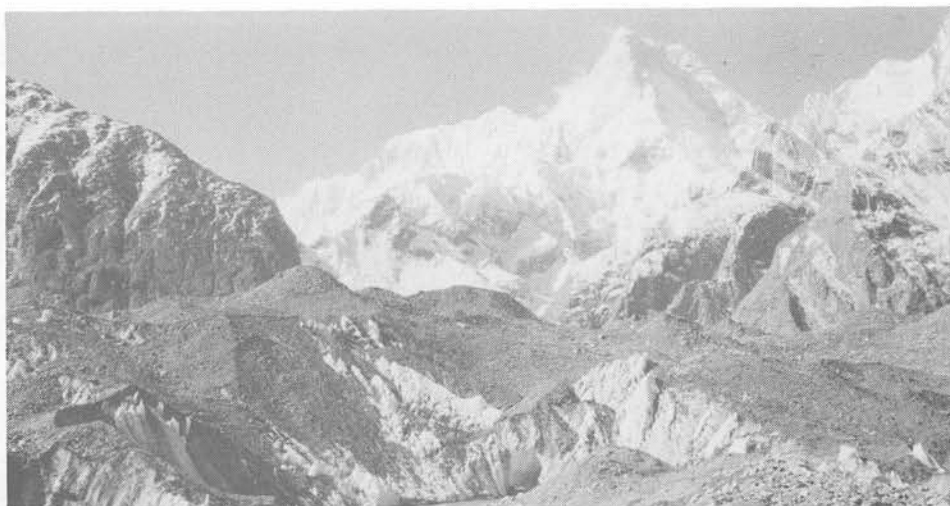
パイユ
(リリゴのキャ
ンプ・サイト
より)

パイユ・ピーク
と
ウリ・ピアホ

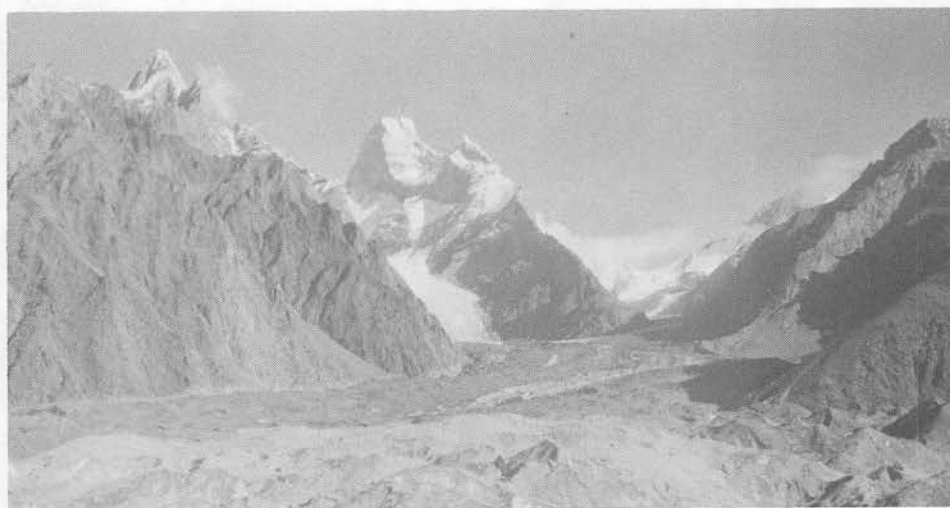


〔バルトロ氷河
の山々〕

マッシャー
ブルム

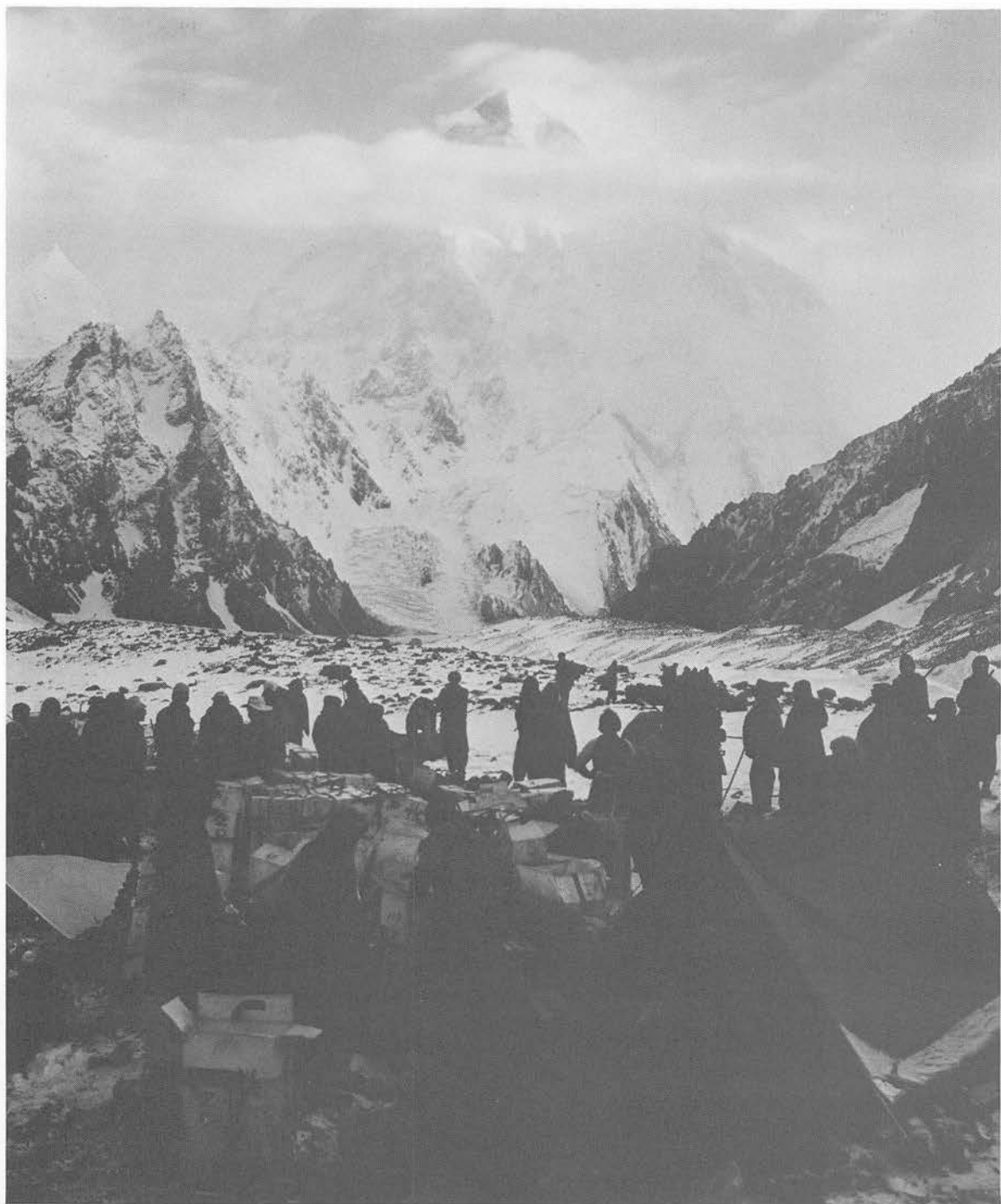


ムズターグ
タワー



ガッシャー
ブルムⅣ峰





K2 (8,611m)

コンコルディアからのK2を期待していたが、天気が悪く望むことができなかった。雪の降る中でのテント場の整理、ポーターの対応からも、落ち着きを取戻すと、雪も止み、ガスが動きだし、ガスの間に間に、その姿を、現してくれた。ただ、じっと見つめるだけだった。

K 2 初登頂までの先駆者の記録

- 1956年 英国陸軍インド測量部の測量将校のモントゴメリー大尉が地平線上に高山山群を見つける。測量日記の中でその山頂のそれぞれにアラビア数字で番号をふった。数字の前に、インド測量部がカラコルムという名称を略記するときの符号である「K」をつけた。
- モントゴメリーが測定したのは35峰。現地の牧童たちがマッシャープルム（雪の壁）と呼んでいた「K1」を省いてK3、K4及びK5を名称し残りの諸峰は名前のないままだった。K2については、そこに記録された山群の中でK2がもっとも北にあること、またK2がほかの諸峰よりぬきんでて高いことはわかっていた。
- 1861年 イギリスの探検家ゴドウィン・オースチン
バルトロ氷河に入りマッシャープルムの支稜からK2を間近に見、初めてカラコルム山系とK2との関連を確認。ポーターからバルティ語でチョゴリ（大きな山）という名前を聞く。
- 1887年 イギリスの探検家フランシス・ヤング・ハズバンド
北面のシャクスガム河から氷河に入る付近でチョゴリ（K2）を望む。
- 1892年 イギリス・ロンドンの芸術学校教授ウィリアム・マーチン・コンウェイ
初めてK2の麓に達し、パリのコンコルド広場を思い出させる十字路にコンコルディアと命名
- 1902年 イギリスのオスカー・エッケンシュタイン隊長（6名）
イギリス・オーストリア・スイスの国際隊で東北稜6,500mに達する。
- 1909年 イタリアのアブルッツィ公ルイージ・アメデーオ隊長（13名）
東北稜と西側の氷河（アブルッツィ公の家名にちなんでサボイア氷河と命名）に入り、北西側も調査するが、いずれもアプローチ、又、ルートも長く危険と思われ、南西に転じ南東稜「アブルッツィ稜」を発見する。6,000m付近まで登る。
- 1929年 イタリアのスポルト公隊長
南東稜偵察、5,600mまで。
- 1938年 アメリカの医師、チャールズ・ハウストン隊長（隊員6名、シェルパ6名）
北西稜の偵察後、南東稜（アブルッツィ稜）に登り、ペッツオルトのハング、ハウスのチムニーを突破して7,900mに達する。
- 1939年 アメリカのフリッツ・ウイスナー隊長（隊員6名、シェルパ9名）
同じ南東稜に向かい、7,900m地点に第9キャンプを設営し8,380mに達するが、補給のトラブルと隊員の救援などから隊員1名とシェルパ3名が帰ってこない。
- 1953年 アメリカのチャールズ・ハウストン隊長が再度（隊員8名、フンザ・ポーター6名）
第2次大戦後、14年後に再度アメリカ隊がK2にやってくる。以前のキャラバンはインド・カシミールのスリナガルからだったが、スカルドがキャラバンのスタート地点になり日程が約半になる。シェルパは政治的理由でネパール方面から呼べなくなり、フンザ・ポーターを雇用。
1938年と同じ南東稜に登り7,700mの第8キャンプにはいるが悪天になる。隊員1名が高山病になり、搬出中に滑落事故に遭遇し奇跡的に5隊員は助かるが、態勢立直しのために固定しておいた病気の隊員が行方不明となる。報告書「K2－非常の山」。
- 1954年 イタリア、アルディート・デージオ隊長（隊員18名）
イタリア・オリンピック委員会を動かし、国家的事業としてK2にのぞむ。登山初期に隊員1名を肺炎で失うが、1909年同じイタリアのアブルッツィ公によって拓かれたアブルッツィ稜（南東稜）から、7月31日に2隊員がK2（8,611m）に立つ。

日誌 (仮BC～BC)

6月12日 仮BC設営
 全員によるミーティング
 パーティー編成
 仮BC～BC間の順応行動計画
 メール・ランナー (2名) が到着
 隊の総人員 48名
 隊員 16名
 連絡将校 1名
 サーダー 1名
 アシスタント・サーダー 1名
 コック (隊員専用) 1名
 コック (連絡将校専用) 1名
 メール・ランナー 2名
 ポーター 25名

6月13日 BC→BC→仮BC
 A・B隊

仮BC
 C・D・E隊、中岡
 スイス隊と親睦会

6月14日 仮BC→BC→仮BC
 全員 (雪崩により武部が手に怪我
 途中より仮BCに戻る)

6月15日 仮BC→BC
 A・B隊
 仮BC→BC→仮BC
 C・D・E隊
 仮BC
 中岡・塩田

6月16日 BC→ (6,250m) →BC→仮BC
 A・B隊
 仮BC→BC
 C・D・E隊
 仮BC
 中岡
 メール・ランナー (2名) 出発

6月17日 仮BC
 A・B隊
 BC→仮BC
 C・D・E隊
 仮BC
 中岡
 サーダー、アシスタント・サーダー
 ポーター (22名) を解雇
 フランス隊BC入り

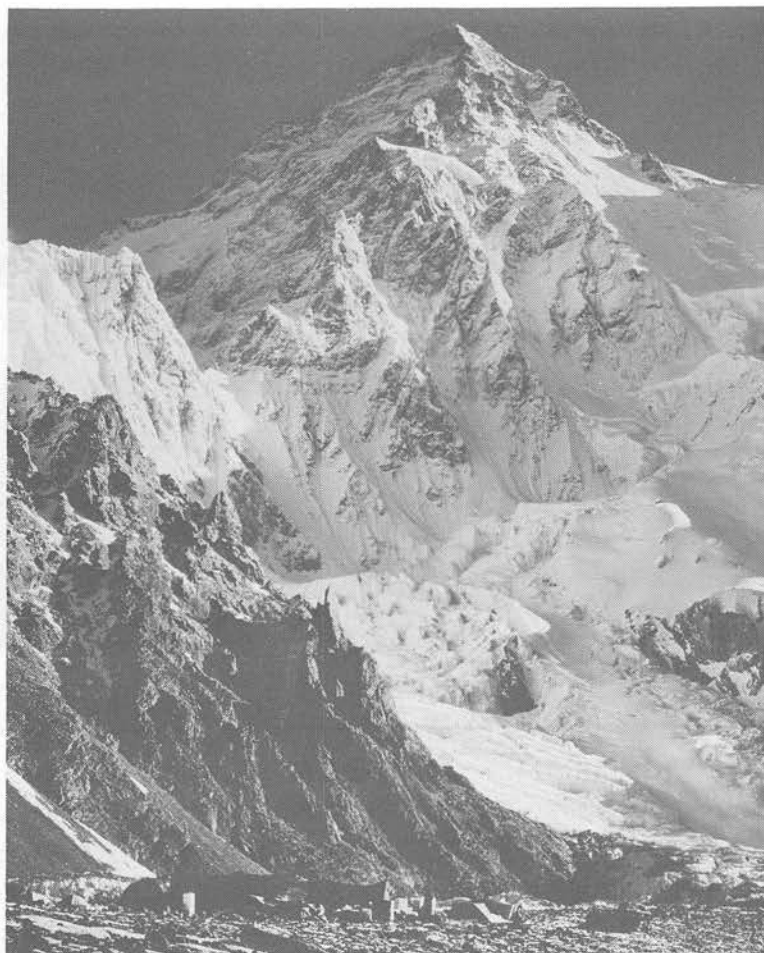
6月18日 仮BC→途中→仮BC
 中岡・武部
 仮BC
 他、全員
 ミーティング
 全員

6月19日 仮BC→BC
 A・B隊
 仮BC→BC→仮BC
 C・D・E隊
 スイス隊 (2名) 登頂

6月20日 仮BC→BC
 C・D・E隊、中岡
 ポーター (2名) 荷上げ後に解雇

パーティー編成

A 隊	山田 (昇) ・村上・岡田
B 隊	吉田・熊田・武部
C 隊	細貝・山田 (修) ・飛田
D 隊	伊地知・塩田・石田
E 隊	土谷・遠藤・坂上
フリー	中岡



頭上にK 2

(仮BC5, 200mとK 2)

スカルドを出発し、12日間のキャラバンによってK 2の真下5,200mの地点に辿り着く事ができた。ほんとに、ほんとうにそうなのだろうか、とさえも思いをめぐらす。

コンコルディア、ゴドウィン・オースチン氷河、サボリア氷河、アブルツィ稜等、地名の由来を、歴史の流れを、歴史のおもみをあらためて感じざるをえなく、この地でK 2を仰ぎながら思考し、苦闘したであろう素晴らしい先駆者を思いめぐらせば、身震いのする思いでさえあった。

仮BCに到着と同時にポーターへの賃金支払い。ダッソーを出発する時にアドバンスとして100Rs、残りは解雇する時にまとめて支払いとなったので途中での煩雑さがなかった。

ありがとう、と言いながら握手をして賃金を渡すと嬉しそうに1枚1枚と丹念に数えていた。中には数え方を知らない者もいて、他の者に数えてもらう一幕もある。なにはともあれ、大きなトラブルも無く日程通りに隊荷を仮BCに集荷出来たのは彼らの御陰である。その中から仮BC～BCのポーターとして25名を再雇用する。

石積みと養生シートでメステントを造り、回りに隊員・連絡将校・キッチンテントを設営し、仮BCが出来あがった。出来あがったばかりのメステントに全員が集合し、明日からの行動計画が発表された。

仮BC第1日目の夜は、満天の星が輝いていた。



↑

仮BC～BC間のポーターへ支給

支給品（シュラフ・セーター・軍手・軍足・靴・ライターと解雇する日にポロライドで各自1枚づつ顔写真）期間途中で帰る場合は全て没収。食糧支給。

賃金・1人/1日 100Rs 25kg



↑

慰霊碑

ゴドウィン・オースチン氷河とサボリア氷河を別ける小高い岩稜付近にあった。背後にK2、波打つ両氷河の流れとコンコルディア、ブロード・ピークがチョゴリザが手にとるようだBCに上がる前日に訪れ隊の安全を祈願した

仮BC～BC間の行動

仮BC設営の翌日、A・B隊によるルート工作とポーターによる荷上げが開始された。ルートは計画通りアイス・フォールの中央に拓くことが出来、仮BC出発の約2時間後の8時頃にはBC予定地に達する。地形・水の関係からBCとしてどうか、と言う連絡がはいるが翌日に再度上がりBCとして決定する。水はガラ場右側の雪溪から数日後には得られそうだし、機能とすれば計画通りと思われた。

ポーターによる荷上は順調に進んだ、仮BC～BC間もそうだがキャラバンもサーダーの力量に負うところがおおきかった、良いサーダーにめぐりあった。17日までにはだいだいの隊荷もBC・5,500mに上がった。22日にはサーダーも含め24名を解雇するが一抹の寂しさがあった。

隊員の高所順応は、BC入山とBC以上での行動をスムーズにさせるために、約1週間の順応行動期間を設け実施した。仮BCとBC間の何回かの往復とBC1泊の行動は、各隊員によってまちまちであったが、全ての隊員に障害が表れた。高所に体が対応し順応するための段階である。必要な1週間であった。



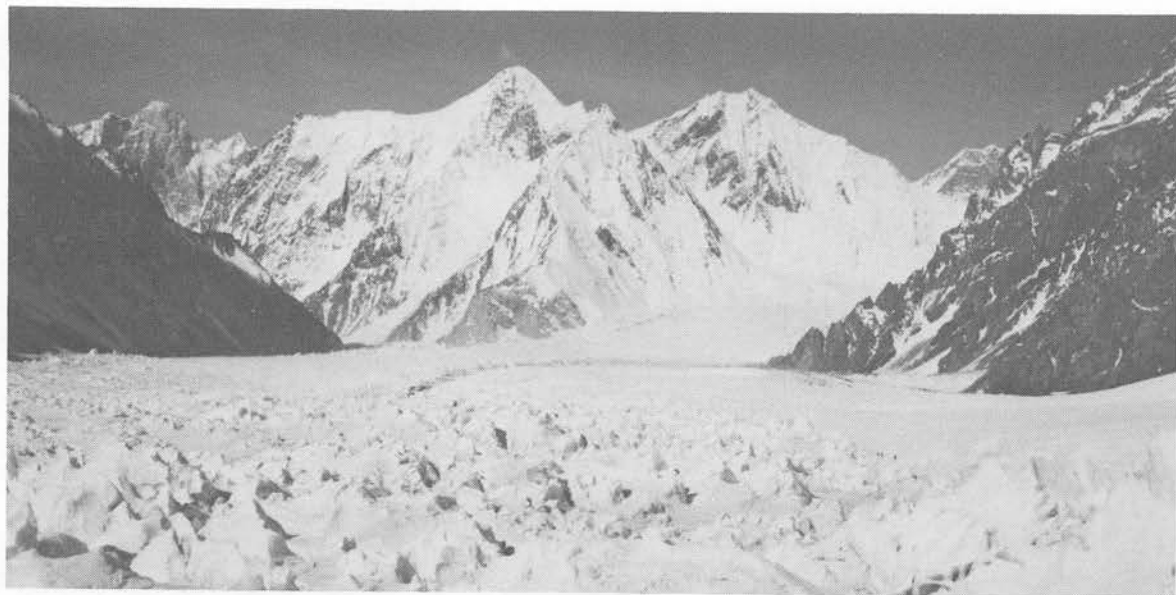
仮BC～BC間のルート

仮BCからモレーン帯の岩の上を直進し、モレーン帯が終わるとともに氷河の平坦地に入っていく。目の前のアイス・フォールは中央部分から左上してぬけるとガラ場になる。ガレに足をとられながら氷河沿いに登る

仮BC～BC間のアイス・フォール帯

ゴドウィン・オースチン氷河は、南東稜の末端付近でアイス・フォールを形成している。場所によってはロープを固定した。登山が終了し下降した時は融解で地形が変わっていた、氷河上の水溜まりに何度か落ちたり、氷河上の流れを渡った





↑ （仮BC方面を見る）

K2とブロード・ピークの間に横たわるゴドウィン・オースチン氷河の流れが山々と調和して素晴らしい展望が広がっている。だが、両峰からの雪崩には細心の注意が必要だ。

K2からの雪崩は、ブロード・ピークを駆け登るとも聞いた。そんな雪崩に遭遇してしまった、6月14日の朝、全員が行動の日で何人かはアイス・フールを抜け、ガラ場で休んでいる時、K2の上部・肩の付近から雪煙があがりゆっくりと下がってくる。雪崩だ！次第に雪煙が大きくなっていく。大きいぞこれは・・・アイス・フールの手前に広がった。雪煙はブロード・ピークまで達していた

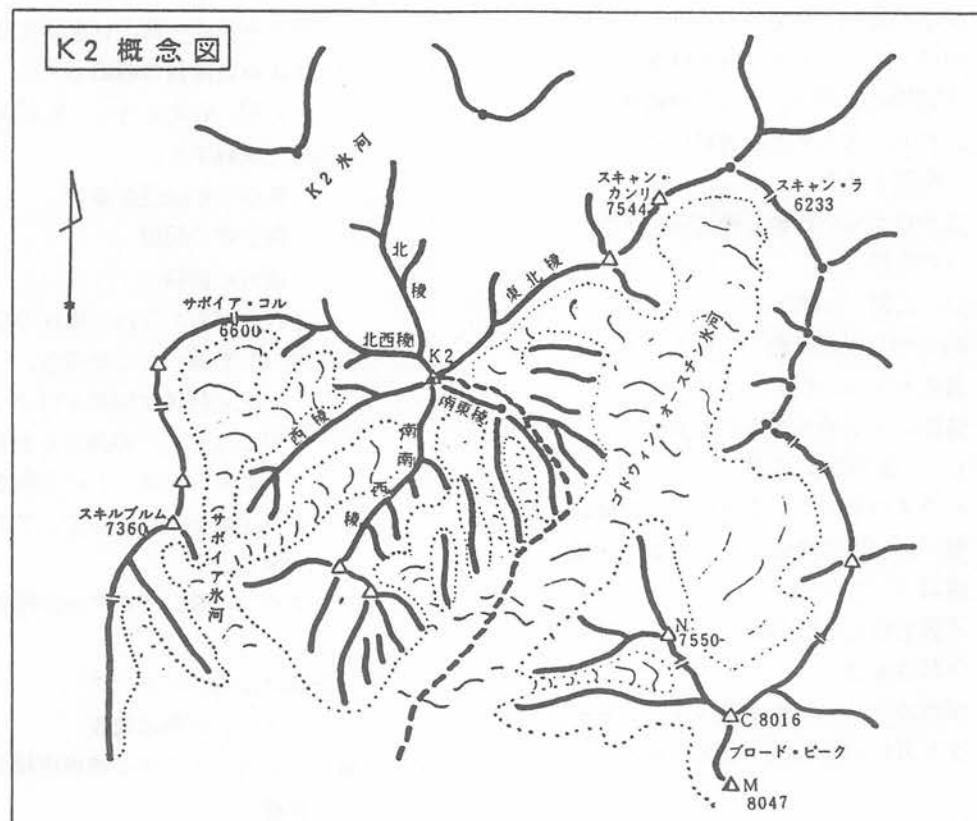
（一面が雪煙に覆われた仮BC方面） ↓



K 2 1984年までの登山隊の記録

南東稜			北東稜			南南西稜		
1909年	イタリア隊	(試登)	1902年	国際隊	(試登)	1979年	フランス隊	×
1938年	アメリカ隊	×	1976年	ポーランド隊	×			
1939年	アメリカ隊	×	1978年	アメリカ隊	○	南 壁		
1953年	アメリカ隊	×				1981年	合同隊	×
1954年	イタリア隊	○	北西稜			北 稜		
1960年	アメリカ・		1975年	アメリカ隊	×	1981年	日本隊	(偵察)
	ドイツ隊	×	1982年	ポーランド隊	×	1981年	日本隊	○
1976年	日本隊	(偵察)	西 稜			1983年	イタリア隊	○
1977年	日本隊	○	1978年	イギリス隊	×	南 稜		
1979年	国際隊	○	1980年	イギリス隊	×	1983年	イギリス隊	×
	(南側稜より転進)		1981年	日本隊	○			
1980年	イギリス隊	×	南側稜					
	(西稜より転進)		1979年	国際隊	×			
1982年	オーストリア隊	×						
1982年	ポーランド隊	×						
1983年	スペイン隊	×						
1984年	スイス・他	×						

○ . . . 登頂 成功
 × . . . 断念



日誌

登山活動 BC設営～第1回目アタックに向けて

6月20日	BC設営	7月 1日	下部プラトーに達す
	隊の人員 (22名)	7月 2日	C2設営後、黒いピラミットへのルート工作を行い、全員がBCに集結
	隊員 16名		メール・ランナーが到着
	コック (隊員専用) 1名		法政大トレの2名がBCに来る
	キッチン・ボーイ 1名		メンバーの再編成と行動計画指示
	メール・ランナー 2名	7月 4日	C2で、登山活動に入って初めて、朝テントに太陽の日ざし
	連絡将校 1名		スイス・フランス隊がC2に入ってくる (アタック)
	コック (連絡将校専用) 1名		
	(連絡将校とコックは、仮BC)	7月 6日	C3 (7,400m) 設営
6月21日	全員休養・安全祈願		スイス隊 (3名)・フランス隊 (1名) 登頂しC3に戻る
6月22日	登山活動開始		フランス隊 (2名) アタックに出る
	A 隊 山田 (昇)・村上・岡田	7月 7日	C4予定地に達する
	B 隊 吉田・熊田・武部	7月 8日	フランス隊、1名行方不明
	C 隊 細貝・山田 (修)・飛田	7月13日	7日以降13日にかけて、C4までのルート工作・荷上げを済ませることにより各隊員の順応もする
	D 隊 伊地知・塩田・石田		この間、計画のAC (8,200m) について検討する。
	E 隊 土谷・遠藤・坂上		雪崩の危険性が多い
	フリー 中岡		荷上げの問題
6月25日	C1予定地 (ハウスのチムニー) に向け、ルート工作・荷上げをするが予定地は6,700m。BCとの高度差は1,200m、又、悪天の連続の為キャンプ配置を変更		疲労の蓄積
	26日からの行動計画指示、メンバーの変更		これらが考えられ、現在のC4予定地 (7,800m) とした場合、
6月26日	C1設営 (6,250m)		上記の問題は解消されそうだが、
	相変わらず天候悪く、C1に上ると毎度ながらの吹雪		何よりも、7,800mからでもアタックは充分可能、との判断からC4予定地をACにして、アタック体制をとる
6月27日	韓国、K2偵察隊BCに来る		フランス隊のドクターが搜索に上る
6月28日	C2 (6,800m) 設営		
	ハウスのチムニーを抜けた上部の岩壁下。以前の隊のテント残骸が氷漬漬になっている		
	不調を訴える隊員が出始め、BCへ下降させる		
6月29日	関西カラコルム登山隊 (マッシュャーブルム) の重広氏と交信できる		
		全員によるミーティング	
		アタック計画の発表	
		7月15日	14日・15日と無風快晴の下で、休養



←

BC全景

傾斜のあるガレ場
を整地して登山の
基地・BCを建設

メス・テント

16名全員が入
れる石積みで養
生シートで屋根
をかける

隊員用テント 7

コック・

キッチン用

キッチンテント1

便所（石積み）1

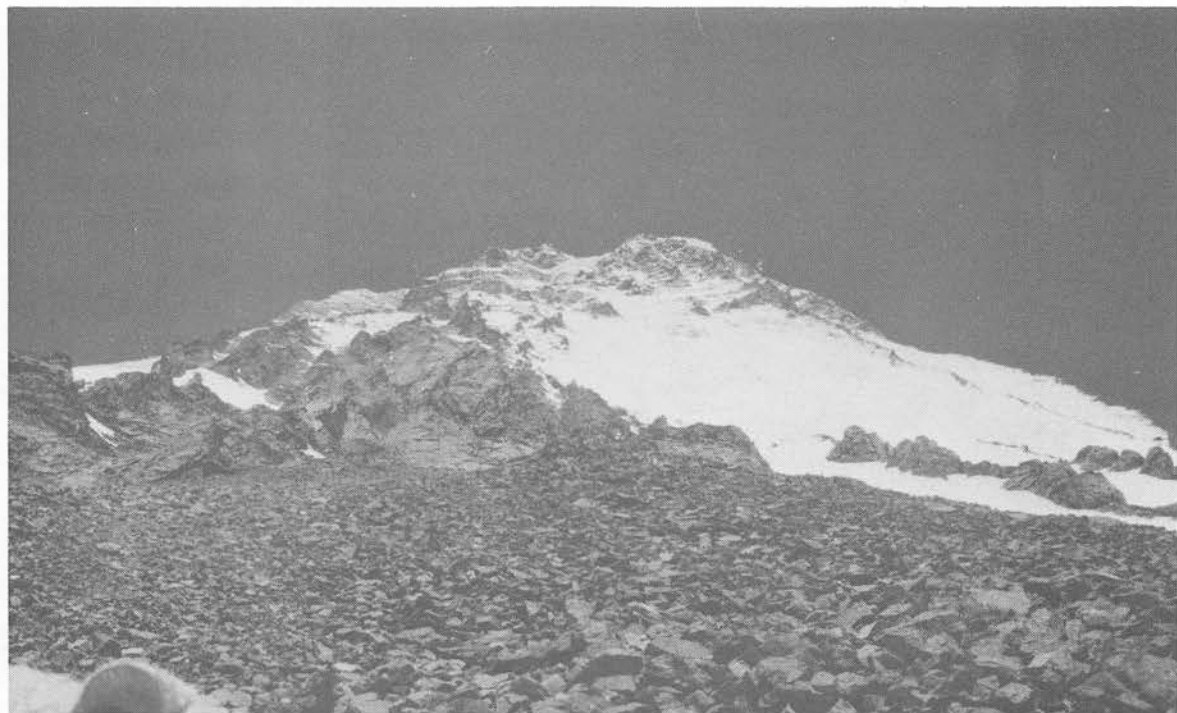
キャンプ配置の変更・登山活動

6月19日にBCを設営した時点で、A・B隊によって5,800mさらに6,250mまで達し、ルートの確認はされていた。21日から登山活動に入りC1予定地までのルートワークと荷上げにあたるが、C1予定地のハウスのチムニー下は高度計によると6,700mを指し、さらに連日の悪天は長時間の行動をさまたいでいた。だが当初の計画・可能性に向かってC1予定地を確保しようとするが、高度差・天候・隊員全員が荷上げ可能なかどうか再度検討した結果、C1・6,250m、C2・6,800m、C3・7,400mとキャンプ配置の変更をする。

変更決定の翌日6月26日にC1、28日ハウスのチムニーを抜けた上部の岩壁下にC2を設営。この頃より2～3人の隊員に不調・疲労が表われてきたのでBCに下降させ休養をさせる。パーティーを変更させながらもルートワーク・荷上げ・休養のローテーションによってルートは伸び、荷上げがされていく。

ルートは、以前の各隊のフィックス・ロープが所々に残置され使用出来そうなロープもありそうだが人数の多い我々は7,400mのキャンプまでは、張ることに計画をしていたが、残置されているロープやハーケン類によってルートは導かれるのでルートワークは順調に展開される、反面に高所順応が遅れ気味になる。7月1日には南東稜の核心部・黒いピラミットを突破して待望の下部プラトーに達しC3へのメドもたち全員BCに下降し休養、再度のパーティー変更と行動日程の組直しをしてC4へのルートワークと荷上げを開始、7月6日にはC3設営、翌7日にはC4予定地にルートを伸ばし、ほとんどの隊員がC4付近までの高度を体験後、再度全員がBCに集結した。

アタックキャンプを現在のC4（7,840m）から上部に出す計画だったが、雪崩の危険性、荷上げ等、の問題があり、なによりも現在の地点・7,840mからでもアタックは充分可能との判断から、アタック体制に入る



(BC～C1間 ルート)

BC～C1ルート

BC上部のガレ場をさけ、右側の雪面を直上しガレ場上部の5,800mのテラスに向け左上。テラスから南東稜を形成する一本の支稜を雪稜・岩稜・岩と雪のミックス帯を登る。

登山も中盤から後半になると、氷に閉ざされていた岩が浮石となりフィックスを切断させたり、妨害してくる。一本の稜を一気に直上気味に登るので落石の危険性がある。

上部岩壁を左のガリーから抜け（直上ルートもある）雪面を2ピッチでC1。BC～C1間 21ピッチ

第1キャンプ(6,250m) ⇒

計画では、この地点にC1を設営する予定でなかったが、状況の変化により6月26日に設営した。我々が登山を開始した時に、日山協隊が使用したと思われるスノー・ボードとすでに登山活動をしているスイス隊のテント（その後に入山してきたフランス隊も使用）2張があった。

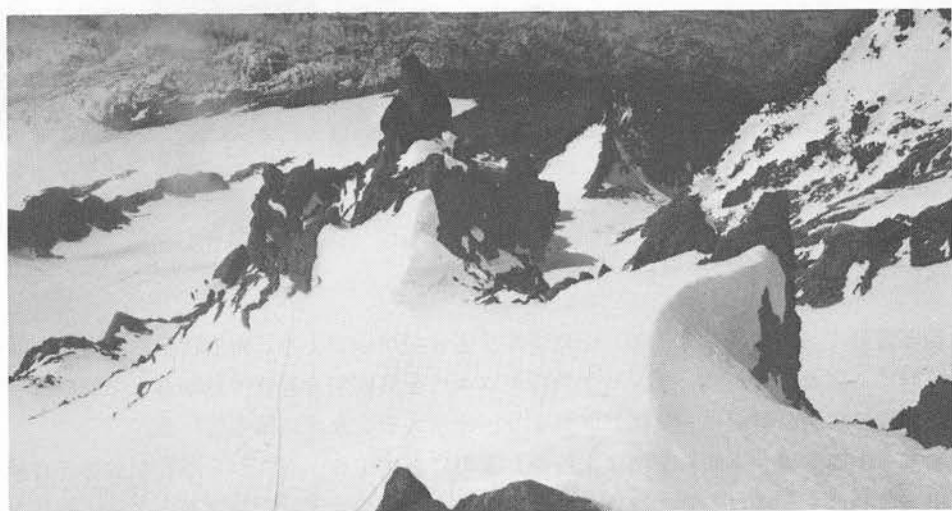
最高時にテント3張を設営したが、スペースが少ない。登山初期から中盤にかけて、ここに来ると必ずといってよいほど吹雪かガスの中だった。上部にルートが伸びると、C1はデポ地としての役割がおなくなった。（宿泊者数：56人）

(BC～C1間)

BC右側の雪面
を登る



下部にBCを
望む





(C1～C2)

C1～C2 ルート

岩と雪のミックス帯にアイゼンをガリガリさせながら右上、三角形岩峰を左から回り込み右上部の雪稜に向けて雪面をトラバース。ハウスのチムニーを形成する岩壁付近からおちている雪面をトラバース。達した雪稜の右側の雪面は一気にゴドウィン・オースチン氷河に落ちている。

2ピッチの雪稜から傾斜を増す岩稜を左手の岩と氷のミックスから浮石しのある岩稜を直登、そのうえ直登出来ない稜を一度は右側、次は左側から越すと、稜の左手側が急雪面となっておりその上部には黒い城砦（ペッツオルトのオーバーハング）が威圧している。黒い城砦は基部から左手の5m程の凹状をワイヤー・ハンゴで越し、その上のスラブ状10m強もワイヤー・ハンゴで直上して安定したテラスに立ち、テラスを左にトラバースし乗越す。傾斜も落ち岩クズ帯を行くとイタリア隊によって作られた石のプラットフォームに立つ。1張のテントは整地することなく設営できそうだ。

黒い城砦を左から越す時に、すぐ上に岩壁帯がたちはだかるが、この岩壁帯の中間部にハウスのチムニーがある。急雪面を1ピッチで左上するハウスのチムニーに入る。残置されているワイヤー・ハンゴを使用して越す。チムニーを抜けると雪面が広がり3ピッチ程で岩壁下のC2。

(C1～C2間 35ピッチ)

第2キャンプ(6,800m) ⇒

全キャンプ中、風当たりがよく、風通しも良いようだ。ハングした岩壁の下全体的に傾斜している。固雪と氷を削り、テント・サイトを作るが、高所の影響もあり苦しい作業になる。風も、邪魔をする。

テント3張を設営する。地理的にも高度的にも宿泊者が一番多い。だが、全体的に傾斜をもつことから気分的に、ゆっくり出来ない場所。南東稜自体キャンプ地は限られてしまう。(宿泊者：93名)

(C1～C2間)

C1
と
ゴドウィン・
オースチン氷河



ルート工作



〔C1～C2間〕

上部に
黒い城砦
(ベッツオルトの
ハング)



黒い城砦を
左から越すと
イエローバンド
(ハウスのチムニー)
に入る



C2直下





(C 2 上部)

C 2 ～ C 3 ルート

上部の岩壁を右側から取付きガリーを左上し、直上して岩稜にでる。傾斜のおちた岩稜からミックス帯を進み稜の左側壁を1ピッチで岩稜に立ち稜をガリーから抜け、稜の左側ぞいに岩と雪、岩と氷等のミックス帯から急雪面を1ピッチ登る。直上出来ない岩稜を右側壁からワイヤー・ハシゴによって越す。傾斜の落ちた岩稜から7～8m程で2段になっている壁を越し岩クズをすぎると岩壁の下、のんびりと休憩できる場所になる。そのすこし左側のちょっとした平坦地には、以前のキャンプ・サイトのように一本の酸素ボンベがあり歴史を物語っている。

次のピッチも直上出来ないで、右側の雪面から傾斜の急なガリーを直上して再度岩稜にあがると、核心部の黒いピラミットの登攀にかかる、左手の雪面を2ピッチで岩壁の下、2ピッチ程直上でピラミットの頂点付近になる、BCまで一気になぎおちている。

頂点付近から傾斜が落ちた岩稜、雪面から再度の岩稜は左側のガリーからぬける。南東稜をC2からは、右に左に直上と、岩稜・ガリー・雪面・側壁・岩と雪のミックス帯等から抜けていく。

岩稜上から、岩と雪のミックス帯を2ピッチ右上し、氷雪壁を1ピッチ直上すると下部プラトーに達し、プラトウの雪面をほぼ真直ぐに5ピッチ登った地点にC3。

(C2～C3間 48ピッチ)

第3キャンプ(7,400m) ⇒

全体的に緩傾斜をもつ下部プラトーの中心部なのだろうか、わずかに平坦地がある場所・雪の上に2張のテント。C1・C2では考えられないほどの気づかいもなく動き回れる。展望は抜群。なによりノンビリとキジがうてるのが最高だ。(宿泊者：51名)



〔C2～C3間〕

7,000m付近の
ワイヤー・ハシゴ
を攀る。

はるか下のガレ
場にBCが望める

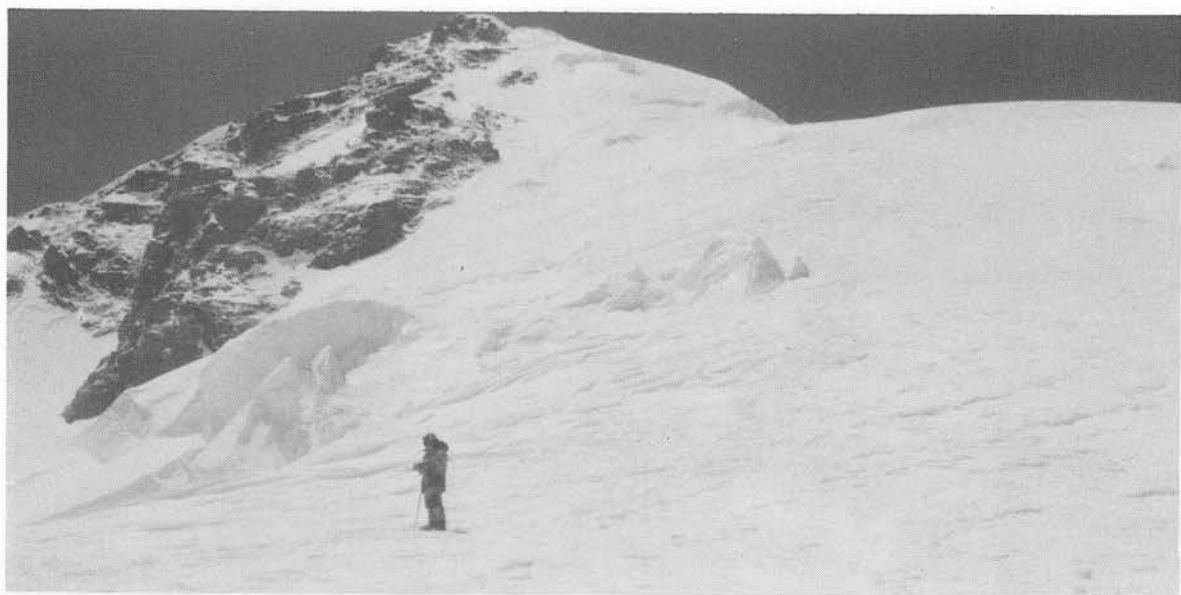




↑（黒いピラミットを攀る）

（C 3 直下、黒いピラミットを越し下部プラトーにあがる、一歩一歩が苦しい） ↓



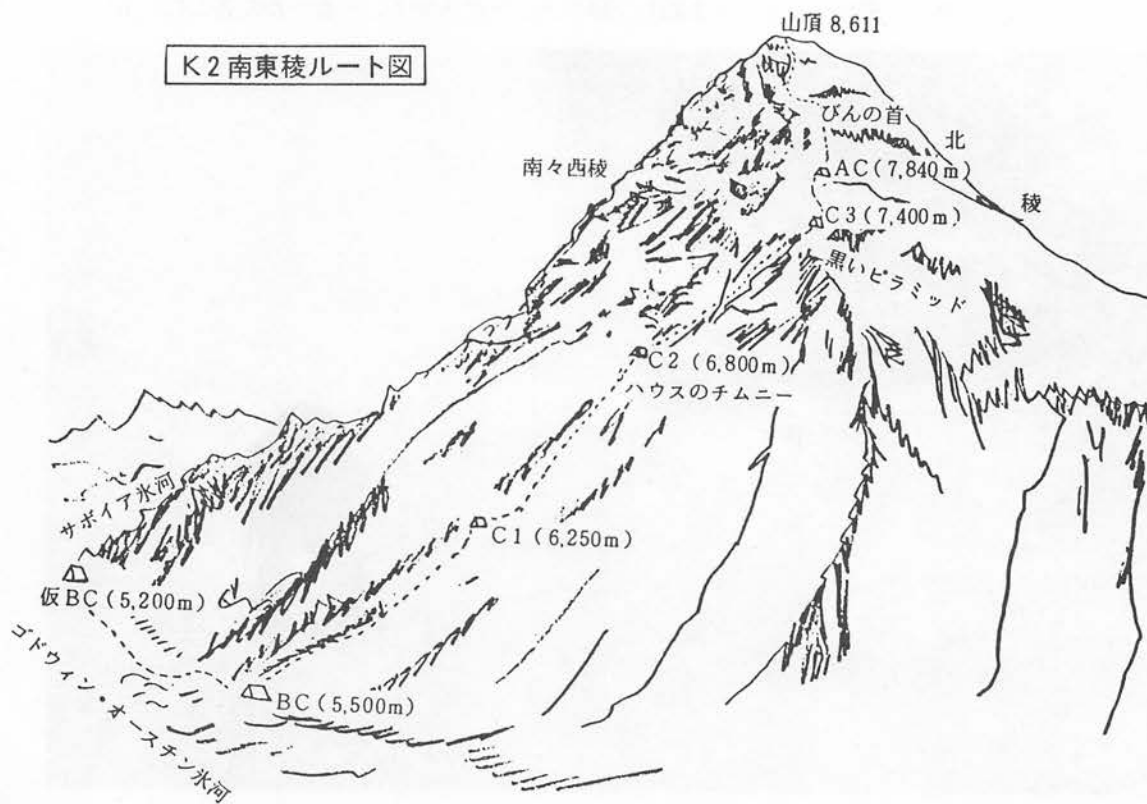


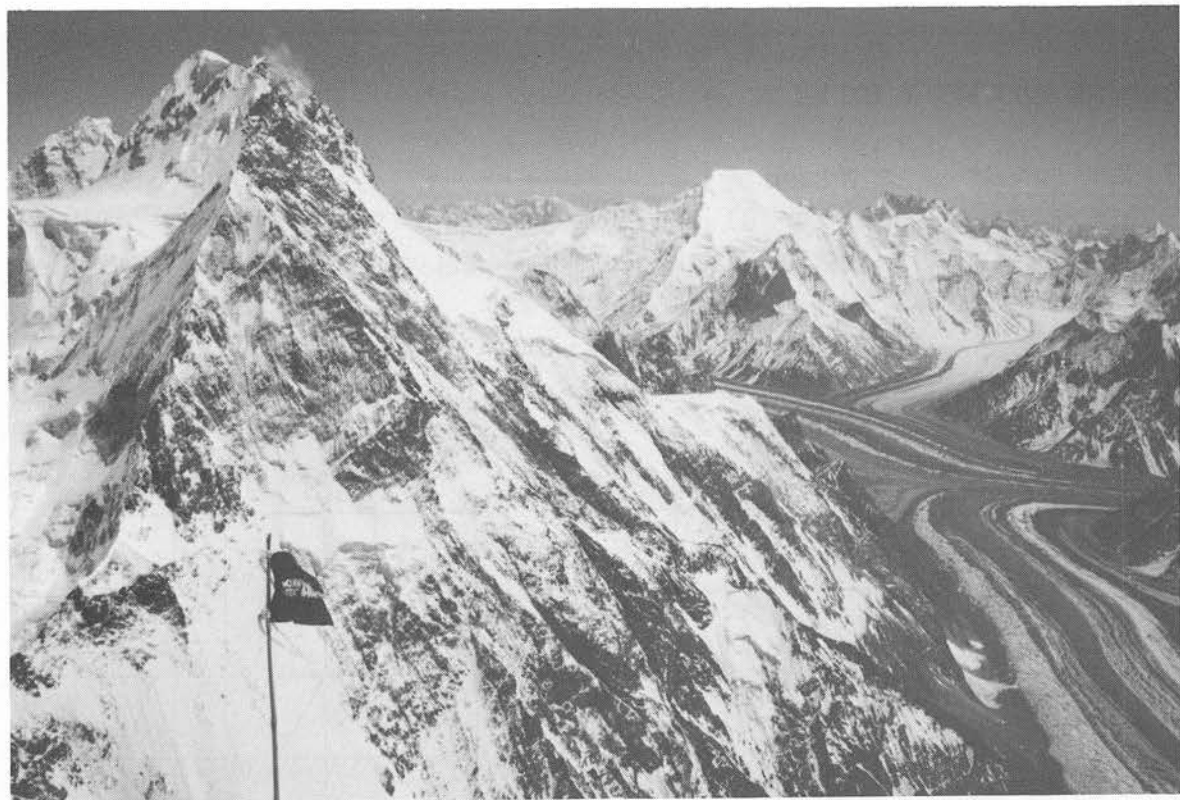
(C3 上部)

C3 ~ AC

緩傾斜の雪面を直上し、左手上部の上部・プラトーに上がる氷雪壁帯に向かって左上する。3ピッチで氷雪壁帯を抜け雪稜のどんずまりにACを設営。

K2 南東稜ルート図

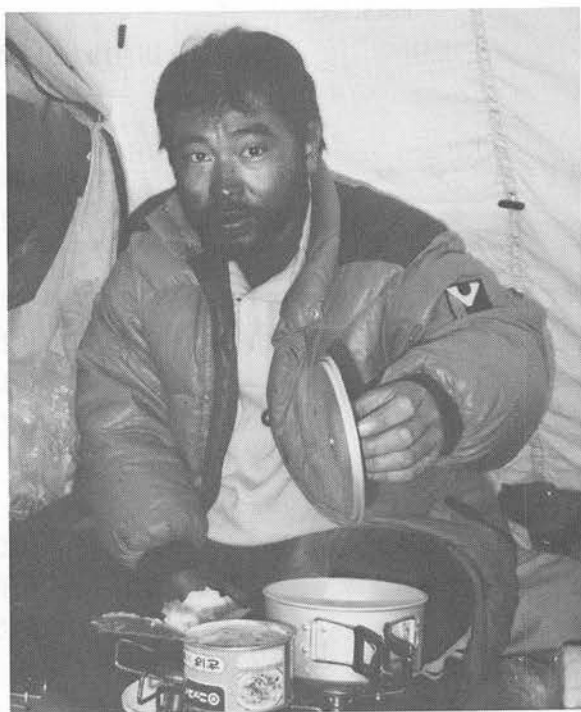




↑ (ブロード・ピーク8,016mとチョゴリザ7,754m)



(黒いピラミット付近) ↑



(テントの中で) ↑

日誌

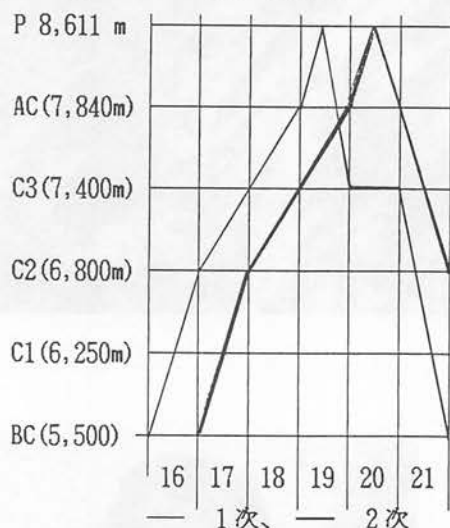
登山活動 第1回目アタック

7月13日 アタック計画

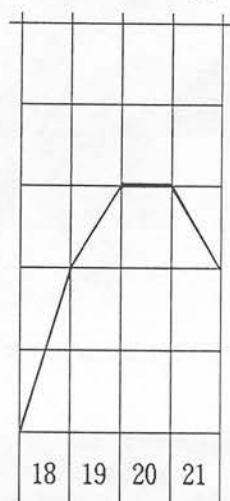
アタック隊 1次隊 (L) 山田(昇)・吉田・村上
 2次隊 (L) 飛田・(SL)熊田・塩田・細貝・坂上・岡田
 サポート隊 C 3 (L) 伊地知・遠藤・武部
 C 2 (L) 山田(修)・石田
 B C (L) 中岡・土谷

日程 7月16日～21日

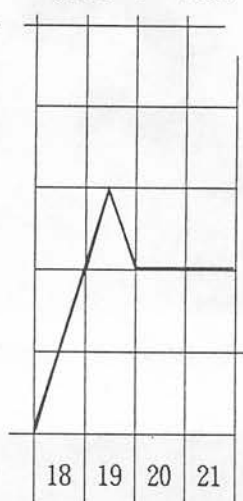
行動 (アタック隊)



(C3:サポート隊)



(C2:サポート隊)



7月16日 アタック開始

第1次アタック隊 BC→C2

(BC) 5:00 曇、仮BC方面に厚い雲、K2に笠雲

(C2) 17:10 雪が降っている

18:30 湿った雪も止み、青空が出て上部が望める

17日 第1次アタック隊 C2→C3

(BC) 夜半から雪、わずかの積雪

第2次アタック隊 BC→C2

(C2) 17:00 雪が降ったり、止んだり。中国側日ざし

(C3) 17:40 気温が下がって、風が出てきた

(C2) 21:00 風雪になる

フランス隊のドクターとC1で会う、

何も得られない様子

18日 第1次アタック隊 C3→AC

(C2) 昨夜からの強風雪

サポート隊 BC→C1

(C3) 風は強いが動けないことはない。

夕方よりBCを含む全キャンプに降雪

19日 風雪は止むことなく、積雪も激しくなる

ACのアタック隊は、AM1:30アタック断念を決定

第1次アタック隊メンバーをC2で待ち、風雪にまみれ全員BCへ下降する



(B C出発風景)

行動概要

16日 6時頃、山田(昇)・吉田・村上の3人はB Cを出発する。仮B C方向には厚い雲が現われている。下り坂なのか。3人はC 1に入らず雪面をそのまま直上、C 1～C 2間の約6,500m付近でルートに出ている。行動する3つの点が動いていた。17時の交信では雪、18時30分には雪も止み青空さえも顔を出しているとの事。

17日 夜半から雪が降りわずかに積っている。5時の定時交信の前に仮B Cの連絡将校から交信「モハメッド・アリがイスラマから手紙を運んでくれたので誰か取りに来るように」

第2次隊の6名がB Cを出発。C 1で再度単独で登ったフランス隊のドクターがザックをいっぱいにして下って来たのとすれ違う。ピークに立つ事は出来なかった様だし、行方不明の同隊隊員を見つける事も出来なかった様子だ。雪が降ったり止んだり、そんな中をC 2に入る。第1次隊は順調にC 3に移動する。

18日 昨夜の夜9時頃から吹き出した風は、今朝になって強くなっている。上空は青空が望められるが下は黒い雲。C 3と5時の定時交信では、A Cに入るのに時間はゆっくりの方が良い、したがって昼前に出発する、現在風は強いが行動出来ない程ではない、との事。(アタックはA Cに入った翌日の早朝というより2時頃と計画、衰退の関係からA Cにとどまる時間をより少なくするためにA Cには午後入り、仮眠の後出発)

C 2は次第に風が強くなるが8時頃出発。強風が荒狂っている。視界はほとんどなく、ブリザードが吹きつける。一時間程登った急な雪壁の下でC 3への移動を断念する。この荒天ではこれから約5時間の行動は無理だ、全員顔を氷づけにし全身雪まみれになってC 2に戻る。サポート隊はC 1にとどまるよう連絡。



(C2～C3間の登攀)

一方、10時頃にC3からACに向け第1次隊の3人が出発する。荷物は1人20kgという。次第に風・雪が強くなった中を14時30分にACに到着する。重荷の吉田はかなり遅れてAC到着。天気は次第に悪くなり16時より完全に吹雪となってくる。

ACに入った今日、明日は登るか下るかいずれかでこの高所での滞在はない。悪天の場合は、すみやかに下降し次のアタックにそなえる、その事はお互いに確認済みとなっている。ここ2日程、夕方から夜半にかけて好天になっているので可能性はあるという。いずれにせよBCでの交信態勢は整い、C2もC1もACの行動をうかがっている。8,000m峰に5回登っている山田(昇)だが、山田とてアタック前後は興奮しているのが言葉のはしはしに感じる。天気が回復してほしい。明日は再度C3に移動するのだがシュラフに入っても寝付く事が出来ない。

19日 吹雪はおさまらない。AM1時頃BCを呼ぶ声を傍受、まだ決定せずとの事。とにかく行動については各パーティー・リーダーにまかせてある。各メンバーの調子まして風等は各キャンプでかなり違っているのではなさである。が、C2の現在は降雪にテントが埋まろうとしている。吹雪の中を塩田が除雪をしてくれる。1時25分に山田(昇)から交信で、テントを出て稜線まで行くと風雪が強く、視界は20m位なのでアタック中止。了解の返事をし、明るくなったら下降するように伝える。

連絡将校も心配して、何度かコンタクトを取ってくる。C1も同じだった。緊張から解放され眠気もさめてしまい、塩田と3時頃までいろいろな事を話し合う。

5時の定時交信、C2は吹雪が続いている。全員BCに下降する旨、各キャンプに連絡する。8時30分頃だろうか、うなり声をあげる吹雪の中を全身雪と氷にまみれて3人が下降してきた。さらにC1からBCへと全員が下降した。登山活動を開始して以来初めての悪天候にぶつかってしまったようだ。

〔 休 憩 〕

C1～C2間



C2～C3間



C2～C3間



日誌

登山活動 第2回目アタック

7月21日 アタック計画

アタック隊・サポート隊は、第1回と同じ

行動 7月22日～27日

(第1回と異なる点) 第1次隊は、22日に第1次隊と同一行動で、C2入り
23日は、C2から一気にACに入る

7月22日 2回目アタック開始

第1次アタック隊 BC→C2

第2次アタック隊 BC→C2

20:00 仮BCの連絡将校とライトで確認

23日 第1次アタック隊 C2→C3→AC

第2次アタック隊 C2→C3

サポート隊(2隊) BC→C2

メール・ランナーが仮BCに到着

快晴、おだやかな天気

白い雲がボカン、ボカンと浮いている

5:00 C2は快晴、C3は一面のガス

11:00 C2～C3移動中、マッシュルーム

～ブロード・ピーク間に帯状の雲

中国側はシミ絵の様子

16:00 C3はチラホラ降っていた雪もやみ、
晴れる。ブロードもマッシュも望める

晴

12:00 頃より吹雪

14:00 頃よりガスもあがり晴てくる

以降は晴

24日 第1次アタック隊 AC→TOP→AC

第2次アタック隊 C3→AC

C3サポート隊 C2→C3

C2サポート隊 C2

第1次隊アタック成功

25日 第2次隊 AC→約8,000m→AC

(アタック隊、サポート隊の行動は、

別項の第2回目アタック・ドキュメ

ントの項参照)

26日 全員BCへ下降

0:00 ガス

1:30 満天の星空

5:00 吹雪の為、ACに戻る

以降、吹雪～降雪

5:00 AC快晴

下部はくもり

ACのすぐ下は雲海

8、611メートルへの軌跡

吉田憲司

上部プラトーまで下ってトレースを忠実に辿り始めたとき、テントを出てから17時間張り続けていた緊張の糸が緩んだ。太陽はすでに沈み、K2は暗くなりかけていた。

やっと終わった。あとはトレースに導かれて左右の脚を交互に出すだけだった。8,611mの頂きに立った喜びの感情が、このとき初めて湧きあがった。とにかく嬉しかった。思い切り、イッハッホー、と叫んで駆け出したいくらいだった。

その日、1985年7月24日、午前0時起床と予定していたが、息苦しさを感じて目を覚ましたのは15分前だった。酸素ボンベは空になっていた。マスクを外して深呼吸をした後、しばらくシュラフにもぐったままじっとしている。風の音は、ない。決行だ。予想していたほどの気持ちの高ぶりは感じられない。頂上までの標高差は800m。長丁場になりそうだ。登りで体力を使い果たしてしまわないように気をつけなければ・・・。無事に戻って来ることが第一だ。とにかく精一杯頑張ろう。

左隣の村上は、マスクを着けたまま、まるで酸素を吸っているかのようにすうーすうーと寝息をたてている。右隣の山田は、さすがに無酸素がこたえるのか、ときどきごそごそと動いている。あとから聞くと、寝入り鼻の2時間くらいはぐっすり眠り、その後はうとうととしていただけだったようだ。

午前0時。思い切って起き上がり、ガスコンロに火をつける。村上が小用を足しにテントを出る。

「快晴です。」「星がすごい！」

山田がトランシーバーで交信する。ベースキャンプも第3キャンプも起きていてくれる。朝食は雑炊に餅を入れる。食欲は、まあまあだ。8千メートルに近いんだから、こんなもんだろう。日本茶、紅茶、水分をタププリ補給する。テルモスに紅茶を詰めて各自が持つ。行動食は、チョコレート2枚、カロリーメイト2本、チューブ入り蜂蜜3本、それにスイス隊から貰った胡桃入りケーキ1つ。ビニール袋に小分けして、これも各自が持つ。

これからの行動は、すべて自分で判断し、各自が責任を持たなければならない。人に頼ることは許されないし、人を思いやる余裕もないのだ。トランシーバーに声を掛けてテントの外に出たのは2時25分だった。満天の星。見上げていると空に吸い込まれるような気分になる。ベースキャンプと第3キャンプのメンバーからの励ましに、やるぞ、と気合いがはいる。

山田は酸素を吸わないのでザックを持たない。小型カメラと行動食をポケットに入れて、トランシーバーとテルモスを腰にぶらさげる。しばらくはほぼ平坦なルートだからと、酸素を吸わずに行くことにする。酸素は、計算では毎分3リットル吸うと5時間ちょっとしか持たない。毎分2リットルなら7時間半だ。ここぞというときに思い切り吸って、休憩中や傾斜の緩いところでは節約しよう。

ヘッドランプの光に照らしだされた足跡を辿って、スピードをあげたりおとしたりして体調をみる。

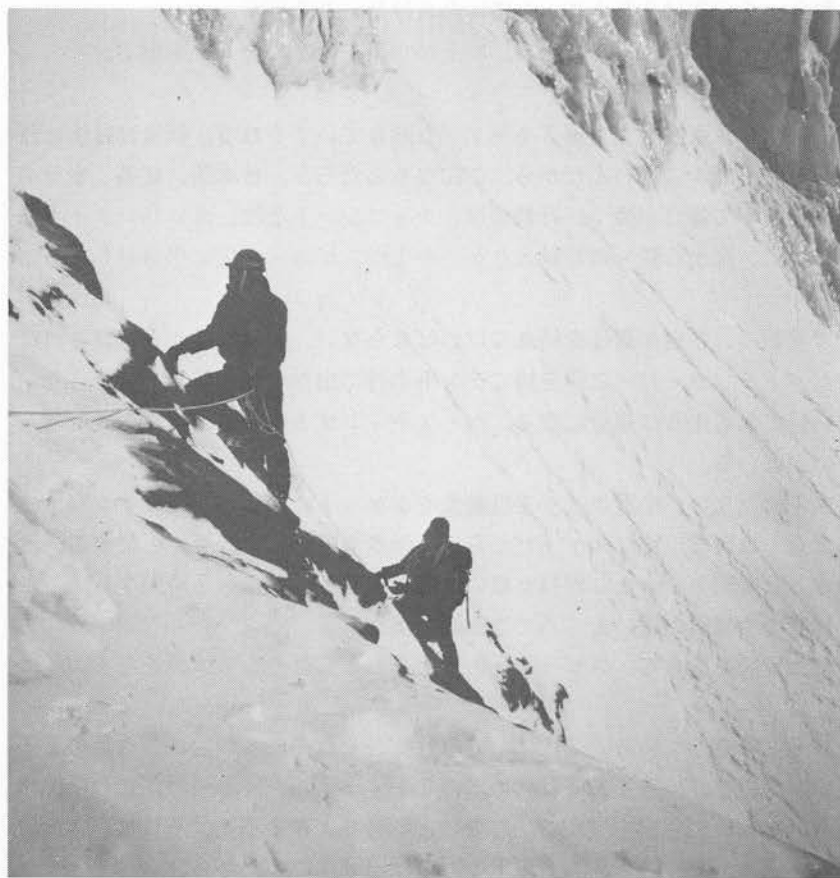
調子は、悪ない。

前に行く2つの明かりも、ぐんぐんと移動している。2人にしてみれば、それぞれ6つ目、3つ目の8千メートルを超える頂きなのだ。さすがである。一方こちらは初めての8千メートル。一步一步が新しい体験だ。未知の世界へ踏み込む感動に言い知れぬ充実感を覚える。ちらっと脳裏をよぎる不安。それは、自分自身に寄せる期待の証明である。リラックスしてゆこう。実力以上のものは出せないのだから。



↑

「ビンの首」直下
一歩一歩が
高みへの獲得



⇐「ビンの首」の
登攀

上部プラトーは徐々に傾斜を増す。前の2人と少々間隔があいたので酸素を吸うことにする。とりあえず1リットル。何だか身体が軽くなったような気がする。いけそうだ。

いつの間にか東の空が白む。右手東側は眼下に雲が広がり、左手西側には見わたす限りの山なみが、遙か闇の中に続いている。辺りの岩が、氷がひっそりと眠り続ける中、我々3人の雪を踏む音が無遠慮に静寂を破る。酸素マスクの内側から規則正しく耳に響く自身の呼吸の音は、これから苦しい試練を受けるのだという現実を忘れさせ、心地良いリズムとなって登行を助けてくれる。

急登になる手前で小休止をとる。ストックとヘッドランプをデポする。山田の紅茶を3人で飲み乾し、テルモスもデポする。

ルートは雪壁へと変わり、さらに岩壁の中のルンゼを伝って、上方に威圧的に聳え立つ大セラックにぶつかると。ルンゼは「びんの首」と呼ばれているところである。アイゼンの前爪とピッケルのピックを効かせて快適に登る。ガスが湧き始め、時折視界を閉ざされるが、陽はすでに昇り、風も無く暖かい。先頭の山田はすでにルンゼの登攀にはいっている。ルンゼには30m程のロープが残置されていた。しかし頼りにはならない。最初に登った山田が支点を確認、補強して下降に備えた。残置ロープの末端は大セラックの真下だった。氷にへばりついた山田と村上が待っていた。

「氷が堅くてアイゼンの爪が刺さんねえよ。」「先に行ける？」

山田のアイゼンは、何と、ローツェ、冬のエベレスト、マモストン・カンリ、冬のアンナプルナ南壁と活躍した歴戦のつわもの。耐久性は抜群だが、すでに爪はずいぶん短くなっている。

念のために用意してきた6mmロープの末端を腰に結び、アイスバイルを受け取って登り始める。ほんの4～5mのトラバースだが、岩を覆う氷は恐ろしく固い。慎重に登って、軟雪を被った岩棚に達した。バイルを打ち込んでロープを固定する。山田が後続してアイスクリュエーをねじ込んだ。バイルを回収して、山田がトランシーバーの交信をしている間に先行する。さらに岩棚状のところをトラバースすると、急に雪が深くなる。しばらく斜上気味に登った後、腰まで潜る雪の壁を直上する。やがて、雪はさらに深くなり、登りということもあって、首までのラッセルを強いられるようになる。3人で交替しながら、必死になって雪の中を泳ぐが、高度は一向に上がらない。

全身を使っただけのラッセル。こんなに深い雪をラッセルするのは何年振りだろう。初めての冬の剣岳、白山、白馬岳、・・・山を始めて間もない頃の、苦しかったラッセルの思い出が蘇ってくる。

「替わりましょう。」

村上から声がかかる。倒れ込むように横に移動してから後ろを振り返ると、何と、あんなに頑張ったつもりなのに、ほんの数mしか登っていない。山田、村上も苦しそうにしている。雪の状態がずっとこのままだったら、頂上まで届かないかも知れない。いや、もう少し登れば、あそこから上は風にたたかれていますはずだ。クラストしているに違いない。

初心に帰って、がむしゃら雪と格闘した。セラック帯の横を上りきると、予期したとおり、雪は突然その形態を変化させた。快調に高度を稼ぐ。焦るな、焦るな、そろそろ1977年の日山協隊の報告にあったクレバスが現れるころだ。ピッケルを差して探りながら、一步一步慎重に足を運ぶ。クレバスは、あった。右から回り込んで難なく越えた。

やがて、ガスに包まれ、雪が舞い始める。締まっていた雪面が、いつの間にか膝まで潜るようになっていた。視界は10m～20m位になった。傾斜は強くなる。弱ったな、頂上が見えない。あそこがそうだろうか。時間は、12時30分。充分頂上まで行けるだろう。しかし下降が心配だ。後続の2人は、見えないトランシーバーの交信でもしているのだろうか。

かすかな叫び声が聞こえた。

.....



K 2 登頂の山田副隊長

1978年秋	ダウラギリ I 峰
1981年春	カンチェンジュン
1982年秋	ダウラギリ I 峰
1983年秋	ローツェ
1983年冬	エベレスト
1985年夏	K 2
1985年秋	エベレスト
1985年冬	マナスル

山田 昇 8,000m峰への軌跡

「頂上はまだ見えません！」

「すぐそこです！」

大声で叫び返す。しかし何も聞こえない。はあはあという自分の荒い息づかいの音が無ければ、自分がどこにいるのか、何をしているのか、生きていくということすらわからなくなりそうだ。雪はしきりに降り続ける。風が強くないのが慰めだ。頂上は一向に現れない。相変わらず雪は膝まで潜る。

2人はどうしたのだろうか。締めたのだろうか。もし2人が引き返したら・・・、もしこのまま吹雪が続いたら・・・、テントまで1人で戻れるだろうか。ビバークか。いや、それはできない。ここで2人を待とうか。引き返そうか。いや、絶対に登る。時間はまだ1時だ。2時まで頑張って頂上へのめどがつかなかったら・・・、引き返すか。いや、そのとき考えよう。とにかく、ガスさえ晴れてくれたら・・・。いま、天気が晴れてくれたら、街での生活のどんな不自由も我慢しよう。晴れてくれ、頼む！。特にこれといった宗教の信仰を持たない自分が祈り、拜んだ対象は何だったのだろうか。神か、仏か、自然か。自分の力ではどうにもならないことを悟った切羽詰った気持ちで、その時あった。

もし一人だけ頂上に立ったら、誰がそれを証明してくれるんだろう。

何を馬鹿なことを考えているんだ。自分の満足のために登っているんだ。頂上に立ったことを人に誇るために登っているんじゃない。じゃあ、ここから引き返しても、自分が満足するのならそれで良いじゃないか。いま、ここで引き返したら、絶対に自分は満足しない。とにかく全力で登るんだ。

ふと見ると、大きなセラックの壁が立ち塞がっていた。キャンプから見ると頂上のすぐ下に牙の様に突き出ているやつだ、と思った。

頂上はすぐそこだ。

ルートは左に採るのが自然だったが、念のため右側も確認する。吹溜まりとなっていて時間がかかりそうだった。左へ回り込むことにする。

いや、しばらく2人を待とう。小用を足して、少し休んでいると気が落ち着いてきた。時計は、1時20分。いつの間にか雪が止んでいることに気が付いた。しかし相変わらず視界は閉ざされている。

「頂上はそこですよー。」

声を限りにさけんでみる。・・・返事はない。ゆっくり体を動かして、登行を再開する。セラックを回り込むと、雪は締まっていた。下降はバックステップで下ろう、と考えながら、慎重に登る。

3年間思いつめてきた頂が、そこにある。いま、この精神の高揚、緊張感は、何物にも代え難い感動だ。雪壁を登りつめると、台地状の雪面に出た。写真で見たことのあるような雪の緩斜面が続いている。

すでに頂上の一角だ、やった！

酸素マスクをはずして、ザックの上に座り込む。ボンベは、ほとんど空になっていた。

「おーい、頂上ですよー！」

2人の姿は見えない。ガスは依然として一帯を包んでいる。時間は、1時40分だった。とにかく写真を撮ろうと、ガスの中の頂上をカメラにおさめる。2人が登って来ないこともあるかと、腕を一杯に伸ばして自分の顔も撮る。15mほど先の頂上まで、先に一人で登ってしまおうか。いや、あの2人は絶対に来る。3人そろって頂上を踏もう。テルモスの紅茶を飲み、ザックに腰を下ろしてじっと待つ。しばらくすると、両脚に痺れを感じて、慌てて立ち上がった。思い出したように大声で叫びながら、行動食を食べていると、上空に青空が見え始めた。

「上は晴れてるぞー！」

やがて、頂上付近のガスも晴れ、徐々に視界が広がってゆく。目をこらして登って来たルートを見つめると、2つの赤い点が動いているのを認めた。

来た！

「おーい、ここが頂上ですよー！」

前が山田、後ろが村上。確かに登ってきている。よかった。最後のセラックの陰に2人が隠れたと思ったら、姿を見せたのは村上だけだった。

どうしたんだろう。まさか……村上は何事もなかった様子で登って来る。しばらくして山田も姿を現した。大便をしていたそうだ。思わず笑った。

2時20分、3人が頂上に着いたことを各キャンプに報告した。2人は降雪がひどくなったところで登行を中断し、下降の安全を考えて、一時は撤退を決意したそうだ。何度も引き返せ、と怒鳴ったという。複雑な気持ちだった。でも3人共登れて良かった。気を引き締めて、下りも頑張ろう。

いつの間にかすっかり晴れていた。コンコルディアへと続くゴドウィン・オースチン氷河の美しい縞模様が印象的だった。

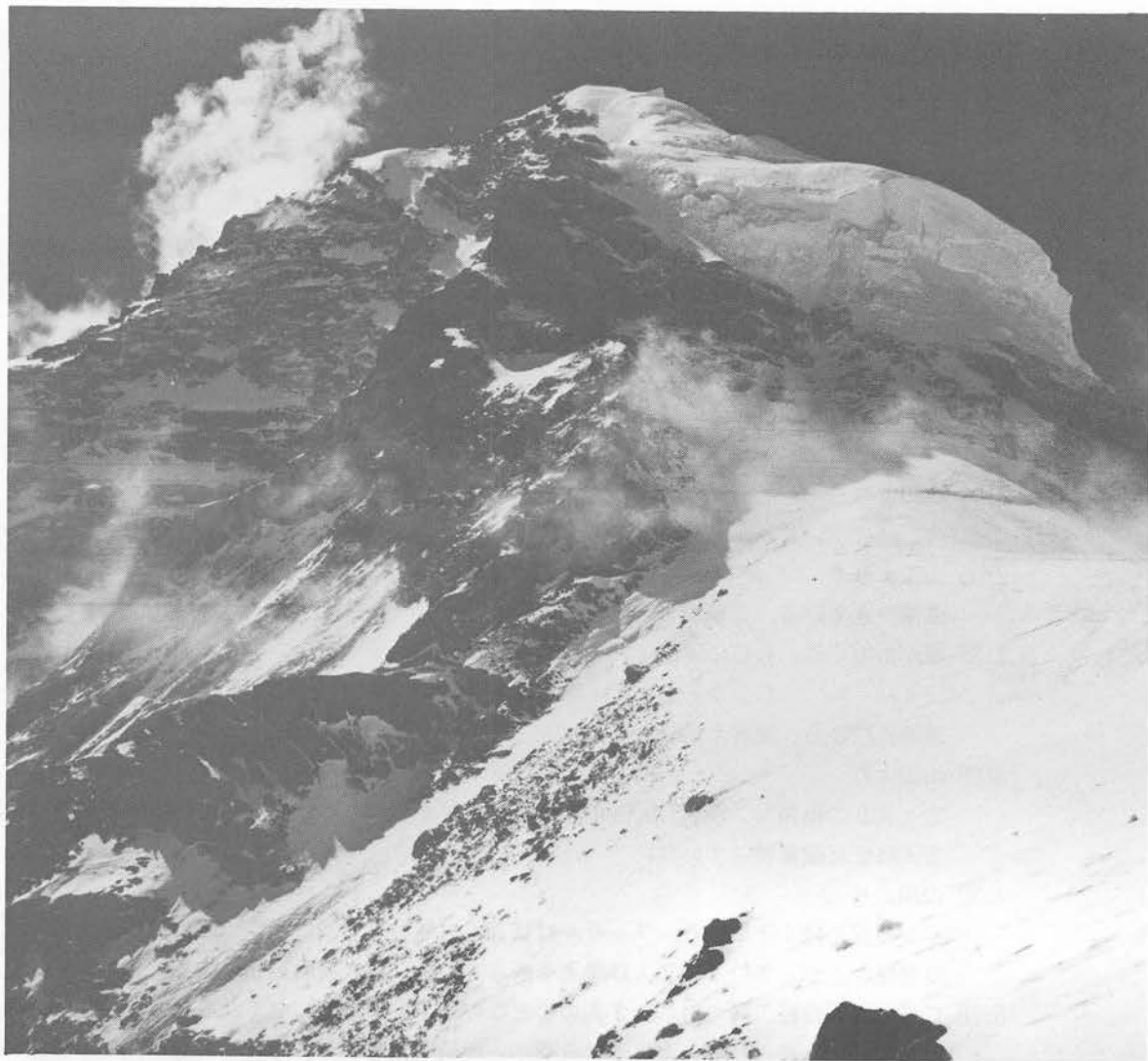


K2登頂の村上隊員と吉田登攀隊長（右）

第2回目アタック・ドキュメント

飛田和夫

- 7月23日 第1次アタック隊 (L) 山田 (昇) ・吉田・村上、AC (7,840m)に入る
第2次アタック隊 (L) 飛田・(SL) 熊田・塩田・細貝・坂上・岡田、C3 (7,400m)に入る
C3サポート隊 (L) 伊地知・武部、C1に入る
C2サポート隊 (L) 山田 (修) ・石田、C1に入る
BCサポート隊は、(L) 中岡・土谷・遠藤
アタック体制は、完全に整った
- 7月24日 0:00 山田より
今、起きた。これから食事と準備をする
2:05 山田より
準備できている。これから出発したい
2:30 風が出てくる。BCに連絡・・・BCも同じ
C1からも・・・風が出てきた
連絡将校から、何度か連絡が入る
3:08 山田より
2:30に出発し、現在7,900 m。風はあるがそれなりの準備をしているので問題ない
2人はまだ酸素吸っていない
4:30 山田より
ビンの首に続く下にいる。ラッセルはほとんど無い。上空は青空で風は無し、山頂付近は雪煙が上がっている。2人は酸素を吸っている。3人共順調。
5:50 C3は天気良好、風も無し。3人のことなのでピークを踏んでくれるだろう。我々2次隊も今日はAC入りし、実際には今夜から行動開始をする。帰路AC着が夜にならないよう今夜のうちに出発することも考えている。
7:00 C2から、C3サポート隊が出発
7:25 山田より
ビンの首を抜けトラバースに入る所。高度計で8,220 m。ラッセル無し、が、岩と氷のミックスで傾斜がある。ビンの首を抜ける所に1本フィックスがある。3人共調子良い
7:30 天気は良い。白い雲がポカン・ポカンと浮いている。中国側は春ガスマがかかったように、かすんで望める
10:00 第2次アタック隊、ACに向けて出発
山田より
8,400 m付近。胸までのラッセル
C3から上部プラトー付近はいつものように雲がたなびいている。その上は無風快晴の様子だ
12:00 上部プラトーに上がる氷壁帯付近頃より、ガスがたちこめ、視界を奪われ、呼吸もままならない程の、激しい吹雪にみまわれる



K 2 山頂ドーム

吹雪の中、A Cに到着をし、さらにテント1張設営する。が、第一次アタック隊の動向が掴めないの
で、何もするきになれずに、キャンプ・サイトの少し上部から、K 2が望めるであろう方向に立ちつく
していた。3人とも無事にもどってきてくれ、と願いながら凝視していた。

ついには、ガスが流れ出し、下部が、中間部が、上部が、そしてK 2の全容が現れた。K 2の山頂ド
ームが、3年余、頭の中で対峙してきたK 2の山頂ドームを自分の眼で見ることができた。胸に抱いて
いたごとく、威風堂々とし、あまりの素晴らしさに、我を忘れる様であった。そして、喜びは膨れあが
った。トランシーバーから山田の声がとどいた、勿論アタック成功の声だった。

13:30 ACに到着。ガスにより視界は殆どなし。BCに連絡を取ると第1次隊は13時の交信で吹雪が激しく、どうすべきか、と連絡が入ったとの事。その後の交信は無し
ACにもう一張のテントを設営する。が、第1次隊の行動はどうなっているのか、キャンプサイトのすぐ上に登るとK2のドームが望めるのだが、ガスのなかだ。何もする気になれずじっと立ちつくしている。ピークに立たなくともいい、とにかく無事に3人共戻って来てほしい。ただ、それだけだった

14:10 ガスが去り、雲が切だし、山頂部が、中間部が、下部が交互に姿を表し、時々全容を表わす。写真で見尽くしている風景だが、自分の眼で初めて山頂ドームを望んだ。期待通りの山容だった。高く、鋭く、威風堂々としている。眼をこらして、仲間の姿を、トレースを捜す

14:20 山田より
ピークに立った
その後の交信は、言葉にならなかった。泣き声と歓喜だった

薄暗くなり、ビンの首の下部に3つの点が見える。動いている

19:30 山田AC到着

20:00 吉田AC到着

20:10 村上AC到着

3人共、C3までの予定だが無理。ACに寝かせる

C3サポート隊の伊地知が不調、様子みるとの事

第2次アタック隊、出発まで時間がないが、とにかく横になろう

ACに戻って来た3人は、登った満足感と無事に戻った安堵感、そして疲労からだろう、ぐっすり寝ている。吉田・村上は酸素を吸い、山田は無酸素を続けている

7月24日の行動

第1次隊

AC→TOP→AC

第2次隊

C3→AC

C3サポート(伊地知) 隊

C2→C3

C2サポート(山田(修))隊

7月25日 23:45 起床

0:45 天気が悪いのか、ガスがたちこめている

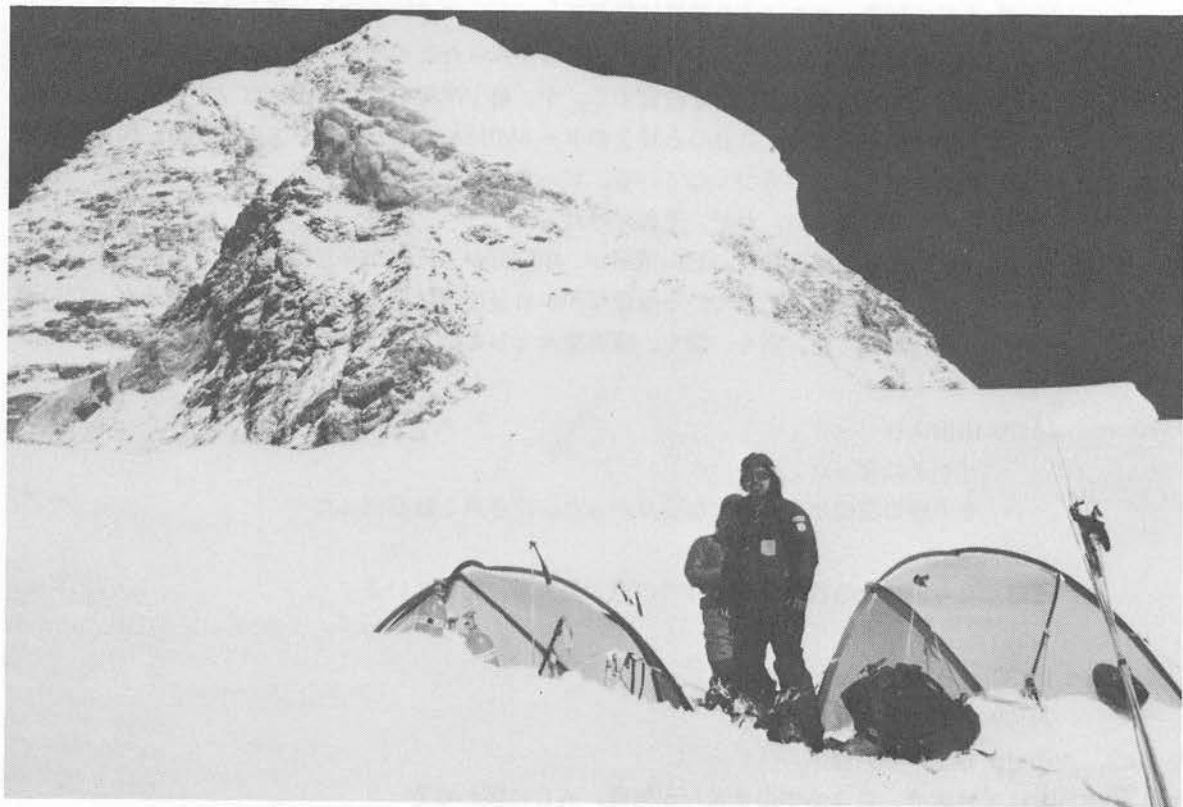
1:30 満天の星

2:05 第2次アタック隊6名が出発

テントの中は、第1次の3人が寝ている。ゆっくり休んでいてくれ

行動用の酸素は、より高度から吸おうということで、ボンベと一緒にマスク等もザックの中

歩くほどに風が出てくる、星の輝きも次第に無くなり、やがて視界が悪くなってきた。



↑ AC (7,840m) と K2 山頂ドーム



⇐ 高所テント

酸素を吸って睡眠

C3 (7,840m)

初めて泊まる夜のみ吸う

AC (7,840m)

泊まる毎に吸う

5:00 風と共に雪も降ってくる。そして吹雪になってくる。吹雪は歩行も呼吸も困難にさせる。もう少し登ってみようという意志が一度はまかったが、完全に視界は無くなり、アタックを断念しACに向けて下降する。トレースは無く、吹きつける強風は何度も我々の行動を止める

5:00 ACに戻る。どうしてこんなに疲れたのかと思うほど6名はグッタリ

5:30 テントに入り、酸素を吸って仮眠

8:00 寒く目を覚ます

C2、山田（修）より

頭痛が激しい、BCに下降したい もう暫く待ってもら

9:30 C3と交信

昨夜の件もあり、朝から何度か連絡をしていたが、やっと伊地知と交信できる

ACにいる第2次隊もそうだが、まず第1次隊の3名を早く下降させたいが、吉田・村上是体力消耗と雪眼により行動不能。無酸素の山田（昇）は行動可能なので一刻も早く。更に、C3の伊地知とC2の山田（修）も早く下降させねばならない

山田（昇）とドクターの塩田、C3で伊地知と合流して下降

C2の山田（修）と石田、共に下降

C3の武部が1人になるので、ACから坂上がC3へ

飛田・細貝・熊田・岡田はACにて吉田・村上のサポート

ACの食糧不足と燃料の不足の為、熊田・岡田がC3途中まで下り、食糧等を持った武部が途中まで登る

11:00 山田（昇）・塩田・坂上が下降

11:20 武部がC3出発

11:40 3人と合流

12:30 熊田・岡田出発

2人が武部と合流し、再度ACを目指すが岡田が不調になりC3に降ろす。その後熊田のみACに向かう

アタック途中からずっと吹雪。このテント・サイトは直接吹雪を受けないが、吹き溜まり。いずれにせよ朝から降り続き視界はほとんど無し。そんな中で、各パーティーはトランシーバーからの指示で、目まぐるしく行動している

15:00 山田（修）隊は14時に下降しているとのこと。BCより

15:27 C3の武部より

岡田は酸素を吸って寝ている

15:30 C2の塩田より

C2に到着

伊地知が呼吸苦になっている。タンの量が多い。酸素が必要だがC2にはボンベのみでレギュレーター・マスク等が必要。ミドリ安全のO2バックを吸わせる



↑ 吹雪で8,000mラインから引き返しACに戻る



⇐ 7月26日
BCへ下降する
(AC直下の冰雪壁帯へ入る)

C 3 の坂上にマスク等を下げてもらう事にする

16:00 坂上がC 2 に向け下降

16:05 C 2 の塩田より

酸素を吸わせ安静にすれば大丈夫だろう。今夜も吸わせ、明朝早く下降させる

17:55 連絡将校と定時交信

AC・C 2・BCの各隊員と話会い

18:00 BCからの中継で、坂上がC 2 に入る

18:05 C 3 の武部より

岡田は酸素を吸って寝ている。回復の様子

いろいろなことがあった一日で、あとは熊田が帰って来ればもう安心。だが決定的な連絡がトランシーバーから流れた

18:25 C 2 の塩田より

酸素ボンベ2本あるが、1本は空。もう1本は90気圧との事。

そんな、ばかな……。返す言葉がなかった

とにかく、O2パックと酸素ボンベを併用すること

18:40 熊田がACに戻る

長い長い一日が終わろうとしている。種々考えてもどうしようも無い。酸素を吸って3日振りにゆっくり寝ることにする

7月25日の行動

アタック隊

第1次	山田 (昇)	AC→C 2
"	吉田・村上	AC
第2次	塩田	AC→断念→AC→C 2
"	坂上	AC→断念→C 2
"	飛田・細貝	AC→断念→AC
"	熊田	AC→断念→AC→C 3→AC
"	岡田	AC→断念→AC→C 3

サポート隊

C 3	伊地知	C 3→C 2
C 2	山田 (修)・石田	C 2→BC

7月26日 5:00 テントに太陽の日差し、BC・曇

6:30 やっとC 2 と連絡が取れ、何とかのりきった、との事

交信中に、自分でもはっきりわかった言語障害。急拠酸素を吸うと正常に戻る

8:00 AC下降開始、テント・サイトのすぐ下は雲の中

17:00 雪の中、全員BCに下降した

日誌

登山活動 第3回目アタック

7月27日 休養

28日 休養

29日 休養 メール・ランナー出発、伊地知・遠藤、仮BCへ下降

30日 休養 **アタック計画**

アタック隊員 (L) 飛田 (SL) 熊田 塩田・細貝・坂上・岡田

サポート隊員 (L) 山田(昇)・吉田・村上

アタック日程 7月31日～8月5日

荒天による待機 C3にて、8月2日～4日の3日間位

アタック日 8月3日～5日の間

C3にて天気の判断 翌日が好天と判断した場合、昼頃ACに移動
ACにて仮眠後、アタック開始

サポート隊日程 8月2日 BC→C2

3日 C2→AC

夜、ポーランド隊(2名)が来る

アタック開始

7月31日 BC→C2 C1で坂上が不調の為、BCへ下降

C1荷下げ隊 4名がC1の往復

ポーランド隊 C1へ

8月 1日 C2停滞 (強風)

ポーランド隊 C2へ

8月 2日 C2→C3 朝、熊田不調の為、BCへ下降

ポーランド隊 C3へ

3日 C3停滞 (吹雪)

ポーランド隊 下降

4日 C3停滞 (吹雪)

5日 C3停滞 (吹雪)

サポート隊 BC→C2

6日 C3→BC

サポート隊 C2→BC

C2荷下げ隊 C1往復



(BCでの休養)

登山活動

メール・ランナーが最後のスカルド往復に出発するので、隊の方も帰路キャラバンのために日程を決定させポーター依頼をアスコレの村長さん宛に出さなければならない。

登山隊の日程、隊員の行動力、荷上げ、BCでの食糧等々を考えると第3回目が最後のアタックとなりそうだ。そして、なによりも、悲劇と歓喜のドラマが生まれやすいアタックの指示を出す者の、強烈なまでの心の交錯も限度かもしれない。天気も問題だ。

第1次のアタック成功の連絡・事務所等への連絡と次のアタックに関して様々なことを決定せねばならないのだが、今までの休養日の自分自身より完全に思考力はもちろんその気さえも仲々おきてこない。7,900mラインでの2泊と8,000mラインまでの行動がそうさせているのだろう。

しかし、K2に登ろうとする意志がそれを打ち負かせてくれた。そして最後のアタックに6名とC1の荷下げのために4名の計10名が7月31日に出発した。天気の方も“ウラのウラ”をかくつもりで1日遅くして天気の崩れを狙って出た。6名のメンバーは前回同様だが、今回は3～5日にかけてアタックとする。荒天の場合はC3で滞在とし、好天をみはからってACに入り仮眠後アタックする計画だ。

登頂可能な6名であったが、高所登山がゆえに、生体には苛酷なまでに厳しく、自己管理はもとより、すべての面で総合的な力量が必要になってくる。C1で坂上が、そしてC2に入り強風のため1日滞在した翌日には熊田が、自らの命を自らで守るためにBCに下降せざるを得なかった。計画段階での情熱が大きければ大きいほど、心の葛藤に苦しんだことであつたろう。2名とも目を真赤にして下っていった。

8月2日にC3に入った。天気は完全に悪くなっている。3日も4日も翌日が好天になる可能性がないので、なんとか酸素なしで滞在できるC3にとどまっている。ACにはいった場合は酸素を吸うので、又、



(C3のキャンプ・サイト。7月9日撮影)

ACの高度は悪天を待つために滞在出来る高度ではない。

悪天、吹雪は一向におさまらない。テントの設営場所はわずかな平坦地でその上の緩斜帯から徐々に傾斜を増し、左上して急な冰雪壁へと形成されているのでC3は大きな雪崩に埋まることはないだろうが雪は少しずつ流れていてテントはすぐに沈し、3m位離して張ってあるテント間はすでに雪の斜面と化している。一時はC2まで退避も考えたが地形と今までの記録から大きな雪崩はないと自分達を慰め、好天の到来を待つ。

8月5日の朝、仮BC・BCとの交信でも近日中の好天到来は薄いという。吹雪のC3でアタック隊の4名、飛田・塩田・細貝・岡田で話し合いアタック断念を飛田が下す。とにかく、自分が8,611mのK2のピークに立ちたいがために計画を推進し隊長をやることになったのは、すべてK2の素晴らしいであろうピークに憑れてであったのだが。

ACの回収と万が一という気持ちを含めて吹雪の中を出るが、あらためて降雪の多量に驚く、腰から胸まである。わずかの行動で止める。行動をして行けば絶対に雪崩てくるだろう。C3に戻り、BC～C2間にサポートで行動している山田(昇)に連絡をとるが交信出来たのは15時頃となる、相談の結果、明日山田パーティーがC3に上がって来た時点で再度行動出来るかどうか決定する事になった。C3の4名もC3滞りが4泊目になる。そろそろ下降せねばならない。

毎日、夕方になると天気は小康状態になるが気休めにすぎない。6日も吹雪で明ける。仮BCもBCもそしてC2も雪。8月に入って全域で悪天になっている様子だ。

長居は無用なので塩田・岡田に先に下降してもらうことにする。C2を出発するという交信を山田(昇)から受けた後、約1時間してから再度交信が入る。とにかく雪の降りかたがすごい、上部はもっとすごいだろう、C3から上部の行動は無理だと思ふとの内容だ。山田(昇)・村上の2名はC2に戻る。AC撤収の



(C3テント内)

ためにC3のテント一張残すことも話しあったが最悪のことも考え、すべて撤収する。吹雪の中で氷付けになったテントを撤収し視界が利かず雪崩の危険を感じ、ロープを握り出しながら、下部プラトーを細貝がトップで下降して行く。

現状を乗り切るには、吹雪の中をK2に背を向ける以外になすすべはなかった。

吹き荒れるC2で3名と合流し、ヘトヘトになってBCに辿り着いた。身も心も憔悴の態であった。塩田と握手を交わすと目頭が熱くなってきた。C3で一緒に粘った細貝も岡田も手を差しのべてきた。

3年余の星霜を重ねたK2だったが、K2登山は終わった。

登山活動を終える

悪天は、8日の午前中まで続いた。積雪、雪の状態と、なによりも現在行動出来るメンバーがいそうもない。非常に残念だがACの回収をあきらめなければならない。断念する。いくら高価な物が埋まってしまうおうとも命に変られない事は、疲れ切った頭でも考えられた。



↑ C 3 ~ C 2 間



↑ C 3 を撤収して下降にはいる

↓ C 3 を撤収して吹雪の中、B C に向けて下降する



3 回目アタックの顛末

塩田純一

一度のみならず、二度まで悪天に阻まれた我々2次アタック隊は、一体何がこうもついていない原因なのかと考え、誰か日頃のおこないの悪い者が居るのではないかとお互いに疑い合ったりしても「ハイ、私です」などと申し出るものもなく結局誰も悪くない（あるいは皆悪かった）との結論であり、隊長は、入山以来のキャンプ別天気一覧を作り綿密なる気象分析をし、天気のを捉えるべく検討を行った。その結果、悪天の後に強風の晴天が2日間くらい続いてその後に絶好のアタック日和がやってくると予想した。

しばし休養の後7月31日BCからC2へ向かった。疲労はBCでの休養でもとりきれず、今回が肉体的にも時間的にも最後のアタックになることは皆充分承知していた。C1に至る雪壁は、新雪も無く雪崩の心配もないことからダイレクトルートを取り、アイゼンを効かせ直上したが1,000 m位上の岩壁から次々と落石があり鉄砲玉のように耳元をかすめてゆき、C1に着いた時はホット胸をなでおろしたものだ。

C1で坂上君が不調を訴え、残念ながら一人下山することになった。言葉すくなく我々と手を握りあった彼の目には一筋の涙がみられ、食糧係として誰よりも活躍してきた彼の心の無念さをのぞかせていた。その夜C2では徐々に風が強まり、翌日も朝から風が強く、弱まる気配がない為、C2にもう1日滞在することとした。そして今度は熊田君が調子を崩し下山することになりアタック・メンバーも一人減り二人減りしてとうとう4人となってしまった。

翌日C3に上がると風はますます強く、そのうち雪も激しさを増しテントを一日に何回も掘りださねばならない程であった。アタックキャンプへ上がってしまうと消耗が激しい為、C3で天候待ちの停滞が続けたがいっこうに好天は訪れず、ほとんど酸素を使えないまま日に日に体は衰え一日じゅうウトウトと半分眠っていることが多かった。4～5人用テント2張に2人ずつであったため、そう閉じ込められた気分はないものの7,400 mのStayは真綿で首をしめられるようなじわじわとせまる命をけずるようなケダルサがあり、美しい魔しょうに知らぬまに生気をぬきとられた旅人の様であった。

そればかりかBCや、仮BCまで雪が降り始め万事休す、アタックどころではなくなり、なんとかアタックキャンプだけでも撤収しようとC3をでてみたものの雪は胸下くらいまでありとてもラッセルなど続かず、何といっても雪崩の危険が大きい為アタックキャンプを放棄してBCへ下ることとした。C3から下り始めたものの下部プラトーも深い雪で、フィックスロープは完全に埋まり、かつてアメリカ隊がプラトー下端からザイルに繋がれたまま大量転落したことが想いおこされた。降りしきる雪の中でC3を撤収し、細貝君をトップに、雪崩に対応するため4人が間隔をあけながら下った。C2でサポートの山田隊と合流し、吹雪の中C2を撤収しBCへと下った。

BCに近づくころはもうあたりはうす暗く綿の様に疲れきった体にムチ打ちながらフィクス終了点からもさらにステップを切りながら一步一步下っていると直ぐ前にやはり疲れきった隊長の姿があり、振り返り振り返り下って行く後ろ姿に頂上に立つために全てをかけてきて果たせなかった悔しさが同われ、声をかけることをためらい、なんと言って良いやら思案しているうちにBCに着いてしまった。とうとう頂上を踏むことなく終わってしまったという悔しさと、やっと終わったという安堵感が交錯し、長かった登山が走馬灯のように思いおこされた。



⇐雪渓からの水量も増え、氷河のセラックスの崩壊の音も頻繁になり、そして、BCにも花が咲きだした。

カラコルムの短い短い夏の訪れなのだろう。

↓ BCから仮BCに下降。入山時と氷河の様子がだいぶ変わっている



暗闇の8, 000メートル

熊田雅史

K2南東稜取付、5,500mにBC設営後、約1ヶ月順調にルートを伸ばしてきた我々は、7,840mのC4を最終キャンプとし、アタックの日を迎えた。7月17日アタックの為上部キャンプへ移動を開始するが悪天候の為、1次アタック隊はAC、2次隊は7,000m付近まで達して退却を余儀なくされる。2日間の休養後、再度アタックを試みるべく上部への移動が開始された。

登攀開始以来1ヶ月が過ぎ、心理的にもそろそろ圧迫感を感じ始めてきており今を逃がせば体のコンディションも維持するのは難しくなる。さらに8月になればカラコルムはしだいに冬に向かい、天気は悪くなってくるはずだ。仲々掴めない天気の周期にいらだち、空を眺め雲の行方をうかがいながらC2へと足を進めて行った。

明けて23日、ここから1次隊の3名は一気にACに入り、2次隊の6名はC3に入った。1日ずれてのアタックの為である。翌日、1次隊がアタックを試みている最中、我々は3本の酸素ボンベ・テント・食糧等の荷と共にACへ移動する。テントに入って間もなくすると、2時20分頂上に立ったとの交信が入る。トランシーバーを通じて成功した3名の荒い息づかいと声からアタックの激しさと喜びが伝わってくる。こちらからトランシーバーをにぎりしめて応える飛田隊長の喜び様もひとしおであった。この3年間の並大抵でない隊長の苦労を思うと成功の喜びとは別に「よかった」という思いで胸は一杯になった。しかし、まだ終わってはいない。あの絶悪なトラバースと「ビンの首」の雪壁を、すでに酸素は切れ疲労し切った体で下降しなければならないのだ。そして明日は我々の番だ。

急斜面を下降する3名の姿を確認し、テントに入り酸素を吸ってシュラフに入るが興奮と緊張で仲々眠れない。日暮れ近くになり無酸素で登頂した山田副隊長がしっかりした足どりで到着する。しばらくして吉田さん、村上さんも到着する。すぐテントに収容して酸素を吸ってもらう。雑然としたテントの中を少し整理して出発まで横になる。23時になり息を切らせながら出発準備を始める。5人いるテントの中では仲々はかどらない。かんたんな食事を済ませ自分の酸素をセットするが、中身が220気圧しかなく、これでは6～7時間しかもたない。途中でチェックできなかったのが悔やまれた。

2時過ぎ、先に出た2名の後を追うようにテントを飛び出す。ヘッドランプでラッセルしている岡田君に迫り着きラッセルを代わるが1次隊のトレースはすでに風に消されており膝下までもぐる。だだっ広い真暗闇の斜面を登っていると、セラックスから落ちたと思われる小さなブロックが散乱しているのがライトの光の中に現れ「ビンの首」の近いことを知る。後のメンバーも迫り着くが風は強まり、天候は悪化の兆しを見せて来た。ここまでは誰も背中の酸素には手をつけてはいない。「ビンの首」に入ってから使うつもりでいたのである。これ以上登れば引き返すことは難しく、このまま突っ込むべきか手つかずの酸素と共に再度出直すべきなのか、そしてそれは可能なのか。黙然として立ちつくしていると風がどんどん体温を奪ってゆく。「降りよう」、隊長の断が下され、フラつきながら埋ったトレースを捜し、夜が明けころACにたどり着く。その後、不調者を出しながらも全員BCに集結した。

そして、もう一度試みることになった。「もう登ることはあるまい」と思いながら通い慣れたC2へのルートを辿って行く。登行はいつもよりきつかった。2日前に食べ過ぎて吐いてしまい1日中酸素を吸うへまをやり、その疲労がまだ取れていないのだろう。鈍いスピードに我身を恨み必死で攀る。C2では天気待ちの為1日停滞する。翌日、朝起きると疲労が抜けず明らかに体調が下降線なのを悟る。冷静に判断する能力はまだ残っていた様だ。上へ行く4名と再開を約束し1人下り始める。

K2は終わった。しかし、忘れはしない、暗闇の向こうには登るべき頂きがあったことを。

日誌 (BC～仮BC～スカルド)

8月 8日 BC～仮BC

昼頃より天気回復BCへ荷下げ
仮BCにてポーランド隊よりランチ
パーティに招待
関西カラコルム登山隊も同席
熊田、一層不調になる
ポーターが上がって来る
夜、久し振りに満天の星が輝く

8月 9日 仮BC～BC～仮BC

BCへ荷下げ
荷下げにポーター20名雇用
夕食会
ポーランド隊招待

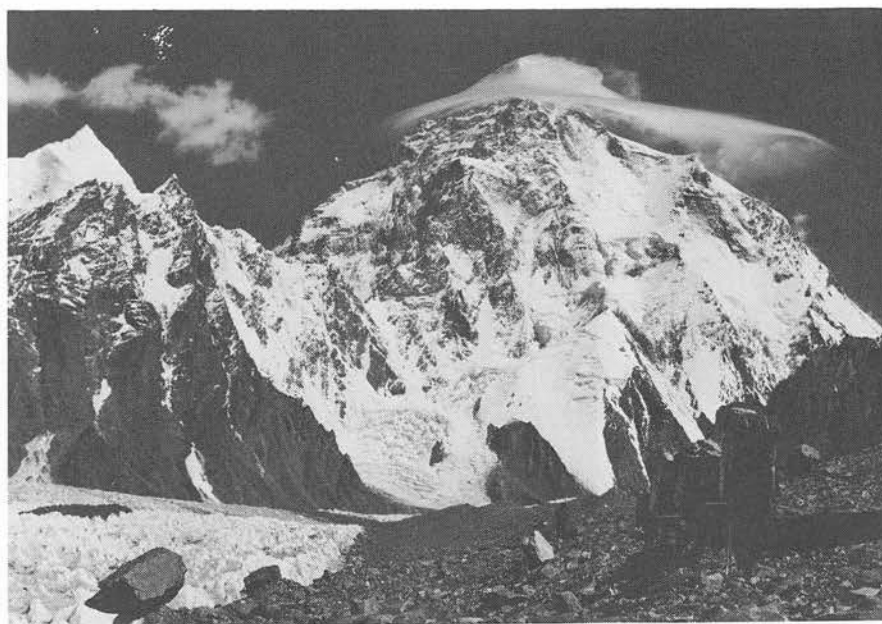
8月10日 BC→ゴレ

コンコルディアより熊田歩行不能になる。他トレッキング隊のポーターを雇用し背負わせて
下降、途中で夜になりルートが不明で行動出来なくなりゴレから隊員を救援依頼

8月11日 ウルドカスまで様子を見ることにして行動するが、すぐに行動不能。ヘリコプターを要請

熊田に同行 飛田・塩田・細貝 ゴレより30分程下降した地点に停滞(ヘリ待つ)
先行している石田・キッチンに露営用具一式と食糧を持参し上がってもらう
本 隊 中岡・山田副隊長以下はウルドカスへ
連絡将校・コックはヘリコプターの連絡のためパイユへ

	先 行 隊	本 隊	後 発 隊
8月12日		ウルドカス→パイユ リリゴでメール・ランナーと 会う	昨日の地点で停滞 (ヘリコプター飛来せず) 横浜蝸牛山岳隊(GI)と会う
8月13日	吉田がスカルドに向け 急行する	パイユ→ジョラ 先行した連絡将校によると、 連絡できなかった旨 中岡、中継としてパイユ停滞 村上、連絡のためウルドカス へ戻る	午前中にメール・ランナーが着く ヘリの飛来は難かしい旨、吉田 より連絡 下山してきたポーターを雇用して、 熊田を下げる事にする ウルドカスに着くとヘリが飛来 熊田・塩田ドクターが乗る
8月14日		ジョラ→チョンゴ 本隊、山田(昇)・伊地知・ 山田(修)・遠藤・土 谷・武部・坂上・岡田	ウルドカス→バルデュマンの手前 メール・ランナーを本隊連絡のた め下降させる パイユで中岡と合流
8月15日	スカルド	チョンゴ→ビアーゴ	バルデュマン→アスコーレ
8月16日		ビアーゴ→ダッソー→スカルド	アスコーレ→チャボの対岸
8月17日			チャボの対岸→ダッソー
8月18日			ダッソー→スカルド (病院へ)
8月19日	チャーター・バスでスカルド出発	(熊田病院、塩田・細貝付き添い)	



⇐ 帰路キャラバン スタート

アスコレの村長さんに依頼したポーター45名は、8日に到着。9日何人かはBCへ往復し、今日はいよいよ文明世界に向けて出発だ。

帰路は、日程を短縮して歩くので毎日がハードになりそうだ

キャラバン

武部秀夫

8月10日 晴 (仮BC8:00→ゴレ19:00)

長かった登攀期間も終わり、いよいよ今日から約60日ぶりに帰路キャラバンの開始である。前日装備関係の準備がおくれ5時に起床したが、結局8時出発となる。ポーター46人でK2BCともおさらばである。本隊は、すぐに先発していた中岡副隊長パーティにおいつきながら、快晴の中コンコルディアへ進む。ふと後ろをふりかえるとK2頂稜部には大きな笠雲がかかっている。コンコルディアにて昼食をとる。往路はガスの中で何も見えなかったが、右手バルトロカンリ、正面にGIV、そして左手にはブロード・ピーク、K2とすばらしい名峰に囲まれての昼食は最高。

ここよりバルトロ氷河の中央部をどんどん下っていくが、アップダウン激しく時間がかかる。クレパスをひゃっとして渡ったり、アフタヌーン・フラットの渡渉があったりで、ゴレには陽の沈む寸刻に着く。熊田隊員の様子はコンコルディアから悪くなり、そのサポートにまわった隊長パーティはなかなか着かず、山田副隊長、キャプテンらのサポート隊を出して迎えに行く。22時頃無事ゴレに到着。ほんとうに長い一日だった。

8月11日 晴 (ゴレ7:35→ウルドカス15:00)

今日は通常の1ボロである。バルトロ氷河上のモレーンを進む。ウルドカスまで単調と思いきやアップ・ダウンの激しいことはなほだしい。熊田隊員の容体が芳しくなく、ヘリコプターで降ろす旨隊長命令がでる。そのためキャプテンにヘリコプター要請のためパイユまで行ってもらい、コックのパキールも同行。ゴレで



↑ タンカで搬出される熊田隊員
ゴレから30分程下った地点



↑ ヘリコプターに救出してもらう。
ウルドカスにて

の食糧要請で、石田隊員とキッチンのフセインが、又、バルトロ氷河を登ることになる。

隊は分散し、本隊は山田副隊長以下11名となる。かなたに見えるウルドカスはまさに緑の楽園である。それにしても、マッシュブルムはえらくいばって今日もつたっていたのが印象的。夕刻、クルティカ・パーティーもウルドカスに着いた。

8月12日 晴のち曇 (ウルドカス6:00→パイユ15:00)

今日は2ポロを1日で行く。リリゴまでのところで、往路は凍っていた支流がどうどうと流れていたため1ヶ所渡渉があった。前方にウリ・ビアホーの岩塔を見ながらの余裕のある渡渉である。しかか、数名はびびっていた。11時にリリゴに到着、バルトロ氷河を登ってきたメール・ランナーに会う。遠征中最後と思われる手紙を受け取る。リリゴから先、バルトロ氷河を横断し、曇空で今にも降りだそうなかパイユに到着。イギリスやら数ヶ国のトレッキング・パーティーがきていた。

夜、山田副隊長よりヘリコプター要請がうまくいかなかった報告があって、吉田登攀隊長がとにかく早くスカルドまで先行すること、村上隊員がトランシーバー中継のため再びウルドカスに戻ること、中岡副隊長が連絡中継のためパイユに残ることを決定。

8月13日 晴 (パイユ6:00→ジョラ15:00)

8名になった本隊で出発。氷河をはなれるともう完全に周りは砂漠。ブラルド河畔にでるとすこしは涼しく感じるがやはり暑い。往路はデュモルド川を渡渉してきた訳だが2ヶ月たてば水量がまるで違う。結局すこし上流のジョラの吊橋を渡る。吊橋といっても、ワイヤーが1本だけかかってあってそのワイヤーに籠がとりつけてあるだけのもの、それでもしっかりしている。なんと兩岸にアスコレの村人がいて、しっかり1人5Rsをとっているのには負ける。

あとでわかったことだが、この日見かけたヘリコプターが熊田隊員とドクターを乗せたヘリだった。



⇒ アスコーレ
村長のハッジマデ
ィーン氏と

入山の時を覚えて
くれていたのか、
シートの約束を覚
えていたのか、タ
マゴやら野菜やら
持ってくる。肉を
購入して食べるが
飢餓感の胃はむさ
ぼるようにはいっ
ていく

8月14日 晴のち一時雨 (ジョラ5:00→チョンゴ15:00)

連日、よく歩くものだ。今日もピアフォー氷河を横断しアスコーレをすぎる行程である。当初トンゴールまでの予定であったが結局チョンゴ迄歩く。アスコーレに着いた時は、やっと人里におりてきたのかとしみじみ思う。トンゴールの村では、サーダーのトーハの家で、なんと卵のごちそうにありつく。そしてニワトリも頂く。トンゴールから散々呉々、温泉に入りに行ったりして、なつかしのチョンゴにつく。

8月15日 晴 (チョンゴ5:30→ビアーゴ16:20)

出発がはやく朝一番の高巻は楽だったが、ブラルド川が増水していたために、川沿いの道が行けなくなり高巻ルートに行く。アップ・ダウンが激しい。チャボではコバニをたらふく食べる。ヘリコプターの件、メール・ランナーが追いつき伝言をもらうと、OKとのこと。これでひとまず安心。

チャボを過ぎて、大きな木の下につくとパキールがそこがビアーゴという。しかし後で着いたポーターは嘘だという。結局2時間も昼寝したことで、5時近くに、本当のビアーゴに着く。星がきれい。

8月16日 晴 (ビアーゴ5:30→ダッソー10:00 ~12:00 →(ジープ)→スカルド15:30)

今日でいよいよスカルドK2ホテルに入れる。さすがキャラバン最終日となり、全員目ざめが良い。ポーターも異常にとばす。隊員が休んでいると「サーブ、ハリーハリー・ゴーイング」だ。わずか4時間半でダッソー。往路と違い、村の中を通貫する川が増水でレストハウスまで入れずレストハウスより10分歩く。

ここからは、銭の世界だ。楽しようと思えば、銭しだいの世界。ジープ2台、トラクター2台で出発。2時間走ったらもうシガールの村だった、河畔の緑が目にしみる。

スカルドに着くとK2ホテルのおっさん達と再開。熊田隊員はヘリで無事この病院に入っている。なにとはともあれこれで、K2もおわった。

日誌（スカルド～イスラマバード～日本）

- | | | | |
|-------|---|-------|--|
| 8月19日 | チャーター・バスでスカルド出発
塩田・細貝、熊田の関係で残り後
日、飛行機で出発 | 8月25日 | イスラマバード→成田
空港から連絡
塩田・熊田、そして吉田も搭乗
OKになった
パキスタン山岳会招待
ティ・パーティーに隊員8名が出席
記念品を頂く |
| 8月20日 | 夜半、福岡登高会の新貝氏と会う
イスラマバード（シルクロード）に
戻る
日本ヒマラヤ協会へ連絡
観光省へ（ディ・ブリーフィングは
22日） | 8月26日 | イスラマバード→カラチ→カラチ
発
南周りのチケットが確保され、飛
田・山田（修）が出発 |
| 8月21日 | 在パキスタン日本大使館へ
隊荷の整理
塩田・熊田、スカルドより飛行機で
戻る | 8月27日 | 成田到着 |
| 8月22日 | ディ・ブリーフィング（観光省で）
細貝、スカルドより飛行機で戻る
昼食会
全隊員、連絡将校、他
村上、カトマンズへ向けて出発 | 8月28日 | 病院へ行く |
| 8月23日 | 金曜日で休日
督永さん手作りのパーティー
反省会 | 9月中旬 | 隊員は順次帰国 |
| 8月24日 | 山田（昇）カトマンズへ向け出発
別送品の手配
パキスタン山岳会より連絡
明日ティーパーティーに招待する
PIAへ
熊田を塩田ドクターが勤務する病
院に早く入院させる為、チケット
の確保に連日行く（明日キャンセ
ルまちで入れそうとの事） | | |

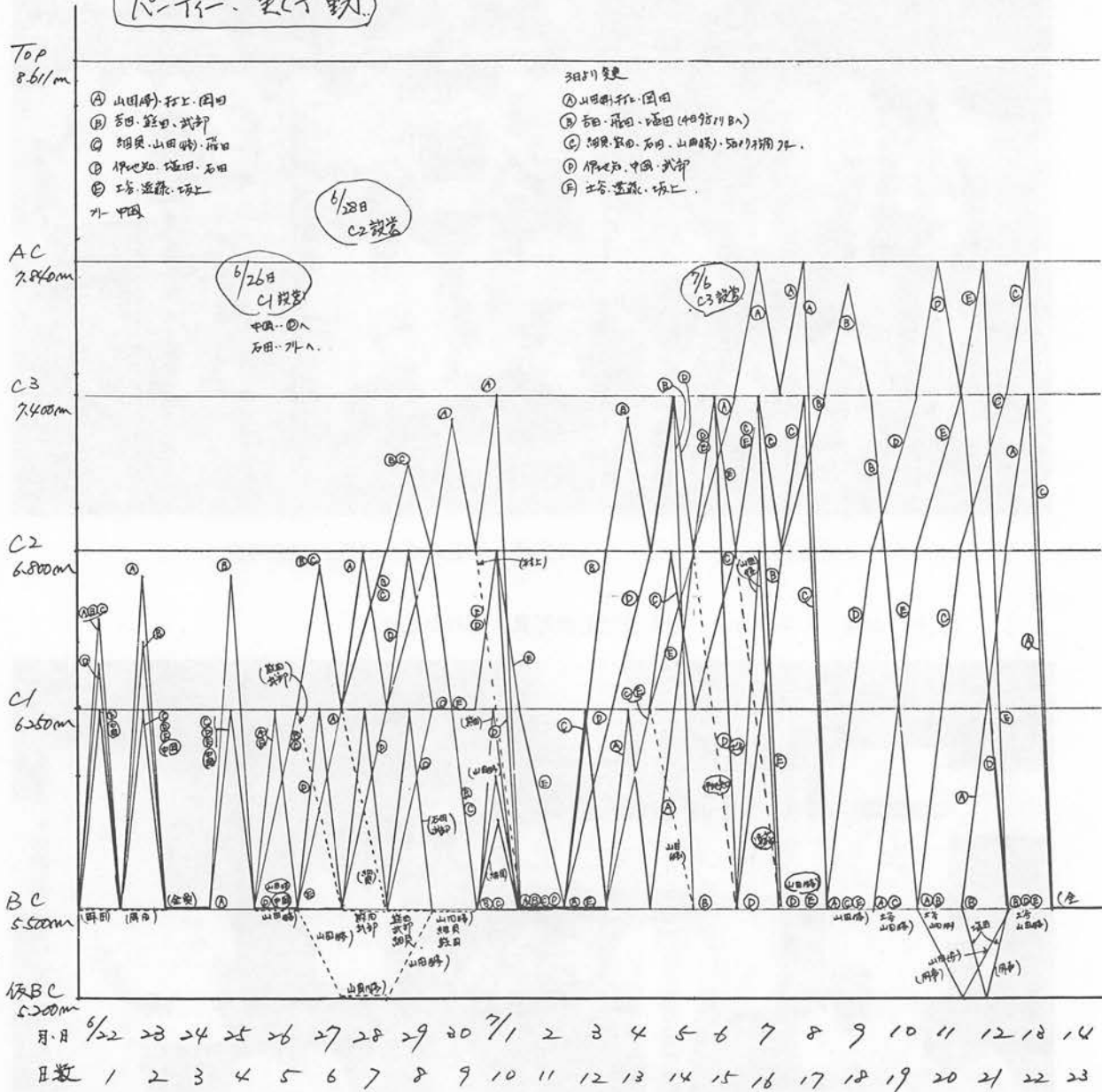


↑ (パキスタン山岳会のティー・パーティに招待、会長のミルザ氏と記念写真)

↓ (アヤコお嬢さん手作りの、横断幕で記念写真。ありがとう)



パーティー・実行動



—103—

隊員

登山活動

隊員行動表

隊長 飛田和夫 (Kazuo TOBITA)



K 2 以後の海外登山

1986年冬 ゴーキョ・ピーク

登山活動 (6/22~8/6)

行動 26日

BC滞在 16日

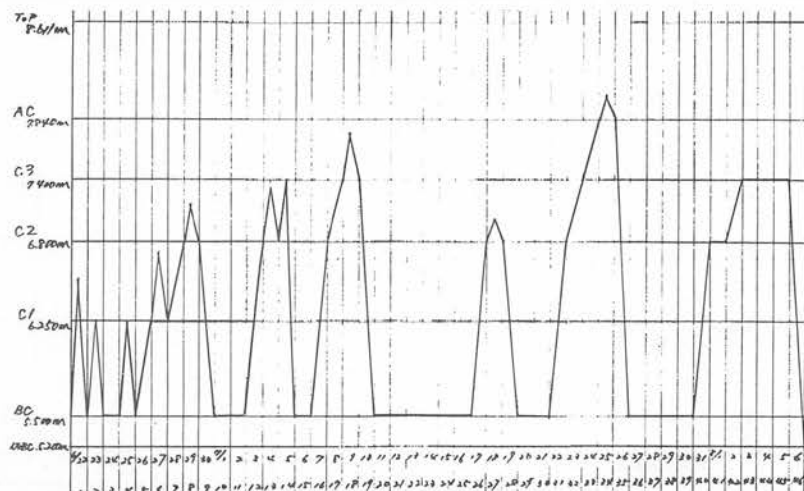
停滞 4日

(C2:1, C3:3)

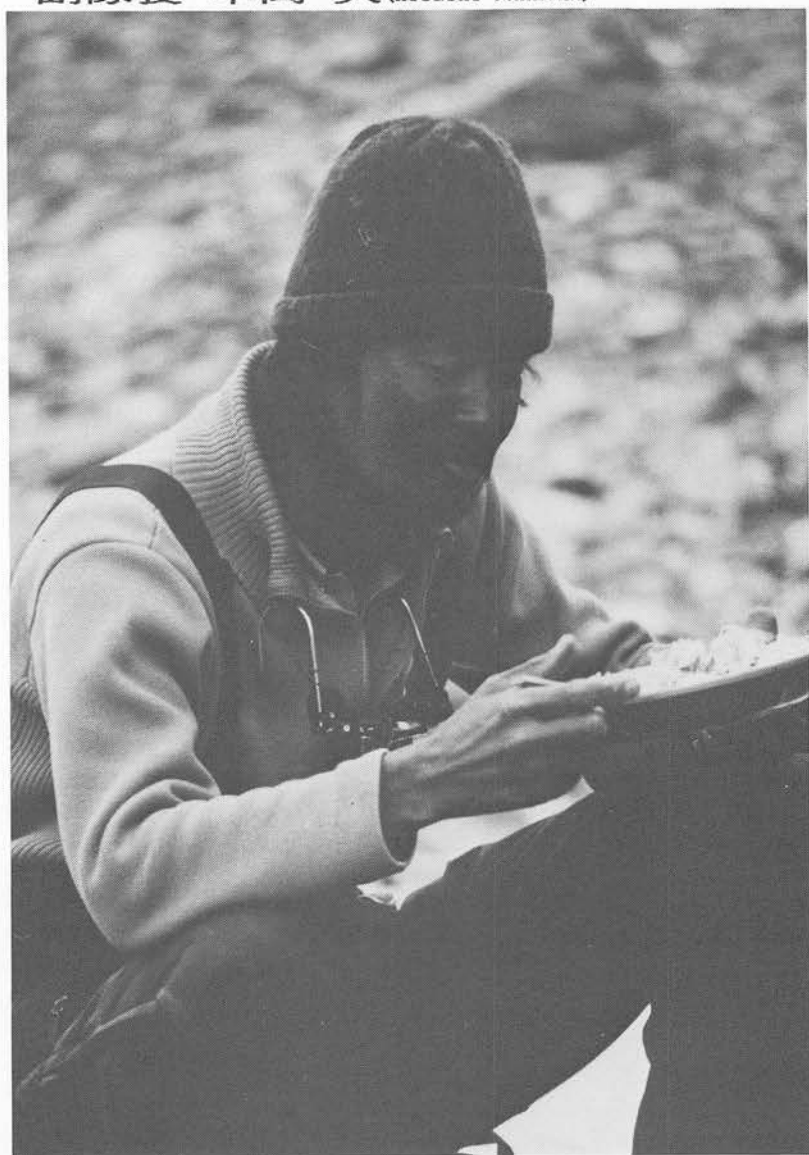
宿泊場所と日数

BC:25, C1:2, C2:10

C3: 7, AC:2



副隊長 中岡 久 (Hisashi NAKAOKA)



登山活動 (6/22~8/6)

行動 15日

BC滞在 30日

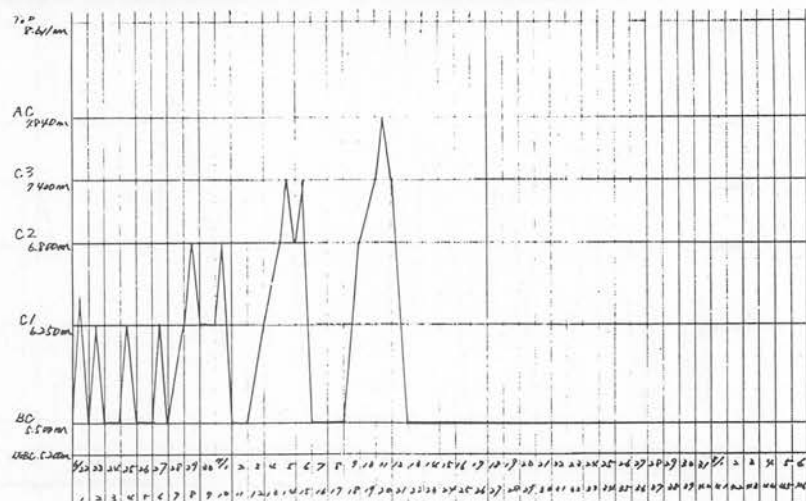
停滞 1日

(C1:1)

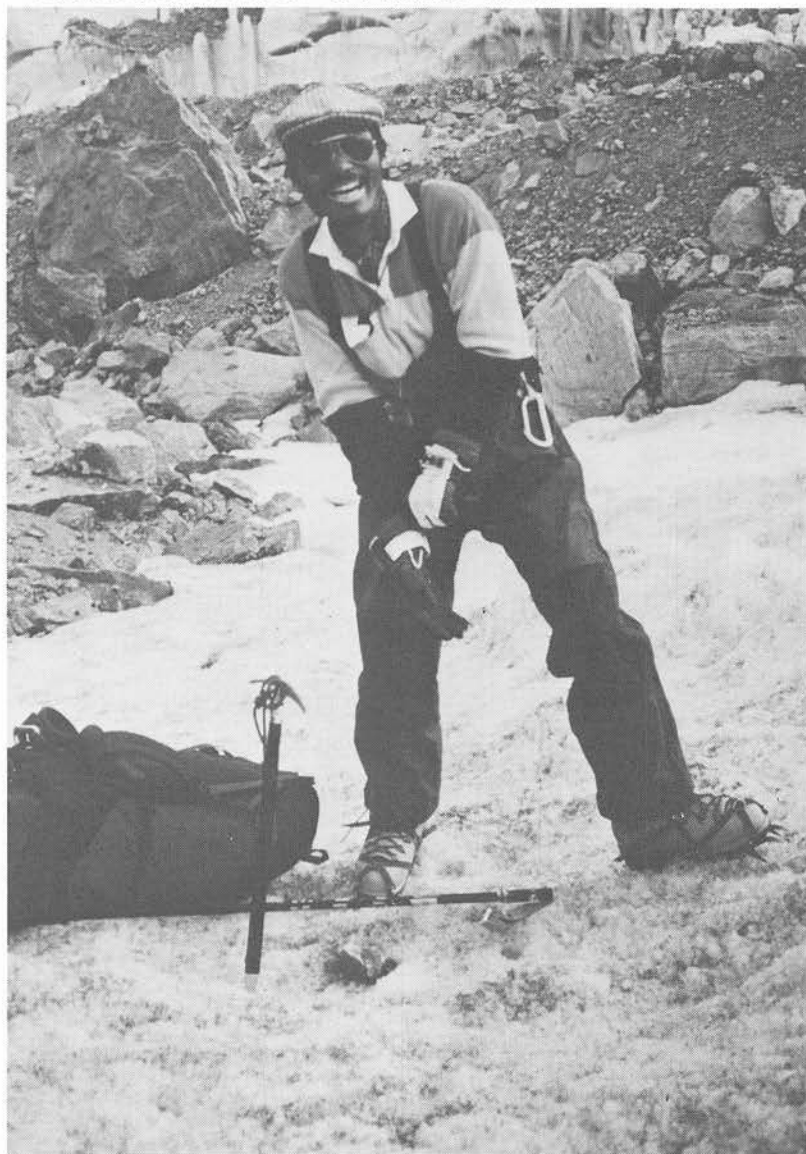
宿泊場所と日数

BC:37, C1:4, C2:3

C3: 2



副隊長 山田 昇 (Noboru YAMADA)



K 2 以後の海外登山

1985年秋 エベレスト登頂

1985年冬 マナスル登頂

1985年夏 トランゴ・タワー

登山活動 (6/22~8/6)

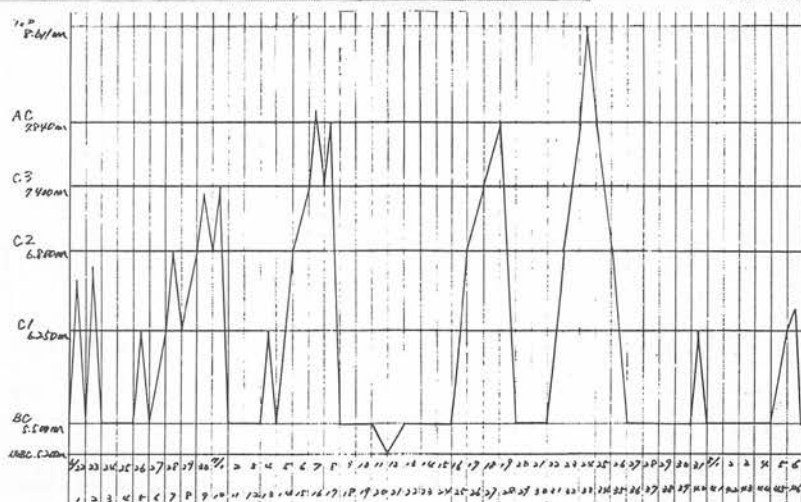
行動 27日

BC滞在 19日

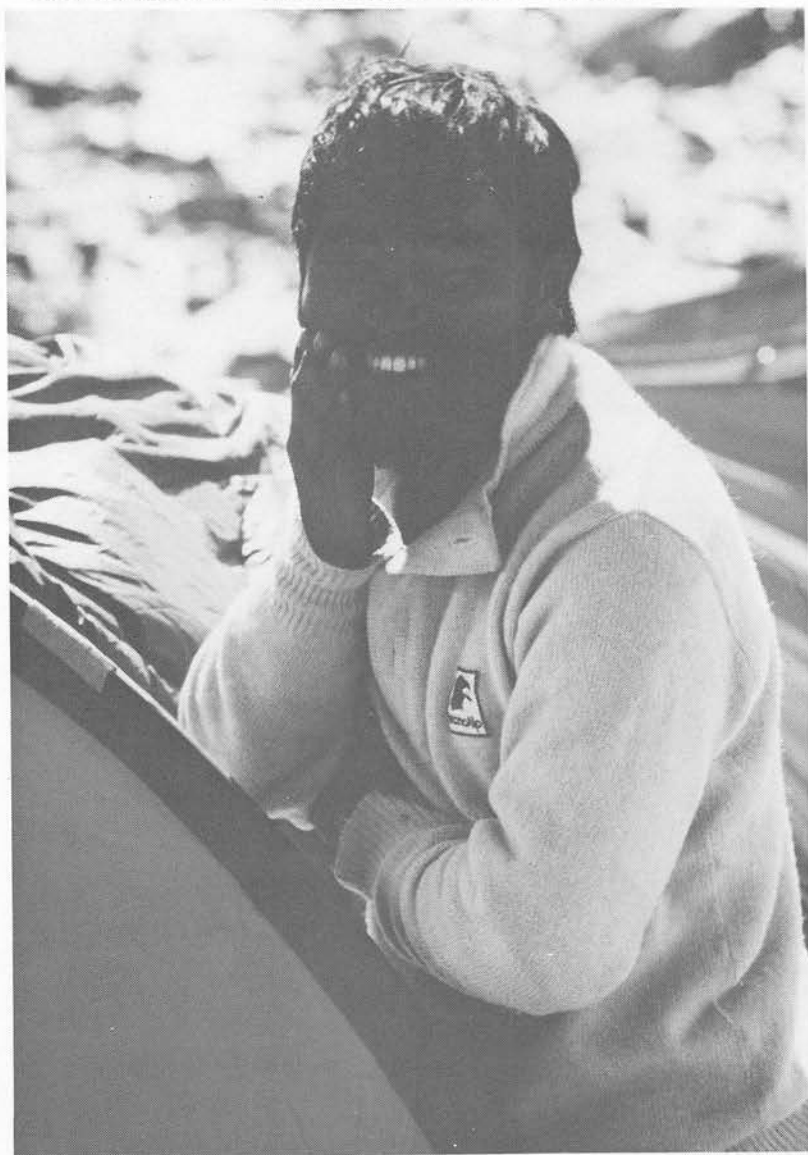
宿泊場所と日数

BC:30, C1:2, C2:7

C3: 3, AC:3



登攀隊長 吉田憲司 (Kenji YOSHIDA)



K 2 以後の海外登山

1986年夏 トランゴ・タワー

登山活動 (6/22~8/6)

行動 26日

BC滞在 19日

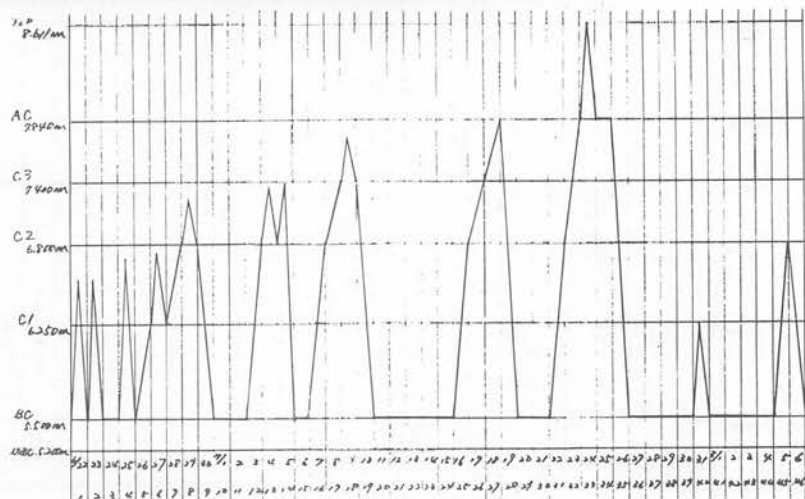
停滞 1日

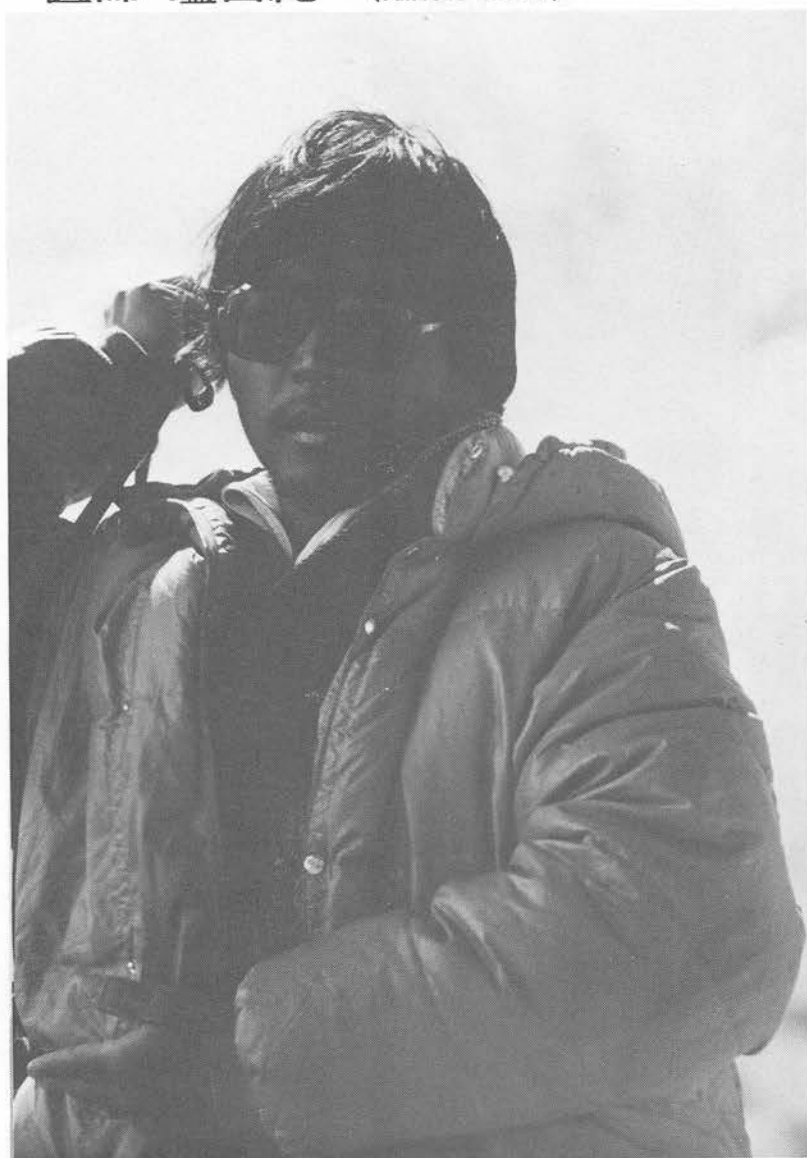
(AC:1)

宿泊場所と日数

BC:29,C1:2,C2:8

C3: 3,AC:4





登山活動 (6/22~8/6)

行動 26日

BC滞在 15日

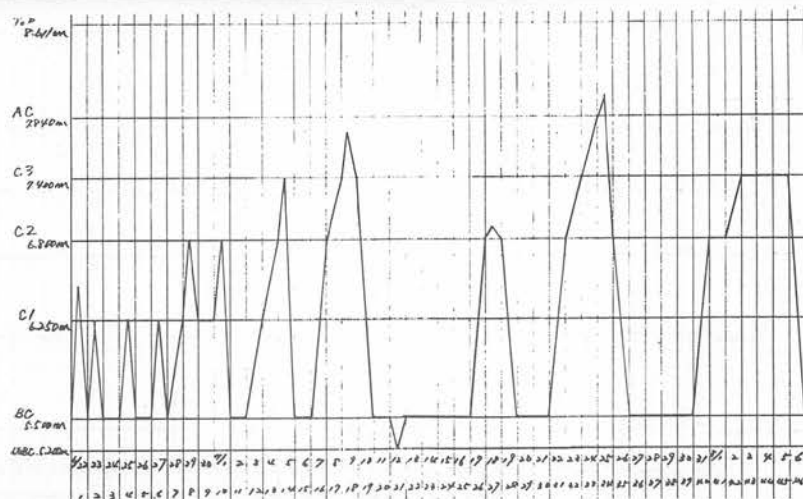
停滞 5日

(C1:1, C2:1, C3:3)

宿泊場所と日数

BC:26, C1:4, C2:7

C3: 7, AC:2



隊員 山田 修 (Osamu YAMADA) (スイスの女性隊員と)



登山活動 (6/22~8/6)

行動 17日

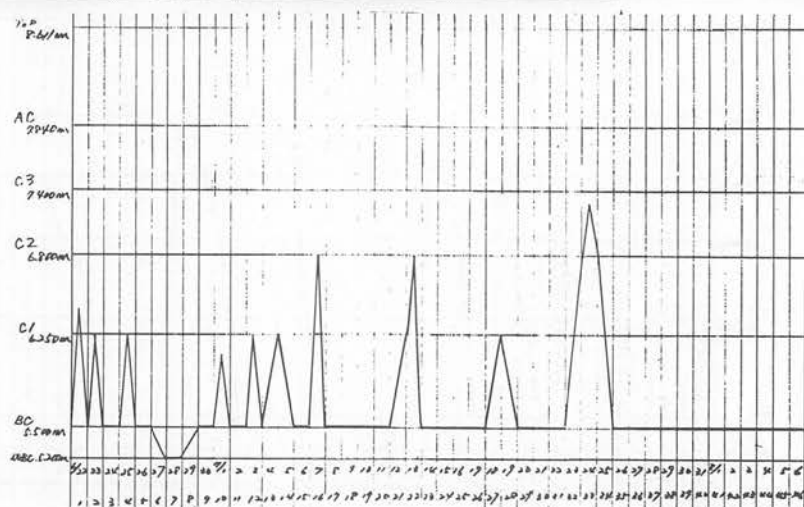
BC滞在 27日

仮BC滞在 2日

宿泊場所と日数

仮BC:2, BC:39

C1:3, C2:2



隊員 伊地知 博(Hiroshi IJICHI)



登山活動 (6/22~8/6)

行動 22日

BC滞在 14日

仮BC滞在 9日

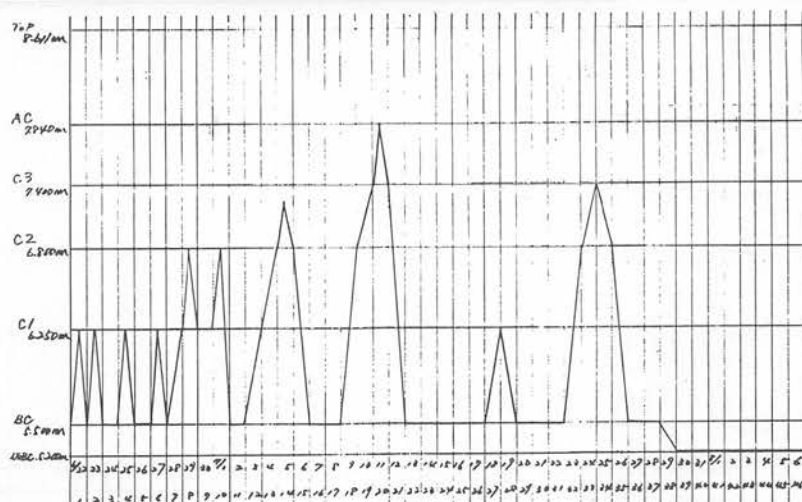
停滞 1日

(C1:1)

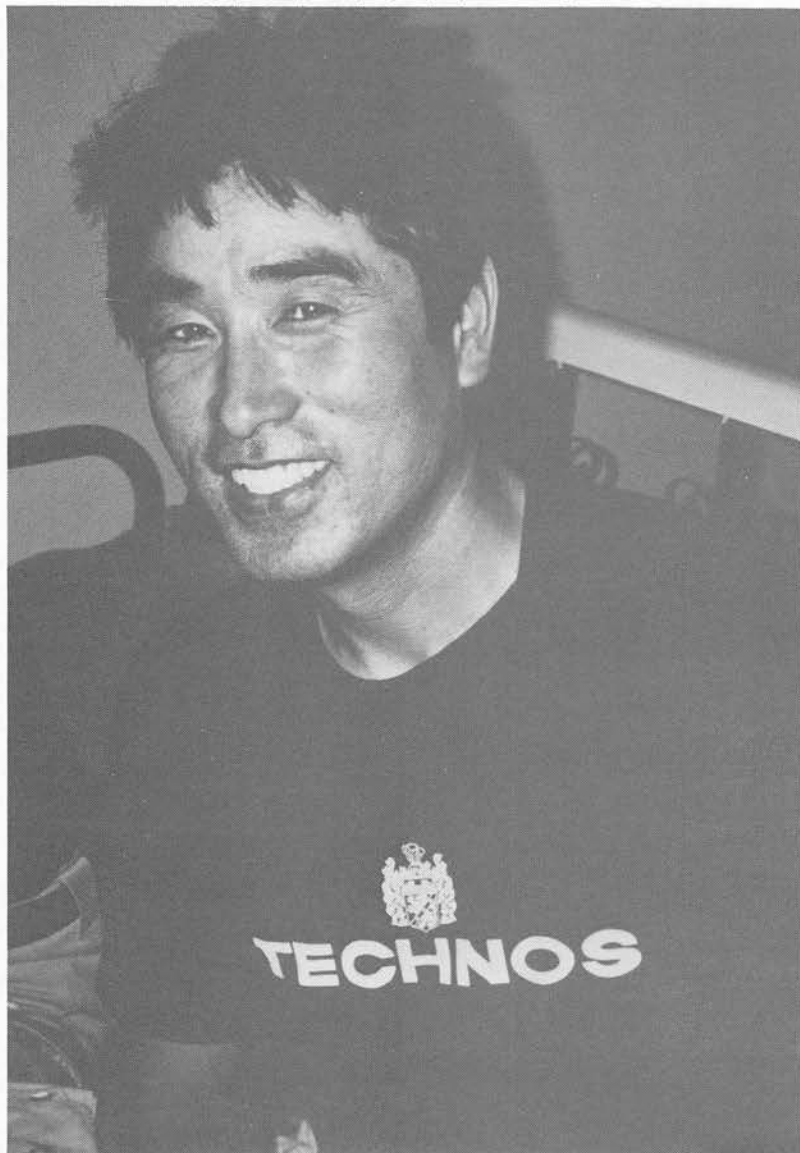
宿泊場所と日数

仮BC:9, BC:24, C1:5

C2:5, C3:3



隊員 遠藤喜重郎 (Kijuru ENDO)



登山活動 (6/22~8/6)

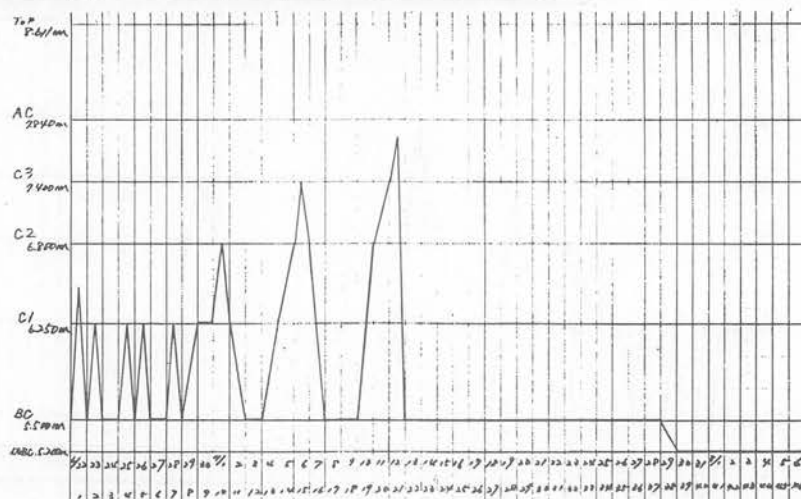
行動 16日
BC滞在 20日
仮BC滞在 9日
停滞 1日

(C1:1)

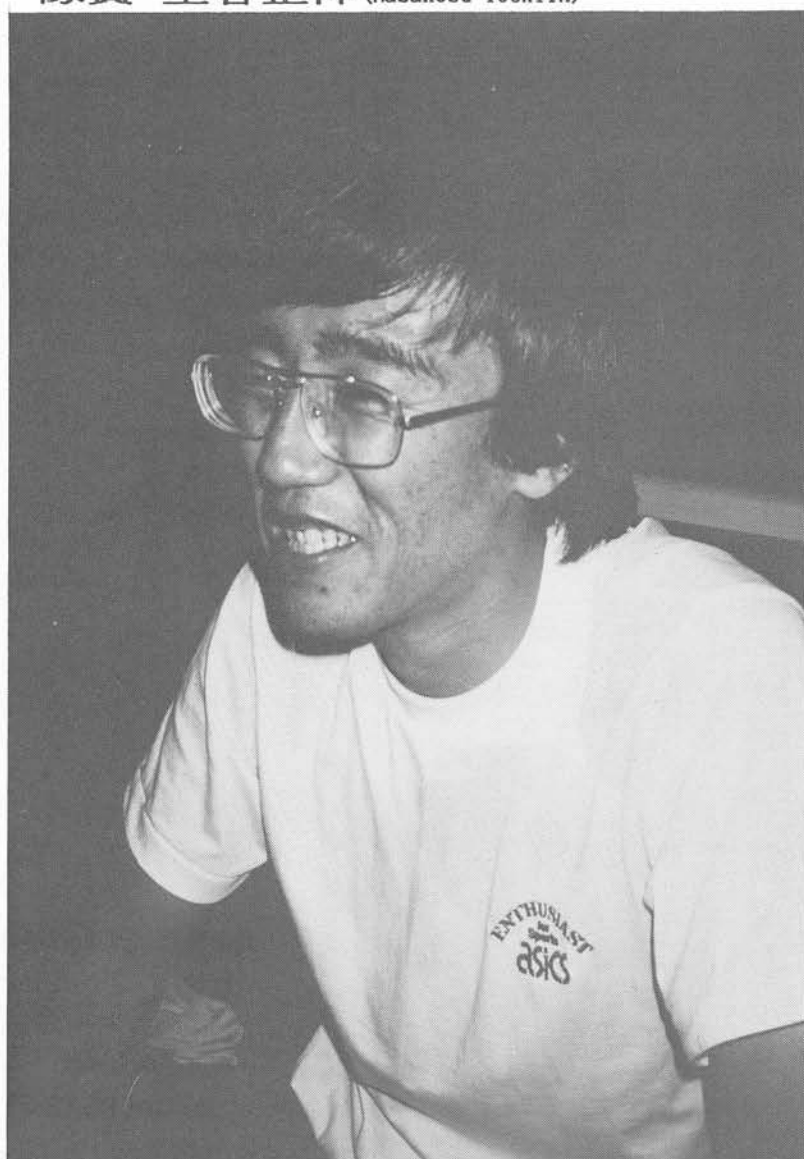
宿泊場所と日数

仮BC:9, BC:29, C1:4

C2:3, C3:1



隊員 土谷正伸 (Masanobu TUCHIYA)



登山活動 (6/22~8/6)

行動 12日

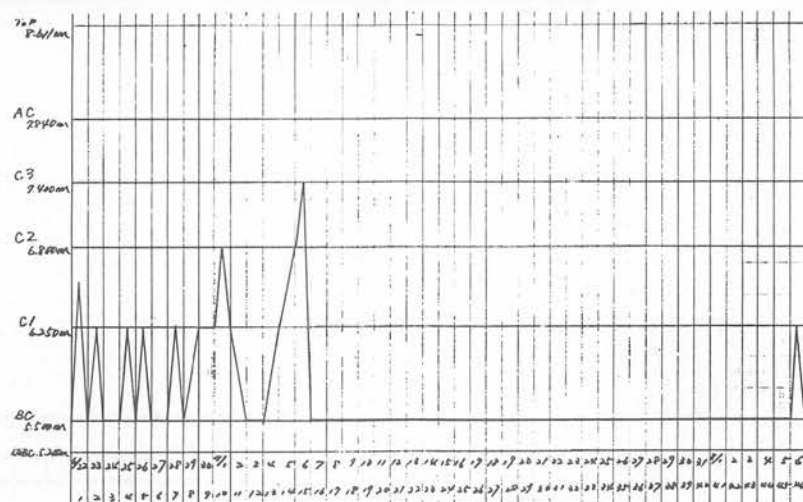
BC滞在 33日

停滞 1日

(C1:1)

宿泊場所と日数

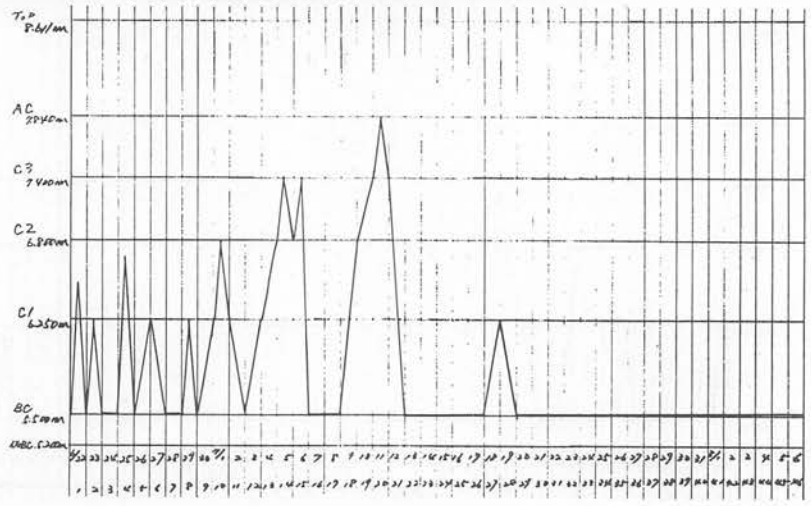
BC:41, C1:4, C2:1



隊員 武部秀夫(Hideo TAKEBE)



登山活動〔6/22～8/6〕
 行動 23日
 BC滞在 23日
 宿泊場所と日数
 BC:33,C1:5,C2:4
 C3: 4



隊員 石田勇悦 (Yuetsu ISHIDA)



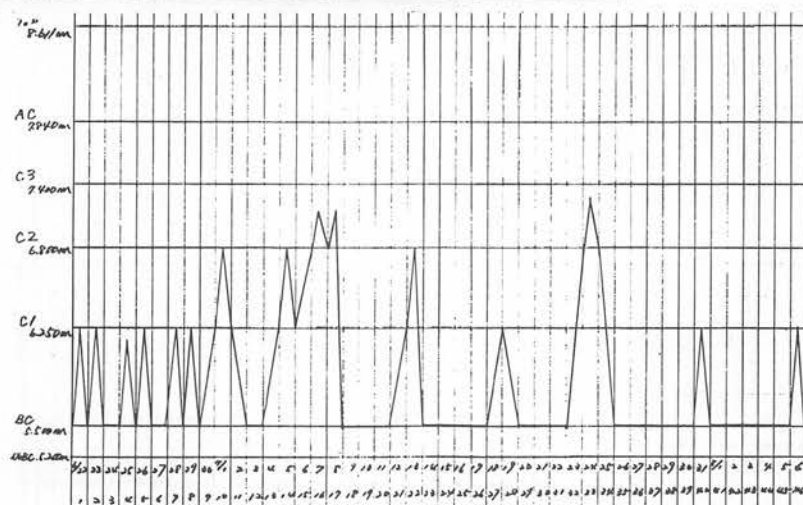
登山活動 (6/22~8/6)

行動 24日

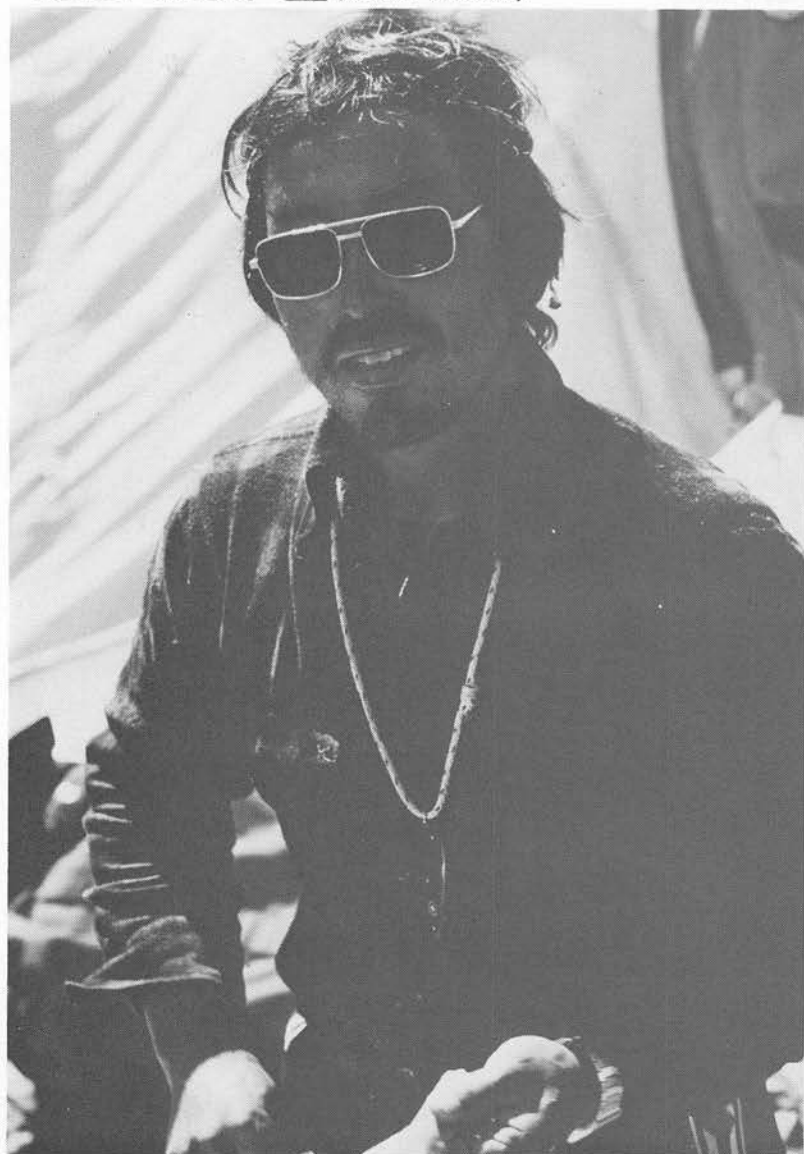
BC滞在 22日

宿泊場所と日数

BC:36, C1:6, C2:4



隊員 細貝 登 (Noboru HOSOKAI)



登山活動 (6/22~8/6)

行動 26日

BC滞在 16日

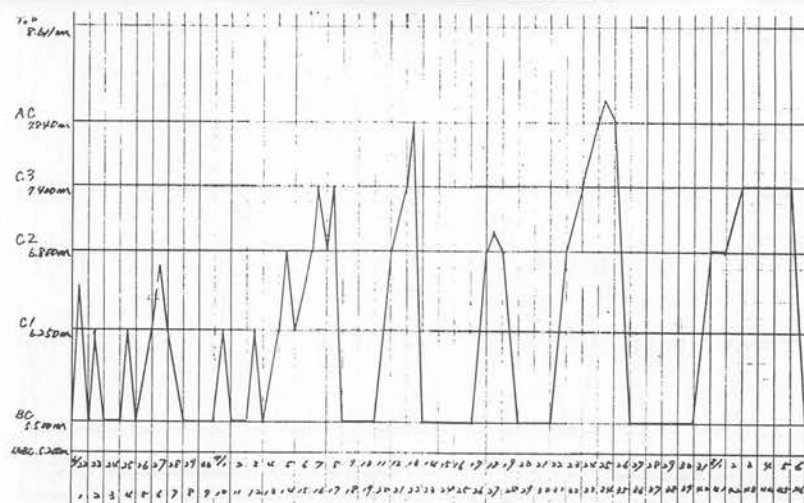
停滞 4日

(C2:1, C3:3)

宿泊場所と日程

BC:26, C1:4, C2:8

C3: 6, AC:2



隊員 村上和也 (Kazunari MURAKAMI)



K 2 以後の海外登山
1985年秋 エベレスト

登山活動 (6/22~8/6)

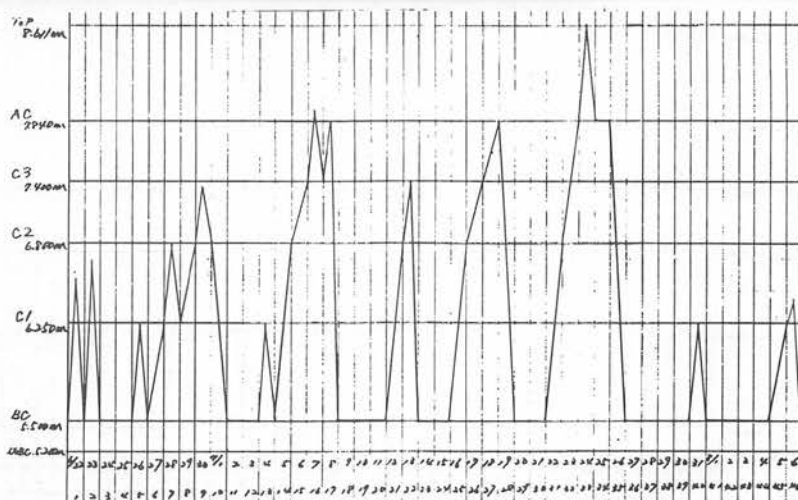
行動 26日
BC滞在 19日
停滞 1日

(AC:1)

宿泊場所と日程

BC:30, C1:2, C2:7

C3: 3, AC:4



隊員 坂上利明 (Toshiaki SAKAUE)



登山活動 (6/22~8/6)

行動 25日

BC滞在 20日

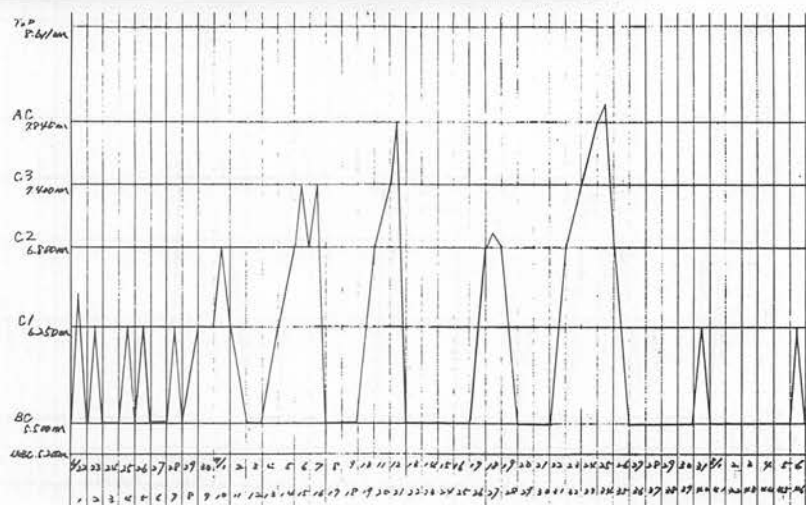
停滞 1日

(C1:1)

宿泊場所と日程

BC:32,C1:4,C2:7

C2: 2,AC:1





登山活動 (6/22~8/6)

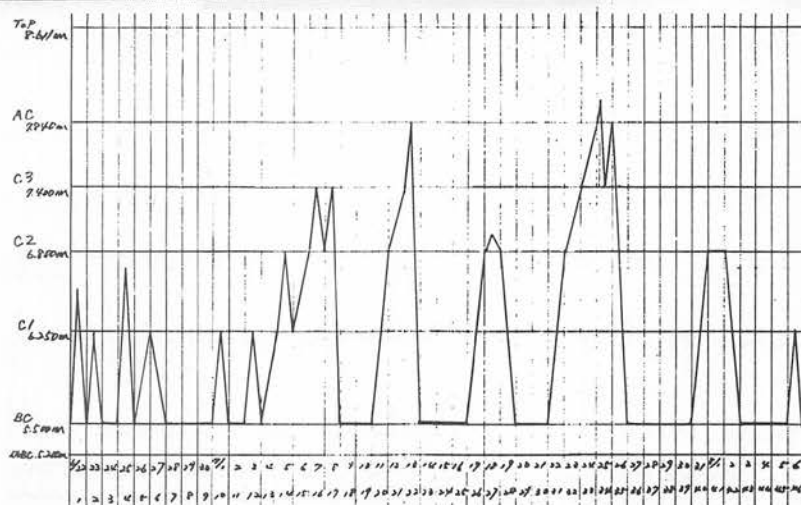
行動 25日
BC滞在 20日
停滞 1日

(C2:1)

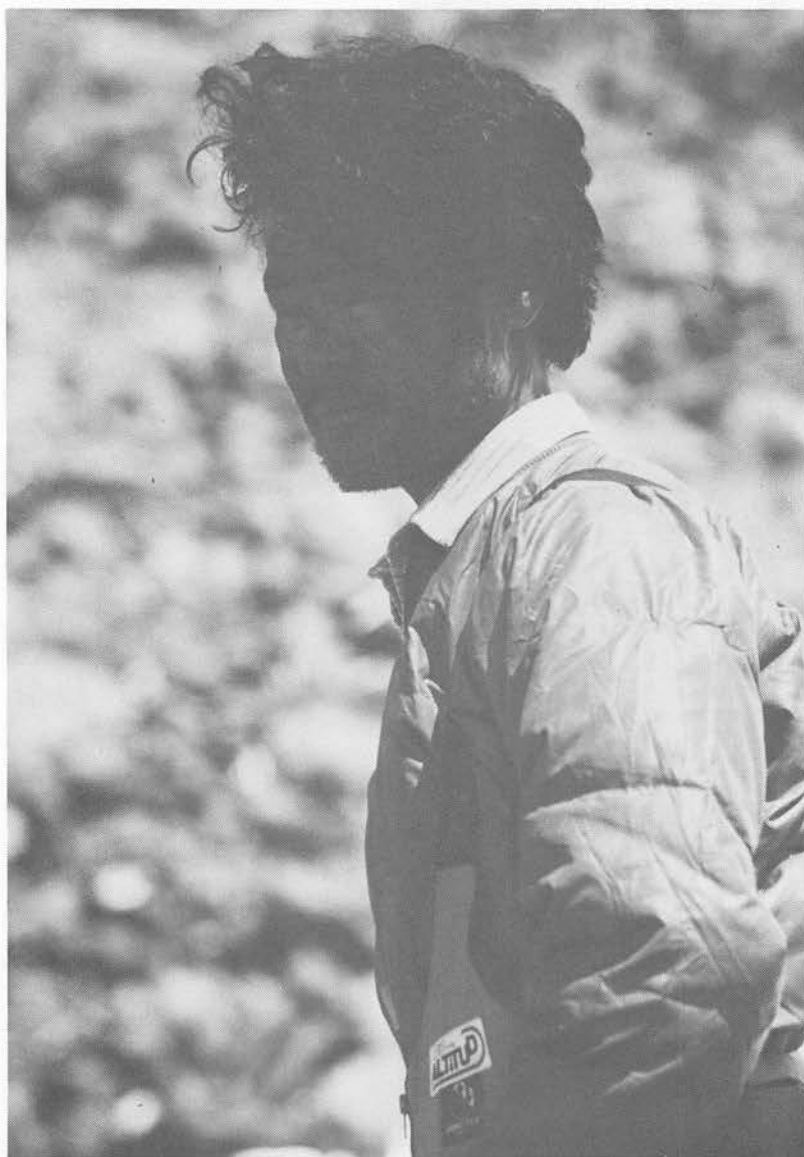
宿泊場所と日程

BC:31, C1:3, C2:8

C3: 2, AC:2



隊員 岡田勇孝 (Yukou OKADA)



登山期間 (6/22~8/6)

行動 25日

BC滞在 17日

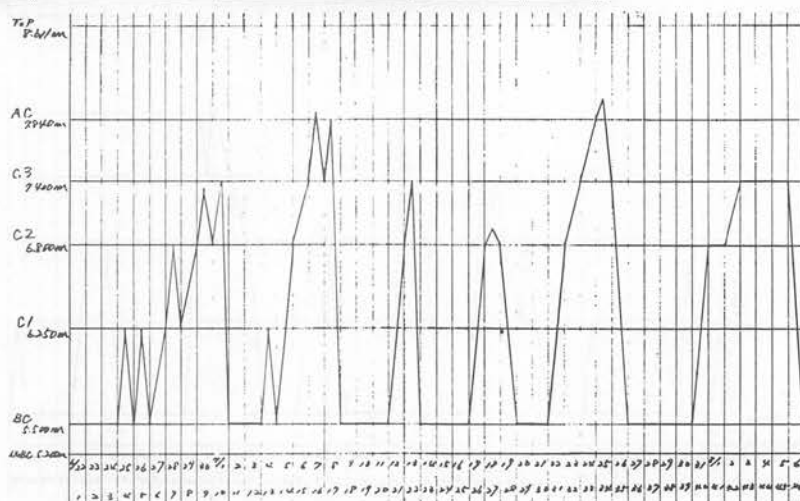
停滞 4日

(C2:1, C3:3)

宿泊場所と日程

BC:26, C1:2, C2:9

C3: 8, AC:1

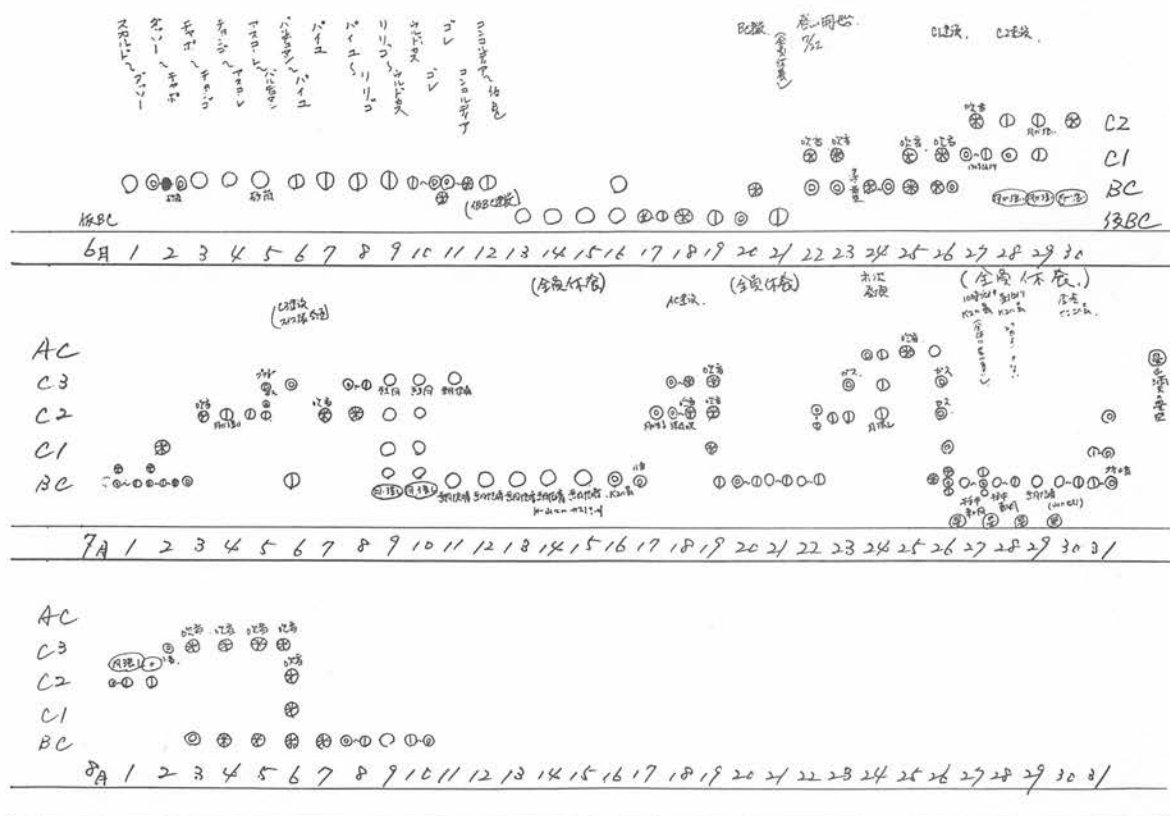




MUHAMMAD RAMZAN

ラマザン（中央）とフランス・カナダ隊の連絡将校 BC付近にて

〔天候概要〕



総 括

総括

〔K 2 をいかに登ったか〕

総括

各分野の反省

約7,900m付近からのK2



HAT K2 登山隊 '85

総括

〔K 2 をいかに登ったか〕

系念括

世界第2位的高峰・K 2 (8,611m) に立つ。経験者を輩出する。という目的と南東稜から酸素を吸ってオーソドックスな方法によって登る、という戦略で向かい、結果は1985年7月24日に山田(昇)副隊長・吉田登攀隊長・村上隊員の3名がピークに立ち、翌25日に第2次アタックをかけたが荒天につかまり撤退した。よもやその高度が最高高度になろうとは思ってもいなかったが、8,000mラインに6名、AC(7,840m)に3名、7,700mラインに1名、7,000m台に3名が足跡を残し、全員無事にイスラマドード・シルクロードの督永さんに迎えてもらうことができた。

結果をみるならば、一応成功の部類に入るのかもしれない。隊員も8,000m峰登山活動の厳しさ、苦悩、喜びを自分自身の体でいやというほど、体験してきたことと考え、各隊員の最高到達高度をみてもほぼ納得のいくものであろう。だが、最大限9名という数字はあったが登攀隊員はピークに立つことにより、一層すべての面で生かされてくるのだろう。そのような観点からも、9名のアタックを基礎にアタック計画を遂行していたので、もう少しピークに立たせたかった。自らも立ちたかった。が、登山活動を終了してのいつわぎる気持ちだ。

何故、3名で終わってしまったのか、結果を端的にみるなら「荒天につかまってしまった」につきる。しかし、キャンプ展開は、ルート工作・荷上げ・休養のローティションの取り方は、荷上げの量は、天気判断は、隊員は等々のすべての面でどうだったのか、K 2 登山の企画から実践にいたるまですべてがその要因となるが、いずれにせよ結果による判断であることにかわりはなく、今回以外にどのように展開されても、その結果はインシュアラー(神のみか知る)であろう。隊が自分が目的達成に向け、どのように行動し展開したのか、確個たる目的に向けての燃焼度でもあろう。

今回のK 2 登山で特長的だった点を見るなら、隊構成の平均年齢の高さと、登山活動時のパーティー・リーダーへの行動決定の依存であった。

隊構成は、最高年齢、45歳、最年少は27歳で平均年齢は34歳(出発時)で、ヒマラヤ登山としては高い方に入ろう。

登山活動時のパーティー・リーダーへの行動決定依存については、今回のK 2 登山16名の隊員で構成され、隊長・ドクターを含めた16名全員が登攀隊員であることが登山活動を運営するにあたり重要事項であった。なぜなら、16名の多人数で8,000mをはるかに越える超々高所登山で隊員への行動指示と管理をする隊員が必要であり、それも一応正常な生態を維持出来るBCにとどまれる隊員でもあろう。今回は全員登攀隊員であり、隊長として高所での行動中は常に正常な頭で指揮出来るはずがなく、まして自分自身が体調不調の際に隊員の健康管理や行動指示をできるはずがない、との判断から、どの様な事態にも対応出来る企画段階での重要性があったが何よりも、自らの命は自らが守るための自己管理の徹底と各パーティー・リーダーへの行動決定の依存をした。然し、いかなる事についても最終決定は隊長の指示によった。

が、そのことが隊員の意志の弱さ、パーティーの軟弱ととらえた隊員もあり、又、違った角度から各パーティーが行動を決定するまでのやりとりを、私自身心の葛藤をしながら聞いた事もあったが、全体的にメリットがあったと考えている。

高所を目指す高所登山であるがゆえに、生態には苛酷なまでに厳しく、総合的な力量が必要とされ、その過程で、自らの行動を維持出来るか、自らの命を守るかは、平均年齢34歳という大人であったがゆえに対応出来、それらの企画の礎えのもとに大人の遠征ができたと思える。

日本ヒマラヤ協会K2登山隊1985は、3名の登頂で終わった。

各分野の反省

〔日程〕

4月29日に出発した先々発隊(2名)によって、カラチ港での通関業務とイスラマバードまでの輸送を行ったが、税金の関係で日数をかなりついやした。計画日程はあくまでも我々サイドの事で、現地には適応しないのだろうが、種々要素も含めた計画よりも遅れた。5月18日頃には、隊荷をスカルドに移動させる計画だったが無理であった。隊荷のイスラマ到着は27日の夜になった。

隊の分散として、後発隊がパキスタンに到着する前に、本隊はイスラマバードを出発しキャラバンをもスタートさせようとしたが、分散についての認識が不足していた。イスラマバードを離れる前のブリーフィングでは、現地雇用人の保険契約、連絡将校の装備の支給と食糧の購入、そして全隊員の外国人登録が必要であった。最低限、隊長は全隊員が入国し外国人登録を済ませるまでイスラマバードに留まる必要があった。結果的には5月22日に先行隊3名をスカルドに移動させ、5月28日にはシルクロードで再梱包が出来、29日に残り13名の全員が出発したが、全員の同一行動が可能であればやはり同一行動がムダもない。

キャラバン日程について、K2BCまで何日なのかははっきりしなかったが、5月24日にシルクロードでサダーを雇用し、以前多くの隊についている経験からキャラバン日程(所定の日程)が確認され、ほぼ計画通りに大きなトラブルも無くK2BCに入ることが出来た。

仮BC(5,200m)～BC(5,500m)の荷上げについては、キャラバン途中のウルドカスから先行隊を出しルート工作にあたり、可能であれば一気に5,500mまで上げる方法と、何人か選定して荷上げに従事させる方法をもっていたが結果的に後者になった。ウルドカスでポーターの休養が無くなった事とやはり仮BC～BC間のルートは雪崩・ルートの状況から多人数の同一行動は無理だったろう。25名のポーターを再雇用して約1週間で荷上げを済ませた。

6月22日に登山活動を開始し、8月6日に終了した。8日・9日にかけて仮BCに移動、翌10日には帰路キャラバンのスタートを開始させた。もう少し休養日が必要の様子だったが、ポーターが予定通り仮BCに上がってきたこともあり、早めの下降となる。キャラバンは1隊員が不調に陥りヘリコプリーの要請の件等もあり、隊を先行隊・本隊・後発隊等に分散して対応し、不調隊員はヘリコプリーで13日にスカルドの病院にはいり、後発隊も18日にスカルドに到着した。不調隊員と付添い2名を残し、19日チャーターバスでスカルドを発ち、8月20日にイスラマバードに戻った。2～3日後にはスカルドから飛行機で残りの隊員も戻って来た。

〔登山活動全般〕

6月22日から8月6日までの46日間の登山期間で終了した。登山活動初期、計画どおりにC1(6,500m)、C2(7,400m)としてルート工作と荷上げを実施していたが、キャンプ配置計画を変更(実践・登山活動の項参照)した。

C1	6,250m	(1977年日山協隊のC2)
C2	6,800m	(" C3・ハウスのチムニー上部)
C3	7,400m	(" C4・下部プラトー)

以上のようにキャンプ地を変更し、6月26日にC1、28日にC2、C3は7月6日に設営していった。その他の高度も検討したが南東稜じたい、キャンプ・サイトとして一ヶ所に多くのテントを設営するのが限られ、C1・C2さえも全体的に傾斜をもっており物を落としたり、ヘマをすれば自分自身さえも滑落しそうなサイトである。日山協隊以降も多くが南東稜に取付いているが、だいたいキャンプサイトは同じようだ。

C3以上のキャンプ設定も計画では、C4(7,900m)AC(8,200m)であったがC4予定地だった7,840mをACとしてアタック体制にはいった(実践・日誌、登山活動の項参照)。変更に踏み切った要因は、ACを予定している位置が日山協隊と雪の状態が異なっており、登頂したスイス隊により雪崩の危険性かなりあると教示され、7月7日に上部プラトーに達した山田(昇)からも、計画のAC地点にはキャンプを出す気にはなれないと言う連絡も入った。荷上げと疲労の問題、何よりも7,840mからでもアタックに成功する可能性はあるとの判断から決定した。

アタックは結果的に、7月16日～19日・7月22日～26日・7月31日～8月6日の3回となった(実践の項参照)、日程的にもう一回のアタックも考えない事もなかったが、隊員の疲労・食糧・何よりもアタックの指示を出す者の心の交錯等、全てを考察すると最後のアタックにならざるをえない。荒天の含みも入れて帰路ポーター雇用の手配を行った。

[高所順応]

事故防止の課題、登頂成功の最大の課題として高所順応に取組み、

- ① スカルド～仮BC
- ② 仮BC～BC
- ③ 登山活動

として対応していった。(企画の項参照)

①は高所未経験者と希望者によりパイユの裏山で順応行動をした。スカルド～仮BC間は約2週間で徐々に高度を上げるので、特別に不調を訴える隊員は無かったが、コンコルディア付近からは高度も増すのでゆっくりしたペースが望ましいがポーターの問題もありそんな事もいってられないのが現状だろう。

この間は、高度順応よりも環境順応にあるように思える。日中の酷暑・夜の寒気、岩と砂の世界に砂嵐洗礼、氷河のアップダウンのハードな行動等による疲労の蓄積といった環境順応の対応が必要に感じる。

②は、ほとんどの隊荷はポーターに依存し、隊員は個装程度で順応に専念した。が、この間にBC以上に達した(5,800mと6,200m)隊員もあり、早々に高所に上がった為か、高所への対応が表れていた。BC以上に達した隊員のみでなく症状の差があるものの全隊員にそうであった。この1週間の行動により、殆どの隊員に高度障害・高度への対応が表れたことは、順応の表れでもあり5,500mへのBC入山を容易にさせた。

③についての基本行動(企画の項参照)によって、各隊員の行動計画を作成し、行動指示を毎日伝達したが、総括の項でも触れたように各隊員が順応しようとする意識、自覚を含めた自己管理であり、最終決定は隊長が指示したものの、主にパーティーの判断はパーティー・リーダーに任せた。

全てに関し、机上計画は机上でしかなく、基本計画と共に自身の意欲と自然環境への対応を充分に考慮しなければならない。

〔各キャンプ・日程関係〕

	仮BC	B C	C 1	C 2	C 3	A C	ピーク
高 度	5,200m	5,500m	6,250m	6,800m	7,400m	7,840m	8,611m
場 所	日山協隊 B C	南東稜 取付付近	6,250m 地点	ハウスのチ ムニー上部	下部 プラトー	上部プラ トーの肩	
高 差	300m		750m	550m	600m	440m	771m
ルート工 作 日程	1 日		1 日	3 日	3 日	1 日	
日 程	6月12日	6月20日	6月26日	6月28日	7月 6日	7月18日	7月24日
テント数			4～5人用 3張	4～5人用 3張	4～5人用 2張	4～5人用 2張	
宿泊人数	①	21人	494人	56人	93人	51人	21人
	②	160人	563人	56人	93人	51人	21人

- ① 6月22日～8月6日までの登山期間の宿泊人数
 ② 6月12日～8月9日までの仮BC以上の宿泊人数

〔装備〕

（共同装備）

基本的な計画として、今回のK2登山は南東稜をオーソドックスな形、ポーラソメットで登るというアウトラインが、隊が構成された時の基幹だった。装備係は、そのアウトラインを基本とし、1977年に日山協隊が登ったルート図を参考に、今回の装備を準備した。

実際登山を行ってみると、コック及びキッチンの支給以外、特に不足した物はなく、登攀具等に関してはルートの認識不足で、持参した装備がだいぶ余ってしまった。以下持参した装備類で気付いた点を記す。

☆ 登攀用具

フィックスロープ・ロックハーケンに残置の物が多くあったが、フィックスロープは、多人数が登下降することを考え約5,600mの地点から7,400mの間、ほとんどのロープを張り換えた。後は約7,700mで50m3ピッチ分使用した。ロックハーケンは、ほとんど残置の物で間に合い使用されなかった。アイスハケン・ボルト・アブミ・ワイヤーラダー・ワカン等は全く使用せず。ワイヤーラダーに関しては日山協隊の物が要所の三ヶ所に残っており現在でも使用出来る。スノーバーで40cmの短い方は天幕の固定に使用したが、長い物は数ヶ所で使用したのみで、ほとんどが残った。標識竿は、下部プラトー及び上部プラトーで使用した。上部はガスに巻かれる事が多いので有効だった。

南東稜は登攀具面からみると、毎年多くの隊が入山しているためルートは良く確保されており、小人数のパーティーで行く場合、多くのロープ・ハーケン類は必要がないと思う。

☆ 幕営用具

天幕は、BC用と高所用を準備した。メステントは、ハイビシートで作成。高所用はC3以上で新品にした。キャンピングガスの使用量は、天幕一張当たり一日3個で準備したが、結果的には残る。ランプは便利。プロパンは多人数の登山の場合は便利。今回は船便で日本から送った。パキスタンでも少々重いが入る。中身は安い容器のが高いのが欠点。

☆ その他

パキスタンは、現在急速度で物価が上がっているが、そのせいか物価面に関してはかなり豊富で（登山装備はほとんど手に入らないが）生活用具は良く揃っている。現地で購入する物を増やした方がアナカンの代金を考えると、安価になると思う。

リエゾンオフィサーへの支給装備は、登山隊をスムーズに運営させる為にも、ほぼ隊員と同等の物を準備する必要がある。賃金で支払ってもパキスタンでは、登山装備があまり無いので喜ばないと思う。コック・キッチン・ポーターへの支給は、お金で良い場合もあるがウルドカス以奥へ行く場合は、規定の供給・支給品を持参した方がトラブルが少なくて済む。1985年現在ではウルドカスまでは、石油等の装備を供給しなくとも別に問題はなさそう、ウルドカスまではどうにかポーターが自分で、木を集めて、食事の用意が出来る。

（個人装備）

特に隊で用意した装備というのは、オーバーシューズとヤッケ（上下）で、あとは普段日本の冬山で使用している装備をそのまま使用した。各項目の選択は個人にまかせた。ただキャラバンの事を考えポーターが運ぶ25kg+αの重量があるのでその範囲内で、各人に工夫して貰った。

個人装備で特に問題はなかったが、ヘッドランプで電池ケースが外気に直接触れるタイプの物は、電池の消耗が激しく、吹雪時には約30分で使えなくなった。それに反して、コードでつながっていて服の中にしまえる物は普通の時間使用出来た。

〔輸送・梱包〕

プロパンボンベ、ブタンガスカートリッジの輸送と経費削減のために船輸送をすることにした。
種々、輸送会社にお手数をおかけさせていただき下記に決め準備に入る。

大阪商船三井船舶㈱・・・・・・横浜港～カラチ港間の輸送

日本通運㈱〔東京海外引越支店〕・・・・船積みまでの一切の手続き

1985, 2, 1 ～ 8	集荷、小別け	倉庫	日通倉庫㈱ 晴海埠頭の倉庫を借用
2, 9 ～ 11	梱包、木枠づめ	危険物の搬入先	日通商事、深川工場
2, 20	業者へ	木枠の搬出先	東京海外引越支店
以降	横浜税関 (日本通運㈱横浜 海外引越支店を通じて) 海運同盟事務局 (大阪商船三井船舶㈱ を通じて)	書類提出先と書類 横浜税関	計画書 パッキングリスト 願い書 航空証明書 パスポートのコピー P2 ～5 メンバーリスト (和・英) 日本通運㈱ 上記と同じ書類 SCAGA (海運同盟事務局) 計画書 輸送リスト 願い書

日本～BCの輸送方法

日本～カラチ	船便 4,442 KGS 25,452 M3 木枠 4ヶ (1ヶ・平均の大きさ、2,300×1,150 ×2,300) 隊荷の梱包はブラパール・ボックス使用 ブラパール・ボックスの大きさ (大・・485 ×295 ×890) ボックスの個数 食糧30個、装備40個、個装17個 その他
カラチ～イスラマバード	トラクター輸送 (通関・輸送業者に依頼) 日本からの隊荷とイギリスからの酸素ボンベ40本
イスラマバード～スカルド	トラック (1台) バス (1台) 酸素ボンベ、現地購入品を含め再梱包
スカルド～ダッソー	トラクター (8台) ボーターの食糧等を購入し、日本から持参したマタイ袋等で梱包
ダッソー～仮BC	ボーター (243名) 途中の最奥の村・アスコールより277名のボーター
仮BC～BC	ボーターを再雇用 (25名)

〔酸素〕

アタック時の長時間行動を考え、容量の多いラックスファー社（アメリカ）の酸素ボンベを使用することとして、アルキャン・アジア・リミテッド日本支社（ラックスファー社の日本支社）に伺い、状況を知ることが出来た。その後、現在まで使用した各隊の関係された方々より貴重なご教示をいただき、直接イギリス（ラックスファー社のボンベを充填している）へ連絡も可能とのことから、テレックスによりコンタクトに入る。内容はバルブの形状・値段等からはいり、発注・代金の支払い方法等すべてを行った。すべてがテレックスによるので現地で確実に入手出来るのか不安はあったが、何隊かこの方法で行っているの間違いは無いとして同じ方法とした。

イギリスからの輸送で直接イスラマバードを希望したが、カラチに着くとのことだった。我々の隊荷はカラチだったので、同時期に通関し、一緒にイスラマバードに輸送した。

〔器具関係〕

☆酸素ボンベ

ラックスファー社（アメリカ）

充填（ライス・サポート・エンジニアリング、イギリス）

充填圧力 310 気圧 (kg/cm²)

容量 4.6 ℓ

酸素量 $310 \times 4.6 = 1,624 \text{ ℓ}$

自重 5.3 kg

バルブ重量 1.0 kg

酸素重量 $1.43 \times 1,626 = 2,039 \text{ g}$

総重量（満タン時） 約8.4 kg

☆減圧器・レギュレーター（流量調節器）

川崎重工製

酸素出量目盛り 0.5:1:2:3:4:5 ℓ/min

目盛り（圧力指示針）・・・ボンベの中の酸素圧力
流量調節・・・毎分当りの酸素の流量

☆エコノマイザー（節約装置）

川崎重工製

吸気時に必要な量の酸素をためるように設計

吸気弁と外気吸入弁があり、吸気時に2つの弁が同時に働き酸素と外気が混じって蛇管を通じマスクに入る

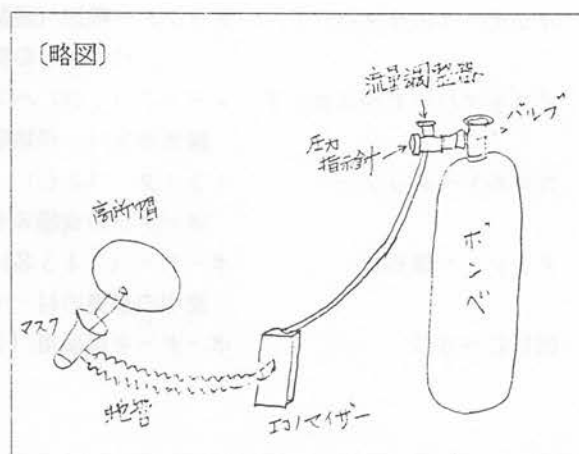
☆マスク（H型マスク）

坂田技研

☆高所帽

高所帽に付いているカギホックとボタンにより着脱出来るようになっている。

○ レギュレーター等の機器類は協会の物を使用した。が、ラックスファー社のバルブと合なかった。ので、アダプターをダイブエイ社に依頼し作成していただく



(使用方)

(使用量)

睡眠用 C 3 (7,400m) 初めて泊まる夜に使用

睡眠 1人・0.5 ℓ / 毎分

〃 AC (7,840m) 毎夜、使用

3人パーティーで 1.5ℓ / 毎分

行動用 アタック

(1パーティーで1本)

医療用 下部キャンプ

行動 1人・1本 (アタック時)

(使用本数・計画) アタック隊 9名

AC (8,200m) 睡眠 3本

C 2 (7,400m) 睡眠 5本

行動 9本

医療 1本

C 3 (7,900m) 睡眠 10本

C 1 (6,500m) 医療 1本

行動 3本

BC (5,500m) 医療 3本

予備 5本

総本数 40本

(持参した酸素器具セット)

10セット

(医療用O2 パック)

ホルダー 2本

キャンドル 10本 (毎分3ℓ・30分用)

マスク 2組

(使用して)

C 1、又はC 2から上部へ上げる場合、2本は重さの関係から無理になる

リークの問題 (以前使用した隊でリークがあった) で、バルブの関係でリークするのではないか、とのことだったが、今回はその以前のバルブのようであった

C 3、ACで使用し気圧低下はあったが、これは気温低下によるものであろう (イスラマバードで1本チェックした時は正常であった)

C 2で緊急用に使用しようとした時、2本あったが1本は空、1本は90気圧しかなく、トランシーバーでその事を聞いた時は、返す言葉もなかったが、原因は解らない

(価格)

40本 158.00 POUNDS STERLING

TOTAL 6,320.0

TOTAL C.I.F BY AIR TO KARACHI ONLY

7,481.0

POUNDS STERLING

注、申し込み 20~22週間前

総価格の50%を発注時

発送の3週間前に残金

〔食糧〕

1、基本方針

- ① 長期にわたる登山のため、食べ慣れている・食べやすい食品の使用で満足感のもてる献立
- ② 経費の節減からも輸送費の軽減
- ③ C1以上については、調理時間が短い、食べやすい、ハイ・カロリー等を考慮し、可能な限りの軽量化を計り、完全レーション梱包にする。

単調な食生活に陥りやすいといったレーション化のデメリットは、各キャンプに特別レーションを配することで対応。他にB Cには、基本献立以外の物を作れるよう融通性のある材料を置く

2、食糧の分類

- ① キャンパン食 現地米主体で日本的副食を添えた4種類の献立、移動日の昼食は弁当
- ② B C食 5～6種類の献立が作れるよう融通性をもった材料、休養日には種々工夫出来る様
- ③ 高所食 インスタント・FD食品、各キャンプに特別レーションBOX
- ④ アタック食 変化のある献立より確実性の高いレーション

3、梱包

- ① キャンパン・B C食 25kgカートン
- ② 高所 レーション化(4人の1日分を最小単位とし3日分、12人日食→12kg)
中カートン(12kg)2個を、大カートンへ入れる
- アタック食 4人の2日分、8人日分→8kg、小カートン(8kg)3個を、大ボックスへ

4、献立

(キャンパン) 朝

- | | 昼 | 夜 |
|----------------|--------------|-----------------|
| ① 米飯・みそ汁・缶詰・漬物 | 米飯弁当・ふりかけ・缶詰 | カレーライス・漬物 |
| ② 米飯・みそ汁・漬物 | 佃煮・漬物 | チャーハン・スープ・漬物 |
| ③ ラーメン | チャパティ・スープ | 米飯・焼肉・スープ |
| ④ チャパティ・スープ | アメ | 米飯・野菜イタメ・スープ・漬物 |
| ⑤ | | 釜めし・吸いもの・漬物 |

(B C)

- | | | |
|----------------|------------|-----------------|
| ① 米飯・納豆・漬物・スープ | チャパティ・果物缶詰 | カレーライス・漬物 |
| ② 釜めし・吸い物・漬物 | 焼ソバ・スープ | ラーメン・漬物 |
| ③ 米飯・缶詰・のり・みそ汁 | スパゲティ・スープ | 米飯・マーボ豆腐・スープ・漬物 |
| ④ 米飯・佃煮・ポテトサラダ | | 米飯・煮物・缶詰・スープ |
| ⑤ ラーメン | | 米飯・八宝菜・漬物 |

(高所)

- | | | |
|---------------|-------------|-------------|
| ① 米飯・缶詰・のり・漬物 | ビスケット・レーズン・ | 米飯(おこわ)・みそ汁 |
| ② 雑煮・もち | チョコレート・酢こんぶ | 雑炊・漬物・みそ汁 |
| ③ 赤飯・みそ汁・漬物 | ・あめ・キャラメル・ピ | 雑炊・漬物・スープ |
| ④ 雑炊・漬物 | ーナツ・ボカリスユット | カレーライス・スープ |
| ⑤ ラーメン | 等の組合わせ | シチュー・スープ・漬物 |

(アタック)

- | | | |
|----------|--------------|-----------|
| 雑炊・餅・みそ汁 | チョコレート・ハチミツ等 | 雑炊・缶詰・みそ汁 |
|----------|--------------|-----------|

(各キャンプ)

水分補給で各キャンプに多量の飲物類を配置(紅茶・コーヒー・お茶・ココア・ミルク・砂糖等)

5、結果

- 隊荷はカラチに約1ヶ月半留まってしまったが、1品だけダメになった以外は、製品の品質は変わることがなかった
- B Cにて多少の不足品があったが、下山する外国隊から譲ってもらえた。不足品は、サラダ油・砂糖・菓子類・生肉等
- 野菜（現地購入）類の輸送に工夫があれば、と考えさせられる
- B Cでの食事当番が必要であった。すべて食糧担当者に回ってしまう
- 特に、高所食では献立表に関係なく食べ易い物から消費される

〔会計〕

収入

隊員	16人×	1,500,000円=	24,000,000円	
協賛	1件×	10,000円=	10,000円	
他			1,450,000円	(途中不参加者)
合計			25,550,000円	

合計25,550,000円で計画を推進し、国内では多くの企業、個人の方々より、ご協力・ご支援・ご教示をいただきまして、予算内で終了することが出来ました。

〔渉外〕

(登山許可申請と推薦状取得に関し、提出先と提出書類)

東京都山岳連盟

海外登山推薦状交付申請書 B 5 1 通
(所属団体代表者名)
誓約書 (登山隊長名) B 5 1 通
和文計画書 B 5 20 部
アプリケーション A 4 1 部
(日山協提出分のコピー) 1 部

日本山岳協会

海外登山推薦状交付申請書 B 5 2 通
(所属団体代表者名)
誓約書 (登山隊長名) B 5 2 通
和文計画書 B 5 20 部
アプリケーション 本文 A 4 2 部
(ビザ用写真を貼ったもの)
コピー 3 部
推薦状交付申請書 (東京都山岳連盟発行) 2 通
誓約書 (東京都山岳連盟発行) 2 通

パキスタン大使館

アプリケーション
推薦状 (英文) 1 通

外務省 (外務大臣官房文化交流文化第二課)

和文計画書 1 部
アプリケーション コピー 3 部
推薦状 和文 正 1 通
和文 コピー 3 通
英文 コピー 3 通
便宜供与依頼書 (派遣代表者名) 1 通
念書 (登山隊長名) 1 通

(文部省後援名儀の取得に関し、提出先と提出書類)

東京都山岳連盟

計画書
(財)日本山岳協会・文部省名儀後援
使用依頼に関する推薦状交付申請書

日本山岳協会

計画書
日本山岳協会後援名儀使用申請書
文部省後援名儀使用依頼に関する
推薦状交付申請書
(名儀後援料 3 万円)
(文部省への副信料 3 万円)
(日山協推薦料 2 万円)

文部省 (体育局スポーツ課)

計画書
文部省後援名儀使用申請書
御後援をお願いする事由
後援名儀使用について (日本山岳協会発行)
派遣母体の活動 (日本ヒマラヤ協会総会資料)

左記の他に

パキスタン・K 2
事故防止対策と緊急連絡網について
日本ヒマラヤ協会発行
ヒマラヤ年報、会員名簿・定款
ヒマラヤ№164、147、148
カンチェンジュンガ・ヌン報告書

解説

バルトロ街道における住民の疾患は下痢、腹痛等消化器系の障害の他、リウマチ様の関節障害、咳そうが多く見られた。良性の甲状腺腫が数多く見られたが訴えはなく、眼病、皮膚疾患等は比較的少なく、骨折等外傷も少なかった。外科的適応の患者は1名のみで、材木片が足に刺さり、化膿した少年に切開排膿を行った。

隊員に見られた疾患では、キャラバン中では、腹痛、下痢等消化器疾患のみで特徴的な疾患は見られなかった。上部へ上がってからは、咽頭痛、咳そうが多く見られ、通常のコキ止めは効果がなく、ネフライザー等が必要と思われ、頭痛、吐き気は多くの隊員に見られたが重症者は少なく、投薬でほぼ改善が見られた。凍傷は新たなものはなく、いずれも以前に凍傷にかかり、その障害が増強したものである。登山期間の長期化に伴い、疲労の為の全身状態の悪化が見られ、これは経験の少ない隊員に多く見られた。

重症例

症例1 伊地知 博 43歳 喫煙(+)

7,400 mのC3サポートで泊まった時、少し息苦しさを感ぜ、食欲は低下した。翌日、不調の為、山田副隊長、塩田(医師)と共に下山の指示が隊長より出され、ACから山田・塩田の2人がC3に下り、2人がC3に着いた時は、比較的元気で、2人にお茶を勧める等余裕を見せていた。

C3から下り始め懸垂氷河の下に着いた時、彼がついてこないことに気づいた。2人で彼の到着を待ったが、吹雪の中なかなか姿を見せなかった。何か事故があったのではと考え始めたころ、ようやく姿を表し、見ているとスロービデオをみているような動きであった。その後、C2まで通常なら2時間くらいで下れる所を1日かかりで下った。途中からはカラビナのかけかえも思うようにできず、懸垂下降でようやくC2にたどりついた。

下りでは、失禁が見られ、呼び掛けに対する反応が低下し、呼吸苦、血性の泡沫タン、湿性のラ音等がみられた。C2ではミドリ安全の酸素を投与し、軽いイビキをかくて寝ることができた。

翌朝、行動前に酸素を吸い、C2からの下り始めは調子良く、下るにつれて動きが鈍くなった。C1からは酸素を吸いながら下り、8 kgのボンベを背負いながらも普通の速さで下ることができた。BCでは呼吸苦は消失し、食欲もでてきたが動作が緩慢で顔色も不良だったので、さらに仮BCへ下り休養後全快し、帰路のキャラバンでは問題はなかった。

診断 高地肺水腫

症例2 熊田 雅史 29歳 喫煙(+)

8,000 mまで登り、約2ヶ月の登山期間が終わりに近付いた頃、過食により下痢、食欲の低下があった。その後頂上アタックに出掛けたが、動きが鈍く体調不全のためC2より引き返した。

BCに暫く滞在し、1週間後下山が始まり仮BC(5,200m)への下りでは歩行がゆっくりで、その後食欲低下が見られ、激しい頭痛を訴え、診察では右半身の知覚障害があり、発熱はなく、血圧、脈拍などは安定していた。1日じゅうテントに寝ていて、紅茶など水分をとるのみで、くりかえし嘔吐が見られた。2日後に、仮BCを下り始め、空身で下ったもののペースは遅くコンコルディアでまったく動けなくなり、ポータ

ーに背負ってもらいゴレまで下ったが、翌日も全く歩けず、トイレも支えないと不安定であり、頭痛でうなりごえをあげていることが多かった為、ヘリコプターを要請した。しかし、ヘリコプターがなかなか来ないのでポーター8人を新たに雇いタンカを作って下山を始めた。ポーターはタンカの扱いに慣れていない為、途中から背負うことになる。

ウルドカスまで下ったところでヘタコプターが飛来し、スカルドに行き、スカルドのヘリポートから救急車で病院に運ばれ入院した。1週間、食事が取れていなかったため脱水があり、点滴を開始、頭痛、胸痛はあるものの、意識は鮮明であった。その夜、急速に脈が落ち、30台となって意識レベルがやや低下しアトロピンの投与を行い、この時の心電図では不整脈がみられた他、V1-4のT波の逆転が見られた。アトロピン投与後脈拍50前後に上昇し、その後、頭痛、胸痛は改善傾向を示した。

発病約1ヶ月後、帰国し入院検査をおこなったが、心電図は正常化し、頭部CTスキャンにても異常は見られなかった。

診断 脳静脈血栓症疑い

研究

今回次の研究を行った。

- 1, 高所に於ける体温について
- 2, 高所順応の過程と心電図変化について
- 3, 超高所 (8,000 m)におけるホルター心電図の変化について

以上の3点についてリサーチを行った。結果についてはデータがまとまりしだい報告する予定です。

不調後の体調及び状況

熊田雅史

3回目のアタックでC2に移動した私は1日の停滞後、体調が下り気味なのを知りアタックを断念しBCへ下降した。

2回目のアタックで8,000 mまで達しBCに下降後3日間の休養をとっていたが1日目の夜、食べ過ぎで吐いてしまい翌日は顔が腫れ、体は疲労にどっしりと包みこまれ、体を持ち上げるのがやっとの状態で1日酸素を吸うハメになる。翌日には回復したがまだ少し疲労が感じられた。しかしこのまま断念する気は起きず、翌日3回目のアタックに向かう。体は十分動いたがC2までのタイムは、これまでの最低であった。

この2回目のアタック終了後から私の今回の不調（極度の疲労と頭痛）の始まりであったと思われる。断念後BCでの休養を始めてから頭痛が出はじめ、これまで経験した高度障害の頭痛とは明らかに異なる痛みで、まるで鉄の輪を頭にはめこまれたような感じであった。体の方はまだ十分動くので4日休んだ後、撤収のためC1まで酸素の荷下げに行く。頭痛はひどいが行動は問題なかった。疲労が激しくなったのはBC撤収の前日で、昼頃急に重い疲労感を覚えテントに入り横になった。個装のバックギアがあったがとてもする気にはなれず寝ていた。撤収ではやっとのことで個装をバックギアするがザックとカートンボックスをつけた背負子がかつげず、ザック一つで下山する。フラフラしながらなんとか仮BCに到着するが、食事後立ちくらみの様になりテントに入り酸素を吸わせてもらう。夜は2度吐いた。頭痛がひどく仲々寝らねなかった。翌日は1日休養するが小用に行くのがやっとならった。

仮BCからは空身でドクターと共に出発する。ストックをつきヨタヨタ歩き続ける。ブロードピークのBCではお茶を飲ませてもらうが歩き始めてすぐ吐いてしまう。やっとなコンコルディアに着き、お茶とビスケットを食べるが、ここからはもう2〜3歩動くだけで座り込んでしまう状態で歩行不能になる。幕場はゴレなのでここからはポーターに背負われて行く。意識はあるが頭痛やしびれ（左手、顔半分）はかわらずボーとしている。夜遅くゴレに着き、ポカリスエットとビスケットを食べる。夜は熟睡する。朝は1時間程歩きまた歩行不能になる。

ここでテントを張り翌日は停滞となる。この間ずっと横になり、状態は変わらなかった。翌日ヘリが来ないのでまたポーター達に背負われて行く。ウルドカスに着くとすぐヘリが到着して、スカルドに向けすぐに病院に入る。血圧、心電図等の検査を受ける。脱水症状を起しており初日は点滴を受け、約1週間入院。

その後イスラマバードに移るがこの頃には普段の生活をする程度に動けるようになっていた。頭痛も以前に比べれば大分やわらいできたようだ。帰国後すぐに入院し検査を受けるが頭部に異常は無いが、血液の流れが悪く疲労の回復と共にしばらく時間がかかるということであった。

直接的な原因はわからないが長期間の高所での生活で蓄積した疲労が一度に出たものと思われる。頭痛については4年前の遠征で帰路3〜4日同じ痛みが少しあったのを記録している。

いずれにせよ自己管理面の不徹底と行動での自分の体調の読みが大事である事を思い知らされた次第である。最後に私のこの高度障害の為に、隊長を始め多くの方々にご迷惑をおかけいたし、深くお詫び致します。

登頂が目的であったが、初めての8,000m峰チャレンジで最終キャンプまで到達できたことはまず納得のいく高度であった。

2週間のキャラバンの末、仰ぎ見たK2の大きいこと。はたして自分はどこまで登れるだろうか・・・、心の中では頂上を目指している。だれもが同じだろう。

登山活動の前半はさしたる故障もなく順調に高度にも馴れたがピッチの上がらないことはトレーニング不足のせいだろうか。

順調にいていた身体も後半アタック隊のサポートでC3に上がった時点で不調をきたした。テント内に落ち着き軽く食べ物を取った後、横になっていたが、食べ物が胃に落ち着かずとうとう戻ってしまった。これを境に咳がひどくなり身体を動かすのも大儀になり飯も食べずに寝てしまった。一晚中大儀な夜が続き用足しに外に出る気もなかった。スイッチを入れたままのトランシーバーで2次アタック隊の出発をうつらうつらのうちに聴いた。夜が明けその後の動向が気になが何もする気力がない。武部の作ってくれるお茶をやって身体を起こして飲むだけだ。10時頃だろうか身体がいくらか楽になり交信してみる。応答なしバッテリー切れだ。交換しようと捜すが見つからず使用済みのバッテリーを温めて使う。BCを呼ぶとACが私達と連絡できず心配している由すぐ連絡する。2次アタックは今日は中止。山田（昇）、ドクターがこれから下降するので私も一緒に下降することになった。準備をして待つ。

下りだして暫くすると息苦しくなり一ピッチ下っては呼吸を整えて、すぐ二人からは遅れてしまった。四ピッチ下ったところに4～5mの氷壁がある。ここを下っている時に最高に息苦しくなってしまうフィックスに身体をまかせうずくまってしまった。身体にちょろちょろと温かい物が走るがどうすることもできなかった。呼吸を整えゆっくり下る。あまり遅いので吹雪の中二人が心配して待っていてくれた。私の様子にただごとではないと、以降は二人が付き添ってくれた。各キャンプに急を告げる連絡をしていたようだがそれを理解する余裕は全くなかった。ゆっくりゆっくり下る。少し早くなると猛烈に苦しく小便をちびる。一ピッチづつ呼吸を整えながら下る。

C2に着きO2バックを吸った時の安心感。これほど酸素がうまいものなのか。横になっていると苦しさもなく楽だった。レギュレーターがC3から届きボンベからの吸入に変えると安心したのかぐっすり寝ることが出来た。夜中息苦しく目覚めると酸素はからだだった。朝まではたいしたことなく寝ることができた。お茶を飲み残りのO2バックを吸いながら出発準備をする。大変楽だった。出発する頃には使いはたし酸素なしで下る。30分ほどは良かったがまた息苦しくなり前回同様の下降となった。C1まで頑張ればいい。そこには酸素のデポがある。今日は朝からの下降、天気はいいので気分的に楽だった。

C1で1時間たっぷり（3ℓ/毎分）酸素を吸い、身体は楽になった。お茶もたっぷり飲んだ。ここからは酸素を吸いながら下る。8kgのボンベが背負えるか不安だったが重さを感じさせなかった。途中からは付き添ってくれた人より先に尻セードで一気に下ってしまい何時もと変わらぬ調子であった。BCでは皆が心配して出迎えてくれ、改めてことの重大さを知った。

酸素を吸い高度も下がったのでマスクを外してもいままでの苦しさはなかった。お茶をたっぷりもらい毎分1ℓの吸入でゆっくり休んだ。何時間寝たのかわからないが酸素が切れて目を覚ますとすっかり辺りは暗く夜だった。テントにはお茶と新しいボンベが用意されており心づかいが嬉しかった。

翌、翌々日とテントの中でゴロゴロ、軽く食事を取るという生活で酸素は吸わなくても動けるまでに回復した。登山は終期で最後のアタックをかけるのみになっており、隊長、ドクターの言にしたがい仮BCに下ることにした。下った日と翌日はまだゴロゴロしていたが3日目からは従来通りの生活に戻った。



絵はがき作図・村松 昭氏

(表紙・P29・P125)

HAJ K-2 EXPEDITION 1985

-Report of climbing K-2 (8,611m) by the South East Ridge (Abruzzi Ridge) -

by Kenji Yoshida

You might be ask how come we would climb K-2 by the Abruzzi redge. It's already climbed many times by other parties. Anyway we were materializing the plan longing the elevation of 8,611m before everything else. We cannot help having to be attracted by such height, because our dream is not only to explore unknown area but also to get such a height.

K-2, we have been facing to it for three years in our mind. It was more severe and excellent mountain than that of our image. Our romanticism for height will never loose in the world as long as are mountain there.

Leader : Kazuo Tobita

Vice-leader : Hisashi Nakaoka, Noboru Yamada

Climbing Leader : Kenji Yoshida

Doctor : Junichi Shiota

Member : Osamu Yamada, Hiroshi Ijichi, Kijuro Endo, Masanobu Tsuchiya
Hideo Takebe, Yuetsu Ishida, Noboru Hosokai, Kazunari Murakami
Toshiaki Sakaue, Masafumi Kumada, Yuko Okada

Caravan

We arrived in Skardu on may 30th. Hiring porters and unloading equipment on tractors. The caravan started from Dasso with 243 porters on June 1st. We marched along Baltoro street favorabily looking up many excellent peaks such as Trango Tower, Masherbrum, Gasherbrum and Broad Peak etc.. We reached our provisionai Base Camp at 5,200m of Godwin Austin Glacier on June 11th.

Camp making and unloading

We carried our loads ourselves and moved Base Camp to 5,500m at the base of the Abruzzi Ridge, which we set up on June 20. We started practical climbing on June 22nd. We set up Camp I at 6,250m on 26th, Camp II at 6,800m above House's Chimney on 28th and Camp III at 7,400m on July 6th. After that, unloaded needed equipment and prearranged place for Camp IV on 7,840m. Everyone gathered at Base Camp and took a rest.

First attempt

The attempt members planned were N. Yamada, K. Murakami and myself as the first party and K. Tobita, J. Shiota, M. Kumada, N. Hosokai, T. Sakaue and Y. Okada as the second party.

July 16th - the first attempt party left Base Camp and the next day the second attempt party also left Base Camp in the fitfully snow. The first party got into Camp III and the second party to Camp II.

18th - The first party reached at 7,840m by hard unloading and set up Camp IV. The second party remained Camp II because of storm.

19th - The snow storm was still blowing. So the attempt was given up and all of us nine went back to Base Camp.

Second Attempt

After two days of waiting for clear weather, same three as the first party and six as the second party moved to Camp II.

23rd - Nine the first and second attempt members got in Camp III. And the first members moreover went to Camp IV. The weather was getting better. We were tense with expectancy for the next day.

24th - The first three Yamada, Murakami and I left Camp IV at 2:30 A.M. and climbed up the shoulder. Then we climbed the rocky couloir which led us to the bottom of the hanging seracs. The deep snow was troublesome as we passed through the seracs on the left side. Though temporarily stopped by the weather, we reached the summit at 1:40 P.M. Murakami and I used oxygen. The second party moved to Camp IV and prepared for the attempt of the next day.

25th - Going higher the second party, stronger the wind blow and getting like blizzard. So they gave up and came back to Camp IV.

26th - Everyone gathered at Base Camp again.

Third attempt

It seemed to be the last attempt of this expedition. Same six members for the attempt and four the unloading left Base Camp on July 31st. But rough weather prevented them from setting out over Camp III. On August 5th morning Tobita, Shiota, Hosokai and Okada talked together to give up the attempt. And the next day they went back to Base Camp leaving Camp IV because it was so dangerous to collect it prevented by much snow.

ご協力者名簿

多くの方々に、大変お世話になりました。心からお礼申し上げます。

団体（敬称略）

(株)ICI石井スポーツ

旭塩業(株)

味の素(株)

(株)アックス

アルキャン・アジア・

リミテッド(株)

(株)アルテリア

アルファー食品(株)

栄太楼総本舗(株)

エキスパートオブジャパン

(株)S・S・C

エスエス製薬(株)

(株)エバニュー

エバラ食品工業(株)

海老屋総本舗

(株)遠藤度量衡

大阪商船三井船舶(株)

大塚製薬(株)

(株)常屋食品

海運同盟事務局

加藤美峰園

河合防塵眼鏡(株)

外務省情報文化局

キッコーマン(株)

(株)木村コーヒー

(株)キャラバン

佐藤食品工業(株)

サントリー(株)

山陽スコット(株)

在日パキスタン大使館

(株)資生堂

(株)シナノ

ジャパングアテックス(株)

新高化学工業(株)

新名糖(株)

鈴木酒造場

(株)水交社

セメダイン(株)

ソニー(株)

泰東製鋼(株)

太陽工業(株)

高砂香料(株)

ダイブウェー社

(株)ダックス

ダマール(株)

中央ユアサ電池販売(株)

(株)忠実屋

営業企画室

食品商品事業部

月星化成(株)

ツルタ産業

(株)テルモジャパン

東海漬物(株)

(株)トーモク

(株)渡会本店

東京都山岳連盟

東京パイプ

東邦キャンピング販売(株)

東レ(株)

(株)トンボ鉛筆

ニッカウイスキー(株)

長野トマト(株)

日新運輸倉庫(株)

日設工業(株)

日本アラジン

インターナショナル(株)

日本エフディ(株)

日本缶詰協会

日本ガス機器協会

日本紅茶(株)

(株)日本山岳協会

日本ステンレス(株)

日本タッパウエア(株)

日本通運

東京海外引越支店

横浜海外引越支店

晴海埠頭支店

海外引越作業課

日本ボラロイド(株)

日本マタイ(株)

ハウス食品工業(株)

八王子山の会

PIA

日立マクセル(株)

富士写真フィルム(株)

富士酒造

藤森工業(株)

ほてい缶詰(株)

本田技研工業(株)

マウンテントラベル(株)

前橋山岳会

マジックマウンテン(株)

丸美屋食品工業

(株)マルハチ

三井農林(株)

(株)ミツウロコ

明星食品(株)

明治製菓(株)

文部省体育局

山本光学(株)

矢崎加工(株)

リーベルマン・ウェルシュリー

& CO., S・A

理研ビタミン

(株)ロッテ

個人（敬称略）

朝路	太田 行雄	越谷 英雄	杉本 忠男	永井 豊	宮崎 久夫
浅地 徹	大宅 恒明	小島 重男	鈴木 恵慈	名塚 達夫	三好喜代美
阿部 淳	大谷 映芳	小西 政継	鈴木 英二	成尾 竹俊	向井 文雄
天城 敏彦	大滝憲司郎	小林 一夫	鈴木 莊平	西原 正	村松 昭
々 素子	大塚 岩夫	小林 英見	鈴木 直勝	西村 賢太	恵 秀機
荒井 義二	大西 保	小林 宏	鈴木 正幸	貫田 宗男	茂木 孝男
安藤 芬	大宮 求	小林 睦子	鈴木 雄一	納富 則夫	望月 澄男
安部 誠	尾形 好雄	小松 幸三	住本 芳克	延地 京子	盛合 富雄
飯田 邦幸	小川 貞夫	小松 伸	関 久雄	橋本 康広	森 昌之
五十嵐文典	小川 裕三	小山 和博	宋 時栄	原 喜代司	森 秀子
池田 好蔵	奥村 博	近喰 司	高橋 照	原田 達也	森川 洋佑
石井 貞男	小島 守夫	斉木 秀雄	武井 明暢	針ヶ谷栄次	森田 雅博
石川 昌	落合 樹夫	三枝 照雄	武田 久雄	半貝 貞夫	森山 安次
石川 忍	小野 義生	斉藤 一男	館野 秀夫	常陸 民生	八尾 正博
々 恭子	香川 毅	斉藤 隆	谷野	日比野晶一	八木 正雄
石田 稔郎	粕川 雅子	斉藤 秀雄	田辺 史	平井 清美	八木原罔明
伊藤 正毅	片山 利光	斉藤 光明	田原 宏史	平田 清志	八嶋 寛
稲木 昌夫	勝田誉士雄	坂入 一彦	玉本 浩一	広島 三朗	柳 穰
稲垣 公平	加藤 和人	迫田 泰敏	玉田 仁	深田 良一	山倉 洋一
稲田 定重	加藤 孜	佐々木 徹	丹部 節雄	福島 功夫	山口 善弘
伊吹 景子	金尾 左内	佐藤 芳夫	長 繁男	福島 重男	山下 誠一
入倉 勉	金子 利三	佐藤 武俊	角田 照子	福山 佶	山下 稔
岩崎 章代	鎌田 久	柴田金之助	釣部 恵子	藤原 一孝	山田 勲
岩水 龍峰	神長 幹男	渋谷 寿雄	鶴巻 義明	古館 尚樹	山本 明人
植松 秀之	上村 光司	清水 清二	出口 當	星野 貢	山森 欣一
内田 嘉弘	川崎 利幸	清水美恵子	出口 隆好	細貝 勝	湯沢 好夫
遠藤 京子	川嶋 保幸	庄司 順子	寺沢 玲子	々千佳子	吉井 保徳
遠藤 俊雄	木村 陽子	白田 剛	寺本 正史	本多 昭一	吉田 貞正
遠藤 登	国井 治	新貝 勲	土居 正勝	町田 清伸	芳野 起夫
遠藤 博也	久保 開次	秦 国雄	中岡 武男	松元 邦夫	吉崎四一郎
々 智子	栗山 康雄	新郷 信廣	中川 裕	丸山 嘉浩	渡辺 均
大内 論文	小池 澄子	神宮 正夫	中込清次郎	水野 克己	若尾 卷広
大久保 博	小泉 乙也	菅原 道夫	中野 圭一	峰尾 勝美	山口 由子
大沢 清美	小鍛冶 正	菅沼 勲	中村 正幸	宮阪 憲一	

現地でお世話になりました。（敬称略）

在パキスタン日本大使館

鷲原 茂樹

遠藤 雄悦

シルクロードツアーサービス

督永 忠子

高橋 堅

関西カラコルム登山隊

アリ・ミルザ

編集後記

とにかく終わった。日本ヒマラヤ協会 K 2 登山隊1985は終わった。と、報告書発行の糸口を掴めて、しみじみと感じている。

16名のメンバーが、K 2 を目指し、K 2 に抱かれながら、好天の下・吹雪の中・強風の中で、ルート工作・荷上げ、そしてテントの中で、あえぎ・苦しみ・笑い・語り・そして泣いて笑って K 2 から戻って来た。

K 2 を通じて、それぞれが何を感じ、何を想い、何を得たのか、知るすべもないが、これだけは知っている。共に、威風堂々とした山容・ピラミダルな頂き・8,611 mの高みを求めての K 2 だったことを。

内容的に不十分な事項がある、登山の分析もそうだが、国・内外の渉外関係もそのひとつだ。が、切羽つまらないうと出来ない性分はどうにもならず、次の遠征に向けて限られた時間内に出版しなければならないことが、その結果とも思っている。

いずれにせよ、1985年の K 2 は終り、1985年 8 月 6 日に、吹雪の中、K 2 に背を向けざるをえなかった事が、新たな K 2 へのスタートになりそうだ。

1986年 1 1 月末、中国のチベット・ギャラペリから戻った。出発前のあわただしさの中での作成は、やはりミスが目立ち、再度の見直しの為に発行は遅くなってしまった。

(飛田)

K 2 (8, 611 m)

高みを求めて

発 行 昭和52年2月1日
発行人 日本ヒマラヤ協会 K 2 登山隊1985
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号
☎ 03-367-8521
編集人 飛 田 和 夫
